平成２６年度コンテンツ産業強化対策支援事業

映画上映に関する バリアフリー対応に向けた 障害者の視聴環境の 在り方に関する 調査事業

平成27年3月
報告書

特定非営利活動法人 メディア・アクセス・サポートセンター

はじめに

わが国の映画、アニメ、音楽ビデオなどの映像コンテンツは成長分野として海外にも市場拡大を図る一方、国内に目を向けると「聞こえない」「聞こえにくい」「見えない」「見えにくい」といった困難を抱える人は、そのコンテンツに自由にアクセスできていない。

2006（平成18）年の国連総会において障害者権利条約が採択されたことを受け、わが国においても2014（平成26）年１月に本条約が批准された。本条約に定められる障害者のとらえ方やわが国が目指すべき社会の姿を新たに明記するとともに、障害者施策の推進を図るため、目的を明確化する観点から2011（平成23）年に障害者基本法の改正が行われた。本改正を踏まえ、2013（平成25）年に障害者施策の基本原則を見直し、総合的かつ計画的な推進を図るため、2013（平成25）年度から2017（平成29）年度までの概ね５年間に講ずべき障害者施策の基本的方向について障害者基本計画が策定された。

また、2013（平成25）年６月に障害者差別解消法が制定され、2016（平成28）年４月１日から施行される。これら一連の関連法の成立に伴い、障害者関連法における「合理的配慮」として、障害者の文化的生活の享受についても、障害者のための環境整備等適切な措置をとることとされている。映画の視聴環境についても障害者差別解消法にかかる措置の対象とされているが、事業者の努力もあり、字幕付与率は年々高まっているものの、映画館等のインフラや音声ガイドなどのバリアフリー対策を含め、必ずしも十分に整備されていないのが現状である。

そこで、本事業においては、映画字幕や音声ガイド制作に関する技術開発の動向について調査するとともに、障害者の映画視聴に関してどのような環境的制約があるか、また、どのようなニーズがあるか等について実態を把握することを目的とする。本事業の実施を通じ、事業者にも配慮をしながら、映画上映に関するバリアフリー対応に向けた障害者の視聴環境の在り方における留意点をまとめた指針の作成に向けた課題を整理し、障害者にとって適切な映画の視聴環境の整備の促進を図る。

ここに「映画上映に関するバリアフリー対応に向けた障害者の視聴環境の在り方」について報告する。

特定非営利活動法人メディア・アクセス・サポートセンター

※報告書文中の氏名は敬称を略します。

目次

１章　障害者に対する適切な視聴環境の在り方に関する調査

Ａ. バリアフリー映画の現状と課題 ･････････････････････････････ 4

Ｂ. 団体ヒアリング
一般社団法人 全日本難聴者･中途失聴者団体連合会･････････････ 7
一般財団法人 全日本ろうあ連盟･････････････････････････････ 9
社会福祉法人 日本盲人会連合･･････････････････････････････11
社会福祉法人 日本点字図書館･･････････････････････････････13
社会福祉法人 日本ライトハウス情報文化センター･･････････････15

Ｃ. 個人へのヒアリング調査 ･･････････････････････････････････17

２章　映画字幕及び音声情報に関する技術開発動向等に関する調査

Ａ. アメリカ､イギリス､韓国､日本の現状と動向／国内外状況調査 ･･････24

Ｂ. 第27回東京国際映画祭共催企画
映画の未来～新しい映画鑑賞システムを体験!! ･･････････････････29
Ｃ. 新システムの実地調査 ･･････････････････････････････････････32

３章　障害者に対する適切な視聴環境の在り方に関する検討

第１回 有識者会議（平成27年１月23日）･･････････････････････････41

第２回 有識者会議（平成27年２月20日）･･････････････････････････55

４章　まとめ ･･71

1 章

障害者に対する
適切な視聴環境の在り方に
関する調査

バリアフリー映画の現状と課題

武藤 歌織（調査員）

進まぬバリアフリー映画環境

日本で2014年に公開された映画は615本（日本映画製作者連盟発表）。そのうち、聴覚障害者に配慮した日本語字幕付き作品は66本（11％）、視覚障害者に配慮した音声ガイド付き作品は６本（１％）だった。この数字は、ここ数年、横ばいで推移している。DVDやBlu-rayも含めた場合、2011年度において8669作品のうち、日本語字幕付与は282本（４％）、音声ガイド付与は13本（0.1％）とさらに低くなる。（NPO法人メディア・アクセス・サポートセンター〈以下、MASC 調べ〉

これは、ニーズがなかったからではない。今回MASCが行った当事者団体、および、個人へのヒアリング調査結果からも、日本語字幕・音声ガイドが用意されていれば映画を観たいと思っていることは明らかだ。聴覚障害者からは、字幕が付く洋画は観るが、邦画は「諦めていた」という声が聞かれた。また、洋画に字幕が付いていても、多数の登場人物が話すシーンや画面に映らない人物のセリフなどは、分からないとの指摘がある。視覚障害者からは、セリフがまったくないクライマックスなどは正確に理解できず、映画の内容についていけないと、日本語字幕や音声ガイドを求める声が挙げられた。いずれも、「会社の同僚や家族と映画の話題を共有したい」「映画館でみんなと一緒に笑ったり、泣いたり楽しみたい」との願いが明らかになった。

日本語字幕・音声ガイドの黎明期

反響の大きさに、顕在化したニーズ

日本において、そのような声なき声を聞き、邦画に日本語字幕を付けようとするボランティアグループが現れたのは1980年代。その一つである名古屋のボランティアサークル要約筆記等研究連絡会「まごのて」によると、当初は、映画の音からセリフや物音・音楽表現などを文字に起こし、15文字２行に手書きした字幕をOHPにより投影していた。その後パソコンの普及により、作成した字幕を映画本編と同じタイミングで再生しながらビデオテープ（後にDVD）に収録し、映画本編に合わせて再生を開始、液晶プロジェクターで映画スクリーン脇に投影するという方法を用いて、映画館で聴覚障害者が健常者と共に映画を観る機会を提供するという活動に取り組んできた。

セリフや物音・音楽表現を文字にする日本語字幕に対し、場面転換や動作・表情などの映像表現を言葉にするのが音声ガイドだ。「バリアフリー映画鑑賞推進団体シティ・ライツ」は、視覚に障害のある人と映画館で映画を楽しもうと、2001年に活動を始めた。視覚障害者の隣に目の見える人が座って、小声で囁くことから始まり、話し声が迷惑にならないようにと、FM波で音声ガイドを送信するしくみを考え出す。製作・配給と上映館の許可と協力を得て、事前に音声ガイドの原稿を作り、朗読を録音。FM送信機材と貸し出し用ラジオを上映館に持参する。セリフと音声ガイドが被らないようにするために、音声ガイドのみと映画本編のみのチャンネルを設け、上映時は常時、映画本編の音と、録音した映画の音とが同期しているかをオペレーターがチェックする。

このような各地でのボランティア団体の取り組みが、障害者の期待やニーズを顕在化させた結果、バリアフリー化に取り組む製作・配給会社も現れてきた。字幕付きでの劇場公開は、1990年代から始まり、音声ガイド付きも、2007年に映画『武士の一分』（松竹）が全国５都市で興行された。この映画は、音声ガイドも映画本編同様、オープンに流す方式で行われた。

しかし、これらバリアフリー映画の取り組みが広がってきてはいるものの、限られた場所と日時での興行であること、上映時には付いていた日本語字幕

や音声ガイドもDVD、Blu-rayで販売される際やテレビ放映時には付いていない場合があること、そして、日本語字幕や音声ガイドの制作費・オペレーション経費などが負担増になることなど課題も多い。

新技術で映画のバリアフリー化目指すMASC

MASCの前身事業「web-shake 字幕をつけ隊！」が、映画のバリアフリー化を目指し、インターネット上にサイトを立ち上げたのが2006年。既存の方法やコストにとらわれない形で字幕の付与を進めるために必要なしくみづくりの研究を前年から始め、聴覚障害者への情報保障として、字幕のないDVDにインターネット上から字幕を同期配信して表示させるサービスの配信実験を2007年にスタートさせた。

※2011年、「おと見」に統合。「おと見」とは、字幕・手話をネットから読み込み同期表示させながらDVD映像を見ることができるプレーヤーのこと。聴覚障害者の個人使用に限りMASCが無償提供している。

DVDへの字幕を付けるリクエストが多数寄せられ、「障害者割引ではなく、字幕を付けてほしい」「私は死ぬまで、この映画を観られないのか？」「テレビシリーズに字幕があるのに、その劇場版に字幕がない」「字幕があれば、DVDを買うのに」など、切実な声があがった。

2009年にNPO法人の認可を受け、MASCを設立。1.バリアフリー・データを公的にアーカイブし運用する、2.映像コンテンツに対する情報保障の研究と開発、3.ニーズに合った日本語字幕・音声ガイド制作者の養成、4.普及促進と調査・提供の４つの柱で、活動を展開。国内初の試みとして、2010年には、最新の邦画への連続定期バリアフリー上映鑑賞サポートを毎週日曜日に実施。その際には、計17作品に対し、開発したマスター音声に同期する字幕と音声ガイド配信システムを使用した（テアトル蒲田/蒲田宝塚にて2011年３月まで実施）。また、公開中の最新邦画複数作品のシネコン同時バリアフリー上映企画と上映サポートを埼玉県とともに行うなど、積極的に活動を展開してきた。

また、2012年からは、テレビ放送における情報保障の状況把握および研究のため、BS放送の聴覚障害者用字幕、視覚障害者用音声ガイドの制作を開始している。

法のもと、映画のバリアフリー化に一丸

新開発の「音声透かし技術」に期待高まる

世界的な情勢も大きく進展し、国連総会で障害者権利条約が採択（2006年）されたのを受け、日本が「障害者権利条約」に署名（2007年）、「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律(障害者差別解消法・2016年４月１日施行)」が制定され、2014年に同条約を批准した。国会では2013年に、超党派による「障害者の芸術文化振興議員連盟」（会長・衛藤晟一議員）が設立され、障害者の創作活動の普及や支援、映画を含めた芸術作品に触れるための情報保障についての議論が始められた。また、この間、著作権法の改正により、映画や放送番組への字幕の付与、手話翻訳など、障害者の情報利用の機会の確保のための措置としての幅広い対応が認められるようになった。

東京国際映画祭では、2011年にバリアフリー企画が実現し、『幸福の黄色いハンカチ』のバリアフリー上映とシンポジウムが開催された。MASCは全面的に協力し、開発中のオリンパス製HMDを使用した、日本語・英語切り替え可能な劇場配信字幕表示システムを披露した。その後、同映画祭でバリアフリー企画が継続されている。

2013年には、MASCによって、新開発の「音声電子透かし技術」を使ったバリアフリー上映システムが提案された。情報保障インフラの整備を掲げ、劇場公開・テレビ放送・DVDやBlu-ray、BS/CS放送、ネット配信など、同じ作品が多数のメディアで展開される場合、日本語字幕や音声ガイドのデータを共有できれば、無駄なコストの負担がなくなるという提案だ。これは新技術により、効率的かつ効果的に運用できると製作関係者からも注目され、2014年の同企画では体験視聴が行われるなど、「誰もがいつでもどこでも」映画を楽しめる環境整備が動き出している。

【日本語字幕】

聴覚に障害のある人に配慮した字幕で、セリフだけではなく話者（話し手）の名前、生活音や効果音、音響・BGMなどを文字化したもの。

【聴覚障害者】

聞こえの不自由な人で、聴覚障害の原因や種類、聞こえの程度はさまざま。音声言語を獲得したのちに聞こえなくなった「中途失聴者」、聞こえにくいけれど、聴力がある「難聴者」、音声言語を習得する前に失聴した「ろう者」と分けることもある。聞こえる人のことを「聴者」ともいう。

【音声ガイド】

情景、場面、人物の動きなど、視覚的情報を言葉で説明するナレーション。音声解説、副音声とも呼ばれている。

【バリアフリー映画】

日本語字幕と音声ガイドが付与された映画。

【視覚障害者】

視力や視野に障害があり、生活に支障をきたしている状態を視覚障害という。視機能がほぼ使えない状態を「全盲」、少しは視力のある状態を「弱視」または「ロービジョン」という。ロービジョンの見え方は人によりさまざま。一方、視力や視野に障害のない人を「晴眼者」ともいう。
また、視覚障害者が使う文字「点字」に対して印刷された文字を「墨字」ともいう。

【おと見】

字幕・手話をネットから読み込み同期表示させながらDVD映像を見ることができるプレーヤーのこと。聴覚障害者の個人使用に限りMASCが無償提供している。また、MASCは、字幕制作ソフトウエア「おこ助」も開発している。

【HMD】

ヘッドマウントディスプレイ（Head Mounted Display）。頭部に装着するディスプレイ装置のこと。ウェアラブルコンピュータの一つ。スマートグラスとも呼ばれる。

【音声電子透かし技術】

映像データの音をスマートフォンなどのマイクで拾い、映像と同期して音声ガイド、もしくは、HMDなどで字幕が出るしくみ。事前に専用アプリのインストールが必要。

参考資料：

2014年全国映画概況（日本映画製作者連盟）
http://www.eiren.org/toukei/img/eiren_kosyu/data_2014.pdf

要約筆記等研究連絡会「まごのて」　ウェブページ
http://www.normanet.ne.jp/~meina/magonote/index.html

季刊誌「いくお～る」
（NO.26, NPO法人ベターコミュニケーション研究会〈BCS〉発行）

「もののけ姫」字幕付き上映について　ウェブページ
http://www.asahi-net.or.jp/~hn7y-mur/mononoke/monolink09.htm

バリアフリー映画鑑賞推進団体シティ・ライツ　ウェブページ
http://www.citylights01.org/index.html

住友商事株式会社　ウェブページ
http://www.sumitomocorp.co.jp/news/detail/id=26574

NPO法人メディア・アクセス・サポートセンター　ウェブページ
http://npo-masc.org/achievement/

団体ヒアリング

一般社団法人 全日本難聴者・中途失聴者団体連合会

小川 光彦　【聞き取り】

1. 映画上映に対する過去の要望・取り組み

・経済産業大臣に2007（平成19）年、「日本映画への字幕付与に関する要望」を提出。
文化芸術振興基本法第21条に基づき、以下を要望。

> 1. 日本映画にも字幕付与映画の字幕率向上のため、制作費助成制度を設けてください。
> 2. 劇場の芸術的環境を壊すことなく、音声を利用できる補聴援助システムとバーチャル・リアリティ等の情報通信技術を使った字幕表示システムを総合的に構成し、難聴者が普通の人と一緒に理解できる情報保障システムの開発・設備化をして、舞台芸術の鑑賞ができるようにしてください。
> 3. 文化芸術に関係するイベントに、話の文字表示、字幕等を付与するようにイベント実施要領等で規定化してください。

・文化庁長官に2011（平成23）年、「日本の文化芸術のバリアフリー化要望」を提出。

> 1. 日本映画の情報バリアフリーの実現のため、字幕制作ガイドラインを作成してください。電話の音やドアが開く音など、画面に現れない「音」を説明することや、字幕の文字の大きさ、色、背景とのバランス、要約の程度、表示時間等、読みやすさ等に配慮した統一規格・規定づくり。そして、当事者が関わって作成すること。
> 2. 映画やDVD等の情報バリアフリー化を援助する、財政支援措置を実施してください。テレビの字幕は、総務省（当時・郵政省）の作成した指針や予算的な補助があって普及してきている。映画やDVD等も財政支援を実施してほしい。
> 3. 市販の映画ソフトコンテンツの字幕付与義務づけを実施してください。

・毎年開催している全国中途失聴者・難聴者福祉大会で、次の内容を大会決議に盛り込んでいる。（2010年の第16回大会から昨年の2014年の第20回大会まで継続して決議）

> 社会のあらゆる分野での情報・コミュニケーションの保障を進める。
>
> 放送・通信、就労、教育、司法、選挙、交通、防災、文化・スポーツ等社会のあらゆる分野で難聴者、中途失聴者の情報保障、コミュニケーション支援に関わる法制度の整備を求める。
>
> （説明）障害は社会の姿勢並びに環境に関する障壁との相互作用という社会モデルの考えに基づきユニバーサルデザイン、情報バリアフリーの実現した環境整備とコミュニケーション支援体制の充実を求める。
>
> 各種補聴援助システム機器の設備、光・振動等信号装置、字幕とリアルタイム文字の表示、要約筆記などのコミュニケーション支援、電話リレーサービス、遠隔通訳など必要な場における適切な対応が図れる合理的配慮を求める。公共交通機関の運行情報や公共施設における文字表出、災害時情報の文字伝達、教育の場での情報保障、娯楽施設、文化施設での文字による情報保障と補聴援助システムの整備や設置を求める。

・要約筆記のボランティアグループ「まごのて」（名古屋）が1980年代から映画に字幕を付与する活動を始めた。この取り組みが大きな契機となり、それまで諦めていた邦画に字幕付与を求める声が高まり、現在に至る。

　1997年に公開された映画『「もののけ姫」』に、「まごのて」が東宝から許可を得て、国際劇場の協力のもと、上映時、スクリーン脇に字幕を投影した。この情報はパソコン通信で広がり、3 日間で約2000人が来場。広島、大阪、京都などでもこの名古屋システムでのボランティアの字幕付き上映が実現。その後、東宝が要望に応え、字幕付きフィルムを製作、各地で上映が実現した。

『もののけ姫』の上映が紹介された 季刊誌「いくお～る」表紙
（小川氏 提供）

2. 映画館や映画上映に対するこれからの要望

・映画館のインフラでは、各地域にアクセシビリティを向上させる条例などができているのでそれを参考にしてほしい。例えば、東京都の福祉のまちづくり条例。観覧席や客席には、集団補聴設備・字幕や文字情報を表示する設備が遵守基準となっている。補聴援助システムには現在、磁気ループ、赤外線システム、FMシステムがある。ある映画館で赤外線の受信機を貸し出す案内が出ていたので使ってみたところ、古いタイプの機器でノイズが入り、あまり役に立たなかった。未導入の劇場がまだまだ多いなかで、導入していたのは嬉しかったが、メンテナンスチェックを継続してもらいたい。聴覚障害者と関わりを持っている映画館では、機器の準備も運用もスムーズにいっているところもある。

　また、補聴援助システムの整備の有無などがホームページやパンフレットなどでわかるようになっている必要がある。

・日本語字幕付きで上映館を調べる際、配給会社によって分かりやすさが異なる。例えば、東宝のホームページは、リストで一覧になっており、また、目立つところに掲示されているため、探しやすい。会社によっては、ようやく見つけたときには字幕上映が終わっていたこともあった。東宝のように、字幕上映をまとめて紹介してほしい。

・字幕上映は日時や劇場が限られている。日時を知りたくても、難聴者のなかには、ホームページ上で情報が探せず、また、電話ができない人も多い。その場合はFAXが頼りだが、FAX番号がホームページに掲載されていないことが多い。難聴者にはFAXも必要だと理解していただきたい。

・字幕製作のガイドラインを設けてほしい。洋画の字幕は聴者が見たときにわかる字幕になっている。それだと、映画の環境音、画面に映っていない人が話した場合の話者が誰かが気づけないなど、字幕が付いていても映画を理解することはできない。聴覚障害者用の字幕が、邦画にも洋画にも必要。最近では映画でも、テレビのように話者によって字幕を色分けする作品なども出てきている。

・字幕の付与のし方でセリフの要約の程度へのニーズなども人によってまちまち。フィルムに字幕を焼き付ける方法だと、字幕の種類は一つに限定されるが、携帯端末で自分に合った字幕が選択できれば、さまざまなニーズに対応できると期待している。例えば知的障害のある人向けの字幕なども選べるようになれば、さらに映画を楽しめる人が増えると考える。

・音声透かし技術を導入した新システムは、携帯端末を持ち込む、もしくは、貸し出すことで、いつでも、どの回でも字幕付きで楽しめる。さらに、災害時の非常放送の音に同期させて、その内容の文字化も可能だという点においても期待している。

団体ヒアリング

一般財団法人 全日本ろうあ連盟

小出 真一郎（理事 教育・文化委員会委員長）

1. 映画上映に対する過去の要望・取り組み

＜要望＞

・100％の字幕付与、また、聴覚障害のある高齢者は日本語を苦手とする人も多いため、手話の付与も求めたい。
　映画館での邦画の上映は、以前に比べると字幕が付くようになったが、字幕付き上映は公開期間が短く、場所と時間が限定されているため、都合がつかなくて観られず残念だという声をよく聞く。いつでもどこでも、観られるようにしてほしい。

・旧作映画への字幕付与も必要。そのうえで、一番求めるのは、聴者と同時に情報が得られ、日常生活において、同僚や家族との話題の輪に加われること。映画であれば封切時、DVD発売時、テレビ放映時に字幕が付与されていることが重要。
（日本の演劇にも字幕付与を求める。また、子どもたちへ昔話などの伝承文化も、聴者と同様に継承できるように配慮してほしい）

・付与する字幕の表示や表現の方法に、各分野のガイドラインを設けて、より分かりやすいものを目指してほしい。
　例えば、画面の片隅（左もしくは右や下に２行）で表示される字幕では、討論などのシーンで早口のセリフが多かったり、戦闘などのシーンで場面転換が速かったりすると、誰が話したかがわからなかったり、読み切れなかったりして、字幕が付いていてもわからないことも多々あるという意見がある。個々の好みもあるだろうが、わかりやすい方法に標準化してほしい。

・手話も表示してほしい。表示方法について、いかにも「入れました」と画面端に、丸く、背景もまったく異なるような挿入方法ではなく、観る側が負担に感じない表示方法にしてほしい。

・何ごとも、当事者不在で、ものごとを進めないでほしい。
　字幕の付与に関連し、国なども多言語字幕やCM字幕のあり方を検討する委員会を開いているが、メンバーは技術者や聴者の専門家ばかりで当事者がいない。民放連等が参加する放送関連の会議も当事者がほとんど呼ばれない。

・上記の点を、経済産業大臣に要望書として提出した（2014年３月31日）。以下、項目。

> 1. すべての日本映画に対し、日本語字幕版の作成を、義務付けてください。
> 2. すべての日本映画をはじめとする映像ソフトに字幕を付けるよう義務付けてください。
> 3. 聴覚障害者をはじめとする障害当事者が審議会・委員会へ参画し、当事者が直接討議できるようにしてください。

＜取り組み＞

・情報アクセシビリティ・フォーラムを、2013年11月22日～24日に開催（延べ13,263人来場）。
　当団体は、手話言語法や情報・コミュニケーション法の制定実現に向けて運動している。その一環として、聴覚障害者が抱える情報アクセスへのバリアの存在とその解消への取り組みを広く理解してもらい、機器やシステムの開発研究の情報を共有しようと開催。
　フォーラムでは、映像も柱の一つに取り上げた。３つのコンセプトの１つ、「聞こえない人も楽しめる映像メディアを考えます」では、音声ガイドや字幕付きのバリアフリー映画の普及啓発に取り組むメディア・アクセス・サポートセンター（MASC）や、バリアフリー映画の製作・上映の資金的な支援を社会貢献活動として続ける住友商事株式会社など

が紹介された。また、「ろう者の視点で創るデフムービー」では、ろう者の監督が描く映画から、ろう者と聴者の表現の違いなどを気づいてもらおうと試みた。

2. 映画館や映画上映に対するこれからの要望

- 邦画に100％字幕を付けてほしい。
  いつでも、どこでも字幕付きで映画が観られるならば、もっと映画館に行くという声は多い。また、聴者から字幕がジャマだという声があがらないよう、理解を浸透させてほしい。

- フィルムに字幕を焼き付けるだけではなく、手元デバイスで観られたり、館内の緊急放送なども、即時に、そのデバイスに表示されるなど、ICT技術のさらなる進展を期待する。

- 予告編にも字幕を要望する。

- チケット販売窓口に、コミュニケーション支援ボード（イラストが描かれているため、それを指し示すことで意思を伝えることができる）や筆談ボードなどを用意してほしい。

- 災害、火災時の避難経路の確保。建物のバリアフリーの観点から、緊急事態を知らせるフラッシュライト、避難路に誘導灯など、出口が視覚的にわかるような整備や配慮をお願いしたい。

- トイレの場所など、案内のわかりやすいサインを掲示すべき。
  　よい事例として、羽田空港のリニューアルの際の取り組みがあげられる。当事者参加でわかりやすさや使いやすさを検証（ワークショップ）し、意見を取り入れたため、情報が取りやすくなっている。

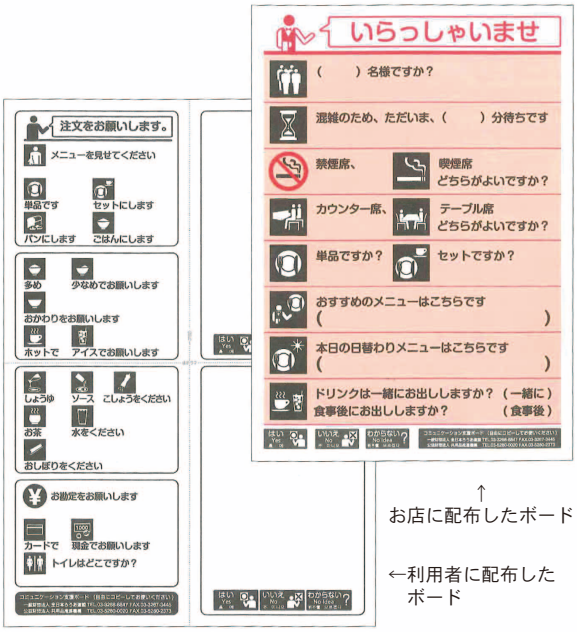
- また、必ず視覚的な案内をしてほしい。例えば、AED（自動体外式除細動器）などは、これまで音声案内のみだった（液晶画面でイラスト説明が付くようになった）。

- 災害時に備え、情報などが入手できるよう、フリーWi-Fiを設置してほしい。これは総務省がスマート・ジャパンICT戦略構想で打ち出している。

- 検討の際に、必ず当事者を委員に入れて、意見を聞いてほしい。

交通機関用コミュニケーション支援ボード

JR秋葉原駅が自主的に作成したオリジナル案内板



↑
お店に配布したボード

←利用者に配布したボード

コミュニケーション支援ボード

情報アクセシビリティ・フォーラム
講演「映像メディアを考える ～ろう者が見やすい字幕とは～」

『音をつかむ　未来をつかむ　情報アクセシビリティ・フォーラム報告書』より引用

団体ヒアリング

社会福祉法人 日本盲人会連合

大橋 由昌（情報部 部長）　鈴木 孝幸（副会長、事業部長）　【聞き取り】

1. 映画上映に対する過去の要望・取り組み

＜要望＞

・まずはテレビのニュース番組や緊急速報が字幕のみで音声での説明がない点を、視覚障害者の命に関わることであるととらえ、音声化を強く要求している。その上で、どの映画にも音声解説が付いていることは、社会のあるべき姿として当たり前のことだと要望する。

＜取り組み＞

・視覚障害者向け解説（副音声）放送開発に関する調査・研究事業（独立行政法人福祉医療機構〈高齢者・障害者福祉基金〉助成事業）を2004（平成16）年～2006（平成18）年の３年間行った。

　その結果を受けて、デジタル放送時代の視覚障害者向け放送に関する研究会のメンバーとして、意見書と要望を提出（2006年11月16日）。

調査結果によると、

1. 平成16年度の調査結果で視覚障害者のうち92.1％がテレビから情報を入手しており、87.4％が解説放送の充実を求めている。
2. 番組のうち、特に要望の強い番組は、ニュース報道番組、ドラマ、ノンフィクション、スポーツ等の番組である。
3. 外国語の放送については、内容が理解できないため、日本語への吹き替えを強く要望している。
4. 緊急時の際の通報や速報の音声化についても強い要望がある。

以上により、解説放送の充実を強く各関係機関に求めた。

・上記に関連して、「視覚・聴覚に障害のある人たちのための放送バリアフリーシンポジウム　TOKYO in 2006」（トヨタ財団助成事業）を開催。

・報道機関に情報提供をしている。日本テレビ放送網の番組「笑点」や「金曜ロードSHOW!」のスタジオジブリ作品、オリンピック・パラリンピックの解説放送の際、モニターをして必要としている情報や提供方法などをアドバイスした。

・自主上映会やイベント、また音声解説付きの上映などの情報を、会員団体向けの情報紙『点字ＪＢニュース』（点字版・Eメール版）に掲載している。

2. 映画館や映画上映に対するこれからの要望

・映画館の施設面では、国の基準やガイドラインに則った設備をしたうえで、階段の段の始まりは色を変え、足元に明かりを付ける、背もたれに付く座席の表示を明確にする、点字ブロックの敷設に関しては館内のロビーなどに室内用誘導ブロックを敷設する、白杖および傘を立てる場所の設置など、視覚障害者への配慮を求める点はいくつかある。上映前も照明の明度が低いため、見えにくさが増している。

　そのほか、飛行機のシートのようにイヤホンをさせば音声解説が聞ける座席、弱視の人には拡大鏡のようにセカンドスクリーンにも画像が映るようにするなどの要望があり、映画館の環境に期待は大きい。

・委員会や研究会には必ず当事者を委員として入れ、本気で意見を聴取してもらいたい。障害者差別解消法の施行に向けて、さまざまな委員会が設けられている。当事者として参加を求められるが、墨字の配布資料を委員会の席上で配られても、読むことはできない。視覚障害者の委員には事前にデータを送付する、図面や画像などは前もって説明するなど、配慮と必要な支援をしてほしい。

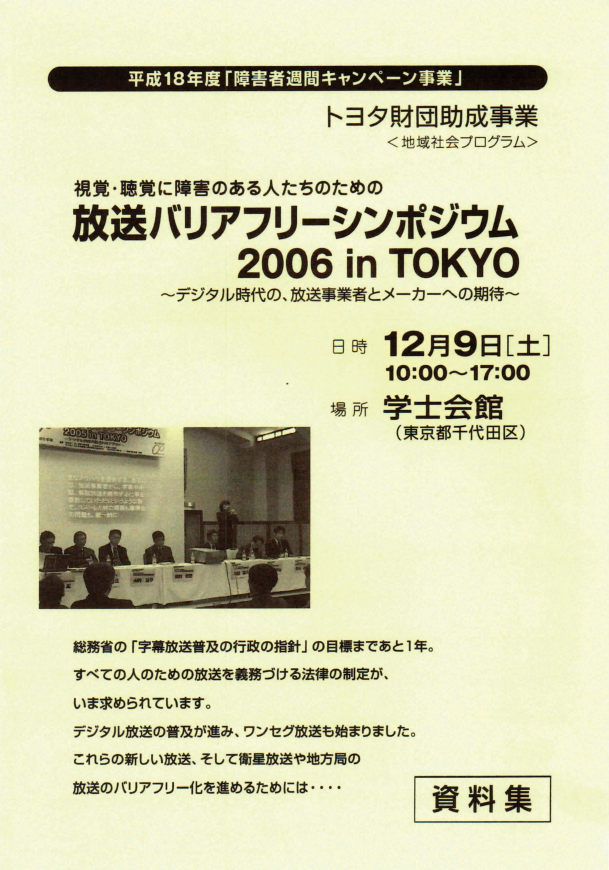
・音声解説のガイドラインを設けるべき。テレビに関しては、ここ数年、総務省の会議で強く要望して

きたこともあり、民放でも解説放送が少しずつ付くようになってきた。しかし、内容が必要としている情報でない場合もある（トーク番組などで、立った、座ったといったことだけが入っているなど）。

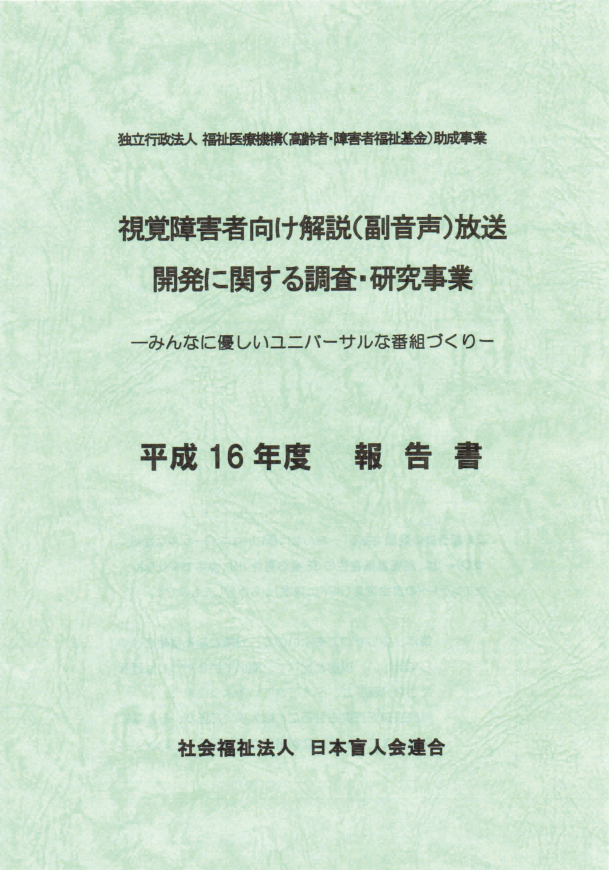
- ニュース番組等の外国語の吹き替えや、関係者のインタビューで個人を特定されないように声を変声機にかけているが、聞き取りにくいことがある。わざわざ聞き取りにくくするのではなく、その部分をアナウンサーが読み上げるなど、聞きやすい配慮をしてほしい。

- 映画を楽しむ視覚障害者は増えている。配給や興行の方々に、数字で判断しないでほしいとお願いしたい。視覚障害者の人口は、障害者手帳を持っている人が約37万人。日本の人口約１億2700万人の0.29％に過ぎない。観にくる人が少ないから、経費をかけて音声解説をつくるのを止めようというのは、文化的生活を営む権利、基本的人権の観点からもすべきではない。映画を観たい視覚障害者がひとりでもいる限り付与してほしい。

- 音声透かし技術による音声解説を利用する場合は、スマートフォンを使う視覚障害者が少ない現状から、3Dメガネのように、映画館で貸し出すことが必要だ。



視覚・聴覚に障害のある人たちのための
放送バリアフリーシンポジウム 2006 in TOKYO



調査報告書

団体ヒアリング

社会福祉法人 日本点字図書館

天野 繁隆（館長）　伊藤 宣真（常務理事兼本部長）

1. 映画上映に対する過去の要望・取り組み

＜取り組み＞

当館の取り組みは、利用者ニーズを受けてというよりは、TSUTAYAでDVDのレンタルが2004年頃に始まり、視覚障害者も健常者と同様の映画視聴環境があってもよいのではないかという気づきから始まった。

当時、映画の音声解説をサービスするボランティア団体シティ・ライツの活動を参考に、DVDのソフトと音声解説をパソコン上で同期させて視聴できるしくみ「ガイドDVD」を開発。従来の音訳図書同様に、サピエ図書館から利用者会員限定でダウンロードする、またはCDもしくはSDカードを送付する方法で無料提供を行う。

注：サピエ図書館
インターネットのサーバーに図書の点字版、DAISY版（デジタル録音図書、Digital Information Systemの略）データを保有し、視覚障害者および視覚による表現の認識に障害のある方々のみがデータをダウンロードできるネットワークサービス。日本点字図書館がシステムを管理し、NPO法人全国視覚障害者情報提供施設協会が運営している。

「ガイドDVD」

- 2004年、ガイドDVD（映画をパソコンで再生する際に音声解説を同期させる）ソフトを開発。（2004年～）
- 館内で月１回程度、上映体験会をしている。（2006年～）年11回から14回のペースで行い、2007年から７年間で延べ4460人が体験している。
- ガイドDVDの課題としては、利用者のパソコン環境や技能に個人差があること、DVDも規格化されていないためメーカーによっては本編再生まで視覚障害者には行けないものがあること、OSの変化やBlu-rayなどに対応しなければならないなどがあげられる。

「チャリティ上映会」

- 収益を運営費の一部にあてる映画会。年２回開催している。
- 音声解説を付け始める。（2004年～）
  ※「上映会」（年２作品、音声解説付き）、「ガイドDVD」の音声解説制作（年５作品）のタイトルは、委員会で決める。職員やボランティアの意見、体験上映会参加者へのアンケートなどをもとに決定している。選択の基準として、DVD販売される際に音声解説が付かないもの、外国映画では吹き替え版があるもの、日本の古い映画で字幕によって観るもの以外に限っている。
  調査時に話題になっている映画のリクエストが多いが、図書館として蔵書とする視点を加味して検討している。

「シネマデイジー」

- シネマデイジー（映画本編の音に音声解説を加えた音源を利用者に提供するサービス）を開始（2013年）。
- ガイドDVDと同様の方法で提供。利用者がこれまで使用している音訳図書再生機器で容易に視聴できることから利用者が急増し、コンテンツのリクエストも増えている。

これらの対応は、やむを得ずの苦肉の策みたいなもの。私たちは著作権法第38条をよりどころに上映している。本来は、家族で一緒に観るとか、映画館に出かけて行ってほしいと思っている。「障害者だから」と借りたり・買ったりすることに特別扱いをしてもらうよりは、割引はなくても健常者と同様に読めたり、観たりできる方がよいのではないか。

注：著作権法第38条５
映画フィルムその他の視聴覚資料を公衆の利用に供することを目的とする視聴覚教育施設その他の施設（営利を目的として設置

されているものを除く。）で政令で定めるもの及び聴覚障害者等の福祉に関する事業を行う者で前条（第37条の２）の政令で定めるもの（同条第二号に係るものに限り、営利を目的として当該事業を行うものを除く。）は、公表された映画の著作物を、その複製物の貸与を受ける者から料金を受けない場合には、その複製物の貸与により頒布することができる。

2. 映画館や映画上映に対するこれからの要望

いつでもどこでも視覚障害者が映画館で観られるようになるのが理想。音声透かしは画期的な技術。この技術を利用してバリアフリー上映のしくみが確立されることを期待する。

上映会チラシ

団体ヒアリング

社会福祉法人 日本ライトハウス情報文化センター

林田 茂（総務係）【書面回答】

1. 映画上映に対する過去の要望・取り組み

＜要望＞

・バリアフリー上映時の案内時期

広報物をつくる際に、点字版・音声版をつくっていることもあり、製作期間も必要なため早く情報をいただきたい。

視覚障害者の方は情報障害とも言われています。そのため受動的に情報が受け取れるように、いろいろな媒体で、いろいろな方法で情報を届ける必要があります。

・上映時間を早く知りたい

現在は、基本は１週間前に情報がわかるようになっていますが、視覚障害の方にはガイドヘルパーを利用する方もいるため、上映時間の情報も早く知りたい情報です。

また、外出に時間がかかったり、ガイドヘルパーの手配などで、動きやすい時間帯（昼間）への配慮も考えていただきたいです。

・上映日時、上映回数を増やしていただきたい

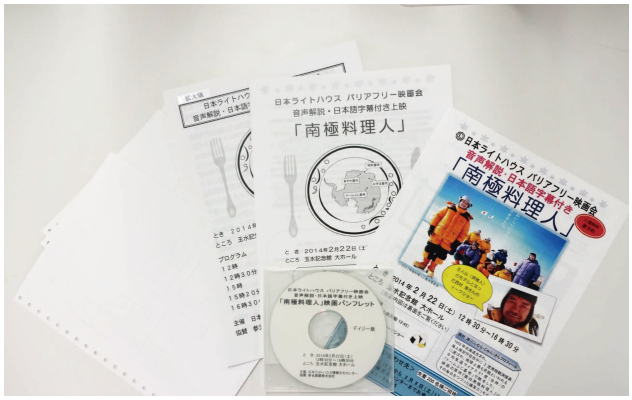
現在は、１度きりと上映が限定されていたり、なかなか時間の調整が難しかったり、仕事で都合がつかなかったりしますので、回数を増やしていただきたいです。

また、いろいろなジャンルの作品も手掛けていただきたいです。

・関係団体等と連携し上映情報を流してほしい

現在は、ホームページやSNSなどで情報が流れることが多い状況ですが、当事者との関係の深い施設・団体とも連携を図っていただきたいです。

2014年２月
映画『南極料理人』×西村淳さん（原作者）トークショー



点字チラシ・音訳チラシ等

＜取り組み＞

・広報
映画情報をホームページ、月刊機関誌、メーリングリスト、イベント・サークル等によるPR

・音声解説の普及・啓発活動

映画館でおこなう場合

・映画館までの誘導および会場内の誘導

・音声ガイドのオペレーション（同期作業）

・『〇〇〇（映画のタイトル）』はバリアフリー上映であることをアナウンスしてもらう。

ラジオなどが使われることを他のお客様にも知ってもらい、そのようなことがあることを広く知ってもらう。

＊映画の事前説明
登場するキャラクターや、使用される機器・器具などを触れられる範囲で用意して事前説明をおこなった。

＊受信ラジオの使い方の説明、点検（特に、上映前にも再点検をおこなっている＝途中で不良または誤操作をされる場合があるため）

2014年６月
映画『虹をつかむ男』＆山田洋次監督トークショー

２．映画館や映画上映に対するこれからの要望

上記とほとんどが重なりますが、やはり、いろんなジャンルの映画が、上映封切と同じ時期に、いつでも観られる環境づくり。

当事者の方が安心していくことのできる環境づくり（誘導、資料の点字や音訳化、事前案内など）への配慮。これらを関係団体と連携を取りながらお願いいたします。

2014年11月
映画『天地明察』×「さわる宇宙」ワークショップ

個人へのヒアリング調査

障害者に対する適切な視聴環境の在り方に関する論点整理

中島 佐和子（秋田大学大学院工学資源学研究科情報工学専攻 助教）

ここでは,視覚障害者と聴覚障害者を対象に,映画字幕や音声ガイドの普及による効果を把握するために,映画鑑賞実態と映画上映へのニーズを調査した。

映画鑑賞の実態と映画上映へのニーズ

1. 方法

【対象者】

聴覚障害者：
38名（男性20名,女性18名）,
平均48.7歳（±18.8歳）

視覚障害者：
38名（男性19名,女性19名）,
平均54.8歳（±13.9歳）

【手順】

北海道,青森,東京,大阪,鹿児島の計５都道府県にて調査を実施した（東京の被験者には埼玉・神奈川在住者含む）。対象者は,字幕および音声ガイド付き映画を鑑賞した後にアンケートに回答した。聴覚障害者は手話通訳者を介して自記式にて回答し,必要に応じて支援者が追加の聞き取り調査をした。視覚障害者は支援者が回答を聞き取って,代理で記入をした。

2. 結果と考察

図１および表１に結果を示す。ここでは比較のために一般データを引用した。なお,映画鑑賞参加率として引用した一般データ（「ACRデータ2013年」株式会社ビデオリサーチ[1]）は,東京30km圏内の2625人を対象とした調査結果である。また,邦画および洋画

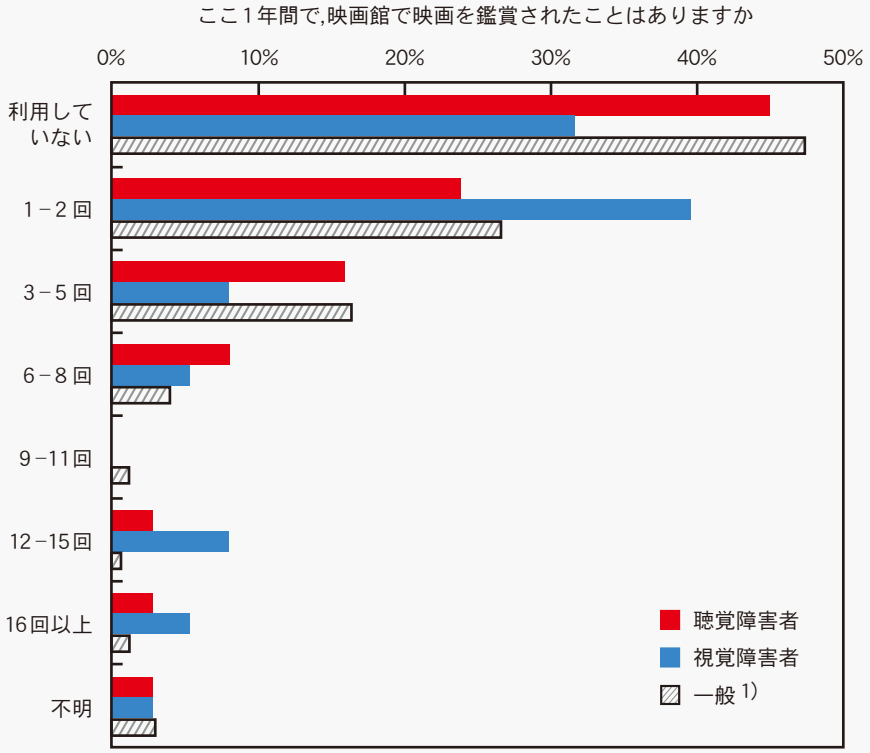


図1　映画館での映画鑑賞回数

1) ACRデータ2013年(株式会社ビデオリサーチ,東京30km圏内,2625人)[1]

	映画鑑賞参加率 1)	邦画の割合 2)	洋画の割合 2)
聴覚障害者 3)	55.3	25.3	69.0
視覚障害者 4)	68.4	74.7 5)	29.7 5)
一般	52.8 6)	58.3 7)	41.7 7)

(%)

表1　映画鑑賞参加率および邦画と洋画の割合

1) 過去１年間に１回以上,映画館で映画を観た人の割合
2) 邦画および洋画の鑑賞回数の比率
3) 青森,東京,埼玉,大阪,鹿児島
4) 北海道,青森,東京,埼玉,神奈川,大阪,鹿児島
5) 本データのみ調査対象者は21名
6) ACRデータ2013年(株式会社ビデオリサーチ,東京30km圏内,2625人)[1]
7) 2014年全国映画概況(日本映画製作者連盟)[2]

の割合については，2014年全国映画概況（日本映画製作者連盟）[2]の邦画および洋画興行収入に基づき推定した。調査の結果，聴覚障害者については，従来調査[3]と同様に，邦画と洋画を含めた映画館での映画鑑賞参加率（過去1年間に1回以上，映画館で映画を観た人の割合）は55.3%で一般（52.8%）と同程度であるのに対し，邦画鑑賞の割合（25.3%）は一般（58.3%）の半分程度に低いことが確認できた（図1と表1）。なお，図1に示した一般データに基づく聴覚障害者の邦画鑑賞を十分に保障してこなかったことは，聴覚障害者が映画館での邦画鑑賞を諦めた経験（図2（a））や，邦画鑑賞への期待に関するコメント（1-3. コメント一覧）の多さからも推察される。図2（a）より，「Q. 観たい日本映画に字幕が付いていなくて，映画館での鑑賞を諦めたことがありますか」の質問に対しては，「よくある」と「たまにある」の回答合わせて68.4%であった。

一方，視覚障害者については，一般や聴覚障害者と比べて，映画館での映画鑑賞参加率（邦画と洋画を含む）それ自体が高かった（68.4%）（表1）。しかし，だからといって，音声ガイドの普及による映画鑑賞機会への更なる期待は低いという訳ではなく，聴覚障害者と同様に，「観たい映画に音声ガイドや吹き替えが付いていなくて映画館での映画鑑賞を諦めた経験（図2（a））」は多く，また，「映画のバリアフリー化による映画鑑賞機会の増加への主観的な見込み（図2（b））」も高い。図2（b）より，「Q. すべての映画に音声ガイドや外国語の吹き替えと音声ガイドが付いたら，映画館へ映画を観に行く機会は増えますか」の質問に対して「とても増える」，「少し増える」，「変わらない」の3段階で回答を得た結果，邦画および洋画ともに，「とても増える」と「少し増える」合わせて89.5%の回答を占めていた。カイ二乗適合度検定を用いた統計解析では，それぞれ1%および5%水準で有意な偏りであった。他方，聴覚障害者を対象とした調査では，邦画と洋画を含めて「Q. いつどの回でも字幕付き上映を楽しめるようになれば，映画館へ映画を観に行く機会は増えますか」の質問に対する「とても増える」と「少し増える」の回答の割合は合わせて83.8%であり，偏り度合いは有意傾向（$p<0.1$）といえる。このことからも，視覚障害者の音声ガイド付与による映画鑑賞機会の増加への期待は，聴覚障害者と同様に高いことが推察される。また，視覚障害者のコメントからは，「そもそも映画鑑賞を諦めている」と「見えなくなってから映画を観るようになった」という対照的な2つの声が聞かれた点も特徴である。群間での顕著な差は認められなかったが，視覚障害者は一般や聴覚障害者と比べて，年に1～2回のライト層と12回以上映画館で映画を観るヘビー層の割合が僅かに多い傾向があることからも（図1），視覚障害者の映画鑑賞の特徴が見て取れる。なお，視覚障害者の邦画鑑賞率の高さについては，いくつかの要因が考えられる。現状，吹き替え版による洋画上映はある一定の割合で存在するものの，字幕版も依然として多い。一般社団法人外国映画輸入配給協会の調べによると，2014年に公開された洋画の興行収入上位作品の吹き替え版上映率は順に，1位『アナと雪の女王』87.6%，2位『マレフィセント』56.9%，8位『猿の惑星』32.0%であり，アニメーション作品を除いても平均44.5%と比較的高い。一方，興行収入の上位作品だけでなく，公開された洋画作品全体について吹き替え版が制作された作品数の割合[4,5]を見ると，525作品中32作品で約6.1%程度である。視覚障害者にとっては，字幕版による洋画上映ではセリフも外国語になることから，作品理解の難しさは増加する。しかし，邦画の場合は音声ガイドが付いていなくても日本語のセリフによりある程度イメージが掴めるという状況がまず考えられる。さらに，吹き替え版があったとしても必ずしも視覚障害者が満足のいく鑑賞ができている訳ではなく，音声ガイドの付かない一般向けの吹き替えだ

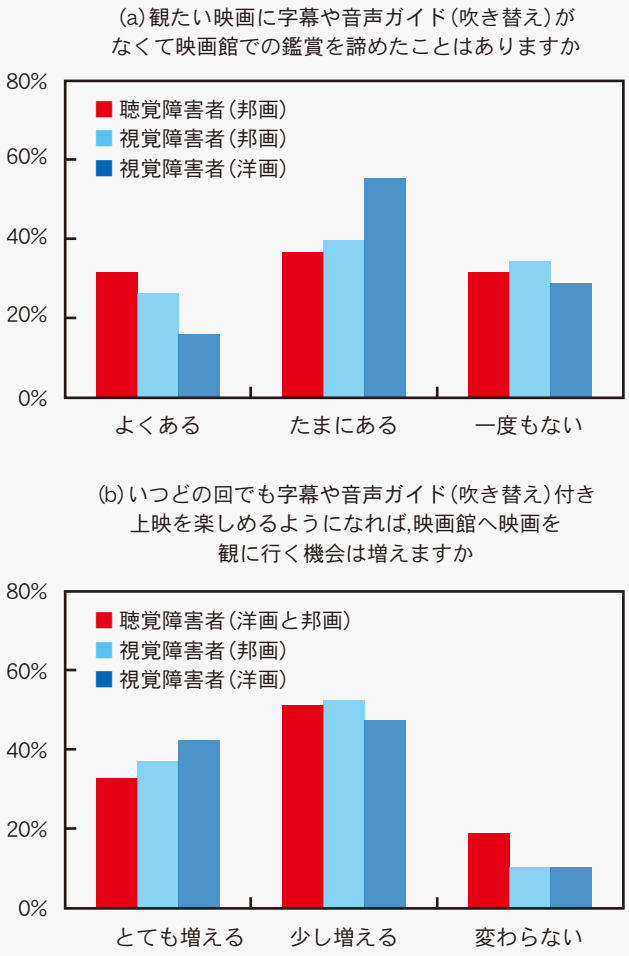


図2　映画鑑賞を諦めた経験と今後の機会

けでは,シーンの変化などに関する情報を十分に得られないことから物語を掴みにくく,かえってストレスになるという意見もある。また,字幕を朗読することにより視覚障害者の洋画鑑賞支援も行ってきた団体(シティ・ライツ)では,作品そのものの音声を味わいたいので吹き替え版ではない方がいいという視覚障害者からの声も聞かれるという。これらの理由から,視覚障害者の邦画鑑賞率の高さを考察した。

3.コメント一覧(抜粋)

※記入者注となっているのは,本人ではなく支援者の記入によるコメント。

【聴覚障害者】

Q.観たい日本映画に字幕が付いていなくて,映画館での鑑賞を諦めたことがありますか ー具体的な事例があれば教えて下さい

A.「よくある」

- たくさんあります。(全ろう,女性,50歳,大阪)
- 若い頃は,趣味が映画鑑賞。毎月1回は必ずといっていいくらい,よく観に行ってました。But,日本映画には字幕がなかったため,洋画だけにしぼって,よく観に行ってました。どうしてもみたい日本映画は,DVD版,またはTVに出た時に,字幕があれば喜んでみていました。(全ろう,女性,54歳,大阪)
- 東京にはあるとしか知っていません。(全ろう,男性,16歳,鹿児島)
- 観たくても,2日間のみと限定されていて,都合がつかなかったり,行くという気持ちのタイミングが合わない。(全ろう,女性,46歳,鹿児島)
- レンタルしたけど,字幕がなかったので,残念だった。(上映したばかりの,見たかったので,レンタルしてみた)(全ろう,女性,42歳,鹿児島)
- レンタル開始をまつばかりが多い。日本映画はほとんど付いてない。(全ろう,男性,44歳,鹿児島)
- わからない。記入者注:字幕がないと内容がわからないから,行きたくてもいけない。(全ろう,女性,73歳,青森)

A.「たまにある」

- 映画館で日本映画字幕が付いてない時は,テレビやDVDを借りて見てました。(全ろう,女性,47歳,大阪)
- 「〇〇」の字幕付き上映があったが,日にちが少なかった。都合が悪くて行かれなかった。(全ろう,女性,49歳,大阪)
- 以前は少なかったが,最近増えてきています。でも,もっと増やしてほしい。補足:日本映画は字幕が付いていなかったので,あきらめというか,みなかったが,TVに字幕がつくのが当たり前になった今,みたいと思うようになり,付いていない上映には,イライラします。(全ろう,女性,51歳,大阪)
- 具体的には覚えていないが,しばしばあります。(全ろう,男性,17歳,鹿児島)
- 友だちから聞いたことがある。(全ろう,女性,35歳,鹿児島)
- インターネットで字幕付映画があることを知った。(全ろう,男性,30歳,鹿児島)
- 記入者注:字幕があればもっと観たい。タイトルは覚えてない。(全ろう,女性,60歳,青森)
- がんばれば観れてしまうのですが,終わった後,もやもやします。(どうしても分からなかったところが出てくる)(難聴,女性,22歳,東京)
- 〇〇のアニメや,映画を見たかったが,字幕がなく,分からなかった。(難聴,男性,17歳,鹿児島)

A.「一度もない」

- もともと日本映画に興味がなかった。もしかしたら,元々字幕がないと思っているからかもしれない。でも,映画に興味がないので,行こうとしなかった。(全ろう,女性,55歳,大阪)
- 鹿児島には,映画の字幕付き上映はなかった。(全ろう,男性,15歳,鹿児島)
- 字幕ないため映画館に行きたくない。もしあれば行きたい。(全ろう,女性,64歳,青森)
- 記入者注:日本映画はそもそもみようと思っていないため。(全ろう,男性,60歳,青森)
- 〇〇映画,〇〇〇映画(記入者注:2つ映画館の名前),英語を文章があった。(翻訳字幕の上映は行く)(全ろう,女性,64歳,青森)

Q.いつどの回でも字幕付き上映を楽しめるようになれば,映画館へ映画を観に行く機会は増えますか ― 理由を教えてください

A.「とても増える」

- 見やすくなるので。(全ろう,女性,71歳,東京)
- 自分は映画鑑賞を楽しんでいたが,字幕が付いていれば,全てをみることができる。字幕がないのであきらめることもあった。(全ろう,男性,58歳,大阪)
- どの回でも字幕付きで観られるため,今まで以上に気軽に映画館へ行くことができるから。(全ろう,男性,59歳,大阪)
- 字幕付きがあると安心してゆっくり観られる。(全ろう,男性,15歳,鹿児島)
- どの映画でも字幕付きで観れると,よりおもしろさがあったりするから。(全ろう,男性,15歳,鹿児島)
- 邦画も観られるため気軽に映画館へ行ける。(全ろう,男性,30歳,鹿児島)
- 最近の日本の映画に魅力があるので見たくなる。(全ろう,男性,35歳,鹿児島)
- もともと映画好きで,特に最近は日本映画にいいものがたくさんあるので,制約なく自由に見に行けるから。(全ろう,女性,46歳,鹿児島)
- 知識増える,観られる!(全ろう,女性,60歳,青森)
- どの回でも字幕付きで観られるため,今まで以上に気軽に映画館へ行くことができるから。(全ろう,男性,68歳,青森)
- 内容がわかる。今までみられなかったことが観られる。(難聴,男性,71歳,東京)

A.「少し増える」

- 今まで見られなかったことも,見やすくなるから。(全ろう,男性,63歳,埼玉)
- 映画の時,字幕がほしい。(全ろう,女性,64歳,埼玉)
- 字幕があるのなら,みてもよいと思う。(全ろう,男性,70歳,東京)
- 以前は見たい映画は字幕がついてないので,洋画をよく観てました。邦画の字幕付きでも,あらすじを読んだ後,興味があれば観に行く。(全ろう,女性,47歳,大阪)
- 歴史(戦国時代)観たいので。(全ろう,女性,49歳,大阪)
- 私は今まで字幕がなかったため,あきらめたことがよくあったので,期待している。(全ろう,女性,54歳,大阪)
- どの回でも字幕付きで観られるため,今まで以上に気軽に映画館へ行くことができるから。(全ろう,男性,65歳,大阪)
- 見たい映画をいつでも見えるので見る回数増えると思います。(全ろう,男性,16歳,鹿児島)
- 邦画でも字幕付きで観られるため気軽に映画へ行ける。(全ろう,女性,35歳,鹿児島)
- 二倍楽しめるので。(全ろう,男性,44歳,鹿児島)
- 記入者注:そもそも映画は高価な娯楽なので,DVDでみる方が気楽。(全ろう,男性,60歳,青森)
- 楽しい。記入者注:楽しめる字幕付き映画が増えればうれしい。(全ろう,女性,73歳,青森)
- もともと映画館よりDVD派ですが,友だちと観に行くときの選択肢が広がるので。(洋画,邦画気にしなくてよい)(難聴,女性,22歳,東京)
- どの回でも字幕付きで観られるため,今まで以上に気軽に映画館へ行くことができるから。(難聴,男性,17歳,鹿児島)

A.「変わらない」

- 〇〇(記入者注:レンタルDVD店)などの方が安くすむ。(全ろう,女性,50歳,大阪)
- お金があれば 行きます。(全ろう,男性,14歳,鹿児島)

- その時にしか興味を持たないので変わらないと思う。(全ろう,男性,17歳,鹿児島)
- 行きたいが時間を取れない。(全ろう,女性,54歳,青森)
- 字幕でいい。記入者注:メガネでも焼き付けでもあまり増えない。もともと映画館に行かない。(全ろう,女性,64歳,青森)
- 字幕次第と思う。記入者注:字幕次第,内容次第。字幕があればいいと思うけど,あまり映画をみないから,あまり増えない。(全ろう,女性,64歳,青森)

Q. 本日ご覧頂いた映画の字幕で気になるところがありましたら教えてください

- 字幕の進み方が速くて,読めないところがあった。(全ろう,女性,49歳,大阪)
- 字幕が細い線でわかりにくい。太字でしてほしい。また,発言者が2人以上出た場合は,カラー付き字幕がいい。(全ろう,女性,51歳,大阪)
- 字幕について,画面に登場する発言者が1人の時は一色でいいと思うが,2人以上の発言者が出た場合は,字幕の色を区別してほしい。例えば,A⇒白,B⇒黄,C⇒青というふうに。字幕の文字が細くてみえにくい。スクリーンが白だと見えにくところがあった。(全ろう,女性,54歳,大阪)
- 先生との会話の時,専門用語がでたときの字幕がよみづらかった。(全ろう,男性,56歳,大阪)
- 字幕　白いのでわかりにくい。【文字が細くて白いのでわかりにくい】カラーで出してほしい(発言者の区別がわかるようにカラーを付けてほしい。A⇒白,B⇒黄というふうに)(全ろう,男性,58歳,大阪)
- 専門的なセリフがあって,ぼくにとってはわかりづらかった。字幕に色付けしてほしい。特に発言者が1人以上。(全ろう,男性,59歳,大阪)
- 誰が発したセリフかわからなかった。色分けをしたら,わかりやすいかもしれません。(全ろう,男性,65歳,大阪)
- 見ましたけど,誰の名前なのか分からなかったです。(全ろう,男性,15歳,鹿児島)
- 字幕が見えにくい点はいくつかあった。白衣をきているシーン,ベッドシーン等。(背景が白)。そして字幕のカラーについて,改めてただして下されば幸いです。(全ろう,男性,35歳,鹿児島)
- ろう者の同士で映画をみたい。(健聴者よりろう者に対応に。記入者注:手話とか要約)(全ろう,女性,54歳,青森)
- 健聴者と健聴者ですから,ろう者と健聴者の間　手話はどうしますか?(全ろう,男性,60歳,青森)
- 気になることはない。色を変えた方がよい。(話者によって)(難聴,男性,71歳,東京)

Q. その他,お住まいの地域での状況,映画の字幕に関するご意見を自由にご記入ください

- もっと映画をたくさん見られるようにしていただきたい。テレビでは,BSでドキュメンタリーなど,映画も,よくみます。テレビと同じ環境のようになれば、映画館にいくようになると思います。(全ろう,男性,63歳,埼玉)
- 字幕付きが上映することを希望する。(本数を増やす)(全ろう,女性,64歳,埼玉)
- 家の近くの映画館でも字幕付きでみられるようにしてほしい。(全ろう,男性,70歳,東京)
- いつも,どこでも字幕がつくようになればいい。(全ろう,女性,71歳,東京)
- 日本の映画の全て　字幕付きにしてほしい。(全ろう,女性,49歳,大阪)
- ほとんどの映画に字幕つけてほしい。(全ろう,女性,50歳,大阪)
- 地域の映画館で,いつどの回でも字幕付きで上映することを希望する。(全ろう,女性,51歳,大阪)
- 特に,日本映画についてですが,日本語字幕がついた上映は期間限定というのはやめてほしい。一般の上映と同じように,字幕付いてほしい。上映からTV,DVD版にした時は,字幕ついていたはずが,字幕が消えてしまうこともあった。字幕を消さないで!!できたら全て,付けてほしい⇒強く望みます。(全ろう,女性,54歳,大阪)
- テレビとか映画とか,字幕付きしてほしい。(全ろう,女性,55歳,大阪)
- 映画館でなくTVで出たらいいと思うけどね。(全ろう,男性,56歳,大阪)
- 全国　映画館,日本語字幕　つけてください。　映画でなく,テレビ,DVDもつけてほしい。⇒洋画は字幕付いてるのに対し,日本の映画は字幕がないのがほとんどなので,付けてほしい。(全ろう,男性,58歳,大阪)
- 全ての映画館で日本映画であろうが,全て字幕つけてほしい。(全ろう,男性,59歳,大阪)
- 3Dスクリーンで,字幕だけ。普通の画面がいいと思います。(全ろう,男性,65歳,大阪)
- 全ての映画を字幕付きで上映することを希望する。(全ろう,男性,15歳,鹿児島)
- 地域の映画館で,いつどの回でも字幕付きで上映することを希望する。(全ろう,男性,17歳,鹿児島)
- すべての映画館で字幕付を希望します。(全ろう,男性,16歳,鹿児島)
- 邦画は字幕付きで上映することを希望。(全ろう,女性,35歳,鹿児島)
- 地元で字幕付上映があれば行きたい。(全ろう,男性,30歳,鹿児島)
- ろう者がいつでも行ける映画環境であればいいなと。3Dは視力ではなく,振動付きの方がほしい。(全ろう,男性,35歳,鹿児島)
- 日本映画が観れる日数をできるだけ増やしてほしい。例)1週間とか。(全ろう,女性,46歳,鹿児島)
- 映画チケット受付もろう者を理解してないため,見たい映画をあきらめる事も多い。ろう者対応を作ってほしい。(全ろう,男性,44歳,鹿児島)
- 地域の映画館で,いつどの回でも字幕付きで上映することを希望する。(全ろう,女性,60歳,青森)
- もっと字幕増やしで希望。(全ろう,女性,64歳,青森)
- 地域の映画館で,いつどの回でも字幕付きで上映することを希望する。(全ろう,女性,67歳,青森)
- 青森でたくさん映画をみたい。(字幕付き)(全ろう,男性,68歳,青森)
- 映画に字幕希望。記入者注:もっと映画は字幕が増えることを希望する。(全ろう,女性,73歳,青森)
- 新宿とか,ある程度規模があって交通の便がよければ,時間をかけても観に行くと思うので,積極的に字幕付き上映を広報してほしい。(現状,アンテナをはっていないと情報が入ってこないので)(難聴,女性,22歳,東京)
- 家の近くでも字幕つきで見られるようになるとよい。(難聴,男性,71歳,東京)

【視覚障害者】

Q. 観たい外国語映画に吹き替え・音声ガイドがなくて映画館での鑑賞を諦めたことはありますか

A.「よくある」

- 隣に座った〇〇さんの「見えなくなってから映画を観るようになった」というコメントを聞いて,「余談ですが、見られなくなると観たくなる。見えてた頃に観たものとかを観たい」と同感の意を示す。(全盲,男性,65歳,東京)

A.「たまにある」

- そもそも選択に入らない。(弱視,女性,59歳,埼玉)
- そもそも観たいと思わない。(弱視,男性,62歳,埼玉)

A.「一度もない」

- ※初めからあきらめているところがあるので,まず映画館にいこうと思わないのが今までです。(全盲,男性,45歳,鹿児島)
- そもそもみようという選択肢がない。(全盲,女性,46歳,青森)
- 見えるころは映画には3年に1度くらいの頻度で観ていた。目が見えなくなってから,映画を観るようになった。(弱視,男性,52

歳,埼玉）

- もともと諦めている。（弱視,男性,54歳,大阪）

Q. 本日ご覧頂いた映画の音声ガイドで気になるところがありましたら教えてください

- 聞きやすかった。静かなシーンが多いので,ガイドがあったおかげで理解できた。（全盲,女性,42歳,神奈川）
- 特にない。ドキュメンタリーなので,変な抑揚もなく,淡々と読んでいたのがよかった。場面転換によるドラマへの影響のあるものではなかったので,よい感じで聞けた。（全盲,男性,65歳,東京）
- 流れが唐突だった。ドキュメンタリーだから仕方がないことだけれども・・・。不自然な会話が多かった。吹き替えや音声ガイドの声はとてもよかった。（全盲,男性,70歳,神奈川）
- 音声ガイド付き映画に感謝している。（全盲,男性,53歳,大阪）
- 映画館上映で日程指定はよいが,時間はいつでもいいようにしてほしい。（全盲,女性,66歳,大阪）
- 端末で鑑賞できる状況が鹿児島でできるか知りたいです。（全盲,男性,45歳,鹿児島）
- どの劇場でも音声ガイド付きで映画を鑑賞できれば,よい。座席,手洗い等へ誘導をして頂ける方がいるとよい。(全盲,男性,54歳,鹿児島）
- システムに感動するばかりでした。（全盲,女性,58歳,北海道）
- 解説の音声がはっきりしていて良かった。登場人物のセリフもすべてナレーションしていたので良かった。(全盲,女性,29歳,青森）
- もう少し音声ガイドの音声が低くても良いと思う。（全盲,女性,46歳,青森）
- 急に音が高くなった時があり,ビックリした。（全盲,女性,53歳,青森）
- 特になし。語り,音量とも上手で聞きやすかった。（全盲,男性,79歳,青森）
- ガイド量,ちょうどよい。（弱視,男性,52歳,埼玉）
- 大勢登場した場合のセリフの区別がわかりにくい。聞き取りにくい。（弱視,男性,62歳,埼玉）
- 寝屋川,枚方の方でも上映館が増えるといい。(弱視,女性,40代,大阪）
- 寝屋川,枚方（住んでいるところの近く）で見られたらいい。(弱視,男性,51歳,大阪）
- 地域の映画館にあまり行かない。（弱視,男性,54歳,大阪）
- 話題の映画を友人と話したりしたいので,新作映画が,すぐにみれるような劇場が大阪にもほしい。（弱視,女性,54歳,大阪）
- 全ての映画館に音声ガイドを付けてほしい。(弱視,男性,57歳,大阪）
- 大阪市内で,便利がよいところにいるので,割合よく見れているので助かります。新作をすぐに見れるところが大阪でもほしい。（神戸まで見に行っている）（弱視,男性,58歳,大阪）
- ガイド付き映画館上映で,日程が指定されるのはよいが,時間はいつ行ってもよいようにしてほしい。（弱視,女性,64歳,大阪）
- 特になし。ガイドが付いたら映画館に行くと思う。(弱視,女性,21歳,鹿児島）
- 全ての映画館に音声ガイドではなく,県でどこか1カ所で音声ガイドつきの映画館があればいいかなと思います。(弱視,女性,38歳,鹿児島）
- 特になし。好きなもの,見たいものにつけば見に行く。(弱視,男性,32歳,鹿児島）
- 音声ガイドはとても良いが,イヤホン等で分ける工夫すると,健常者ともみんなで見る事が出来るのではないか。健常者にとっての聞きやすくなるのではないか。（弱視,男性,38歳,鹿児島）
- 近くの映画館の数がかぎられている。字幕は大きく,ゆっくりと。音声ガイドもしっかりとつけてほしい。(弱視,女性,40歳,鹿児島）
- 聞きやすかった。（弱視,男性,80歳,青森）
- ナレーターは男性の方が聞きやすい。音声解説の声が本を朗読しているときと似たニュアンスに聞こえた。時々何の場面かがわからないことがあった。（その他,男性,46歳,北海道）
- とてもよくできていると思いました。今までのような映画館でしか見られないとか音声案内がついているDVDでもやはりセリフと案内が混在してしまってよくわからなくなってしまうというおそれがないので映画館の音声案内と同じように聞けるというのはとてもすばらしいと思いました。また晴眼者では気が付かないことが発見されたのも面白かったです。最近の視覚障碍者向けのアプリでもなかなかうまく使えないアプリがありますがこのアプリは使えそうでした。今後色々な作品の発売に期待をしています。（その他,男性,54歳,北海道）

Q. その他,お住まいの地域での状況,映画の音声ガイドに関するご意見を自由にご記入ください

- 川崎地域で,いつどの回でもガイド付きだったら行きます。ガイドの声を高くしたり,低くしたり,自分の好みの高さで聞けたらよい。⇒PCでも,みんな好みの声で聞いているから。ガイドなしのものは,後から,「あれはどうなの?」と聞けるところがあるとよい。（全盲,女性,42歳,神奈川）
- 地域の映画館で,いつどの回でも音声ガイド付きで上映することを希望する。パイオニアで『最強のふたり』を観た。アンパンの4倍ほどのものを持ってみると,震えて,車のスタートなど音が大きくなると振動した。背もたれにも振動プレートがついている。贅沢ですが,それがついてたら,リアリティがあって面白い。視覚障害者にもインパクトがある。（全盲,男性,65歳,東京）
- どこの映画館でも楽しみたい。作品数がもっと増えればいいなと思う。新高島にあるシネマでもやってくれたらうれしい。（全盲,男性,70歳,神奈川）
- 関東とはいろんな意味で土壌が違うように感じます。単独歩行する人も少ないですし,物事にお金を払う感覚も薄い気がします。古くからのは,変化を好まないような印象もあります。わざわざ健常者と同じじゃなくてもいいという空気もありそうです。その一方で,サピエのシネマデイジーがランキングに入っているところを見ると,映画に興味がないわけではなさそうです。やはり,移動とお金なのでしょうかね？見えないけれど,違う形で「見て楽しむ」ことを知らない,慣れていない。と,よくわからないなりに,いろいろ考えます。（全盲,男性,42歳,北海道）
- 視覚のある友人たちは,映画の話題で盛り上がることがよくあります。映画鑑賞は,もちろん個人の嗜好ではありますが,加えて,いろいろな人たちと話題を共有するためのコミュニケーションツールの一つともなります。札幌も,東京のように,上映会が増えることを願っていました。しかし,ここ1年のようにいざ上映会が少しでも増えてくると,所用が重なりなかなかいくことができませんでした。各映画が公開中はいつでもいけるようになったらよいなと思います。（全盲,女性,58歳,北海道）
- 地域内で音声ガイド付きの映画がないので増えてほしい。（全盲,女性,29歳,青森）
- どの映画にも音声ガイドが付いてくれることを願っています。（全盲,女性,46歳,青森）
- 見たい時,いつでもみれるように,気がねなく,利用できるようになればよい。（全盲,女性,53歳,青森）
- この映画があっても行くまで 大変です。（全盲,女性,72歳,青森）
- 生活している近くに,そういう施設があったらよいなと思う。（全盲,女性,74歳,青森）
- 映画館で一般の人たちと映画を味わうことが大切。映画館で障がいのある人を補う環境を望む。バリアフリー化がどんな形で実現するのか,具体的に知りたい。（全盲,男性,79歳,青森）
- いつでも,どこの映画館でも,音声ガイド付きで上映されること。（全盲,女性,79歳,青森）
- どんな映画にも,音声ガイドを付ける場合,ガイドは人間がやっているので,自由に感情を出してほしい。伝え手が楽しんでもらわないと,いい・悪いがボケてくるから。視覚障害者もスタッフとして,声の出演をしてみるとか,1本の映画をつくる楽しみを体験したい。ほかの方にも体験してほしい。（弱視,男性,52歳,埼玉）
- 東武東上線沿線（シネプレックスわかば）で回数を多く観たい。地域の映画館の受け入れ体制の整備（ボランティアグループが音声ガイドを付けた場合,いつでも鑑賞させてほしい）劇場の音声ガイドの理解不足。普通の映画に最初から音声ガイドを付けてほしい。観たい映画全部につけばいい。(弱視,女性,59歳,埼玉）
- 特にありません。（現段階では）埼玉県の映画館でガイド付き上映したら行くけど,現状は。もともとあまりみないが,よい映画についたら行きたい。（弱視,男性,62歳,埼玉）

- 音声ガイド付きでみたい。特に外国映画。＋動体視力が弱いので字幕についていけない。より従って外国語のものは音声の日本語吹き替えのものを探すのが大変。DVDショップの店員さんに探してもらうのだが,忙しそうだと頼めない。(弱視,男性,80歳,青森)
- シネマフロンティアだけではなく,札幌ファクトリーにある映画館,その他の小・中規模の映画館でも利用できるとよいと思います。昔の映画(名画といわれる作品)にもつくと,かつての記憶がよみがえり,楽しめる可能性が増えると思います。(その他,男性,46歳,北海道)
- 音声案内付映画は札幌で言うとほとんどやられていないに等しいほどあまり知られていなかったように思います。私が知らなかっただけかもしれないですが昨年から数回にわたりやっていただいています。とてもいい経験をさせていただきました。しかし映画を見る際にFMラジオを使ってやるにも機材をそろえたり設定したりと数多くの方の手助けが必要です。しかしこのシステムが完成されればアイフォンがあればだれでもできるという手軽さなのでこれを成功させていただきたいと思いました。(その他,男性,54歳,北海道)

参考資料:

1. ACRデータ2013年(株式会社ビデオリサーチ,東京30km圏内,2625人)
2. 2014年全国映画概況(日本映画製作者連盟), http://www.eiren.org/toukei/img/eiren_kosyu/data_2014.pdf
3. Sawako Nakajima, Naoyuki Okochi, Kazutaka Mitobe, Tetsujiro Yamagami, "Gaps between the Expectations of People with Hearing Impairment toward Subtitles and the Current Conditions for Subtitle Creation in Japan", Computers Helping People with Special Needs: 14th International Conference, ICCHP 2014, Proceedings, Part I, vol. 8547, pp. 13-16, 2014.
4. 平成26年上映外国映画作品一覧, 一般社団法人外国映画輸入配給協会, http://www.gaihai.jp/filmlist_26.pdf
5. 平成26年外画概況会社別一覧表, 一般社団法人外国映画輸入配給協会, http://www.gaihai.jp/corporation_26.pdf

2 章

映画字幕及び
音声情報に関する
技術開発動向等に関する調査

アメリカ、イギリス、韓国、日本の現状と動向

映画館におけるバリアフリー対応の状況調査

聴覚障害者や視覚障害者に配慮した日本語字幕と音声ガイド付きの映画上映。日本では、ニーズがあるにも関わらず、まだまだ環境が整っているとは言い難いことが、第１章のアンケート調査・分析結果からわかった。そこで、第２章では海外に目を向け、アメリカ、イギリスと隣国である韓国の現状を調べた。

日本の現状

字幕や音声ガイドが付いても場所や日時、回数が限定

はじめに、日本の現状。日本映画製作者連盟が発表した2014年国内映画公開作品615本のうち、日本語字幕（聴覚障害者向けバリアフリー字幕）付き作品はわずか66本。音声ガイドはさらに少なく６本にすぎない。（MASC調べ）

日本語字幕が付く場合も、上映劇場、日時、回数が限定されている。上映素材がフィルムの場合は字幕が映画本編に焼き付けられている形式が主流。近年ではDCP（デジタルシネマパッケージ）時代に移行し、技術的には映写の際のオン・オフで字幕の表示が可能になったが、上映設備は各館ごとにメーカーが異なり、字幕の見え方の調整に「全メーカーで互換性を取る作業」が別途必要になる。そのノウハウは大手のラボしか持っていないため、この点にも経費がかかるなど、字幕対応がスムーズに進まない要因がある。

また、字幕を必要としない観客の一部とニーズが一致しないという課題がある。

日本映画に比べ外国映画には、ほぼ全作品に翻訳字幕が付くが、聴覚障害者が必要とする情報（話者名、環境音、音楽情報等）が欠けている点が指摘されている。

字幕のほかに、難聴者の聞こえをサポートする赤外線システムなど補聴援助システムの整備を、導入している劇場が一部ある。

一方の音声ガイドは、FM送信により、視覚障害当事者が、音声ガイドのみをラジオで受信する方式（ラジオは貸し出す場合と利用者が持参する場合がある）。ガイドの音声は、映画本編の音と同期させる必要がある。DCPに移行し、フィルムのころのよう

国内外状況調査

※映画はそれぞれ国内製作の作品としている。

日本の現状

【字幕について】
- 聴覚障害者向けに日本語字幕を付けて上映している作品があるが、作品数、上映劇場、上映日時が限定されているため、当事者は鑑賞できる上映回が限定されている。
- 2014年国内映画の公開数615本中（2014年日本映画製作者連盟発表）日本語字幕付き作品66本。（2014年MASC調べ）

＊焼き付け字幕：映画自体に直接貼り付いている字幕のことで、洋画の場合に表示されている翻訳字幕と同じ形式。

【音声ガイドについて】
- 視覚障害者向けの音声ガイドを付けている作品はとても少ない。また音声ガイド付き上映をする際は、NPOやボランティア団体が音声ガイドの音のみをFM送信で行い、当事者はラジオで受信する方式のため、必ずオペレーターが必要となる。
- そのため、字幕付き上映よりも作品数、上映劇場、上映日時が限定される。実施されても全国で６劇場から９劇場程度。
- 2014年国内映画の公開数615本中（2014年日本映画製作者連盟発表）音声ガイド付き作品６本。（2014年MASC調べ）

＊音声ガイド：情景、場面、人物の動きなど、目から入る情報を言葉で説明するナレーションで音声解説、副音声とも呼ばれてる。

【制作コスト】
- 日本語字幕は、映画１分につき2000円程度。音声ガイドは、映画１分につき3000円程度。（MASC調べ）

【補足】
- 日本には劇場の常設設備で日本語字幕を投射するシステムや音声ガイドを送出するシステムはない。
- 一部の劇場で、赤外線などによる難聴補助システムの導入に取り組んでいる事例がある。

アメリカの現状　調査員：藤岡朝子

【字幕について】
- オープンキャプション形式では日時限定で上

に、コマが落ちていたり、映写機による映写スピードが微妙に異なったりすることはなくなったものの、上映時にオペレーターがタイミングを合わせて音声ガイドを送出し、本編と同期していることを確認することが必要になる。また、劇場にFM波の送信機器を搬入・設置が必要で、オペレーターの配置は必須条件となることからコストもかかり、作品数、上映劇場、日時が限定される。実施されても全国６～９劇場程度で各一回限りとなりとても少ない。

それでは、海外の事例はどうか。劇場での映画のバリアフリー化の現状をみてみる。

アメリカの現状

改正法規で、劇場整備さらに促進の動き。支援機器も多種開発

アメリカの場合。単純に日本の数字と比較することはできないが、メジャー・スタジオ（MPAA加盟社）が2010年に公開した映画140本のうち、字幕付き作品は120本程度、音声ガイドは140本と全作品に付いた。

字幕は、オープンキャプション形式とクローズドキャプション形式の２通りある。

主流はクローズドキャプション形式。設備機器は、後方に表示された鏡文字の字幕を手元の反射板に写す表示器（MoPix's Rear Window）、Wi-Fiで文字情報を送信し、カップフォルダーに差し込んだ棒の先端に有機発光ダイオードの小さなディスプレイを付けた表示器（CaptiView, doremi）、赤外線送信で、メガネ型もしくは表示版に字幕を出す機器（USL）、無線受信する端末と繋がったメガネ型のホログラムによる字幕表示（Entertainment Access glasses, Sony）など。紫外線で投影された字幕をフィルターつきの特殊メガネで見るシステムも開発中。
支援機器は劇場が無料で観客に貸し出している。

オープンキャプション形式の場合は、日時限定で上映している。10人以上の聴覚障害者団体から要請がある場合は、通常上映回をオープンキャプション形式で上映する劇場もある。

一方の音声ガイドは、DCPのデジタルスクリーンで、音声ガイド付きの作品上映であれば、クローズド形式で、いつでも音声ガイドを聞くことができる。
FM送信、赤外線、Wi-Fi等を利用し、映写室から発信された信号が観客の首にかけているループやヘッドフォン等に届く。機器はneckloop、ソニーのSony Entertainment Access glassesなど。機器は劇場が無料で貸し出す。

WGBH（ボストン公共放送局）のメディア・アクセス・グループのアリソン・グッドバーン取締役は、「今後５年で、全ての劇場公開映画が100％字幕・音声ガイド付きで上映されるだろう」と話している。自主製作映画なども含め今後、字幕・音声ガイド付

映を行っているが、10人以上の聴覚障害者団体から要請がある場合は通常上映回をオープンキャプション形式で上映する劇場もある。現在は、クローズドキャプション形式が主流。機器は無料で劇場が貸し出しをしている。
・2010年メジャー・スタジオ（MPAA加盟社）公開数140本中　字幕付き作品120本程度（140本中86％）。
参考：2013年メジャー・スタジオと中堅メジャー・スタジオ公開作品198本。
・全米で約140社が字幕制作を行っている。（全米ろう者協会調べ）

【音声ガイドについて】
・DCP（デジタルシネマパッケージ）でデジタル・スクリーンでの上映であれば音声ガイドを制作した作品は、ＦＭ送信、赤外線、Wi-Fiなどで常時音声ガイドを聞く事ができる。neckloopやヘッドホンを使用。機器は無料で劇場が貸し出しをしている。
・2010年メジャー・スタジオ（MPAA加盟社）公開数140本中　音声ガイド付き作品140本。
参考：2013年メジャー・スタジオと中堅メジャー・スタジオ公開作品198本。

＊DCP（デジタルシネマパッケージ）：デジタルの映画素材の名称。フィルム（アナログ）のように映画を収録している素材。

【コストについて】
・字幕は、映画１分につき12ドル（Closed Caption Productions）、音声ガイドは、映画１本につき2000～3000ドル（Audio Description Project）。１ドルを120円と換算し、映画を120分と想定した場合、字幕は１分につき1440円、音声ガイドは１分あたり2000～3000円。

【ガイドラインについて】
全米ろう者協会が字幕・音声ガイドに関する推奨ガイドラインを設け、インターネット上で公開している。
（字幕 http://www.dcmp.org/captioningkey/
音声ガイド http://www.dcmp.org/descriptionkey/）

【補足】
・司法省の2014年の文書では「2011年以降、字幕・音声ガイドの付与本数を公に記したデータはないが、2012年以降増えることが予測できる」としている。

【劇場スクリーンについて】
・アメリカ映画協会（MPAA）の2013年レポートによると、全スクリーンの93%がデジタルに移行済み。
・全米映画館主協会（National Association of Theatre Owners）によると、全国のデジタル・スクリーンのうち少なくとも53%は字幕と音声ガイド付きで上映できる。（2013年5月）。
・映画館チェーンの大手３社（全スクリーンの42％）がデジタル化された全館にクローズドキャプション・音声解説に必要な装置導入を公約している（Regal, Cinemark, AMC）。

【「障害のあるアメリカ人法（ADA法）」タイトルⅢに関する施行規則の改正法規案について】
・2014年７月25日に公示された。この法規案は、全国の全ての映画館の全ての上映回を対象とし、字幕や音声ガイドがすでに付いている映画が上映される場合、聴覚障害者は個人用

きが促進される要因として、次の２つが挙げられる。

1. 障害を持つアメリカ人法（ADA法、1990年制定）の施行規則の改正法規案が2014年７月25日に公示された。すべての映画館の全ての上映回で、字幕や音声ガイドが付いている映画が上映される場合は、聴覚障害者は字幕を読めるように、視覚障害者は音声ガイドを聞けるように義務化するもの。そのための装置の導入も義務とされ、座席数の多さによって、個人使用装置の最低数も定められる。案では、字幕は個人用の字幕表示機と音声ガイドの装置が、100席以下は２台、101～500席は２台プラス100席以上の50席ごとに１台といった台数。

2. 司法省が2014年に発表した文書に、「2011年以降、字幕・音声ガイドの付与本数を公に記したデータはないが、2012年以降増えることが予測できる」と明記されている。

イギリスの現状

オープンキャプション字幕で多数回上映、音声ガイドも豊富な作品数

イギリスの現状をみる。2013年に公開された国内映画202本（BFI Statistical Yearbook 2014調べ）のうち、字幕付き、音声ガイド付きいずれも170本だった。（Action on Hear LossとYour Local Cinema調べ）

字幕は、オープンキャプション形式。日時指定で上映するが、毎週上映している劇場が756館中400館以上ある。毎週1000回以上の上映回数になり、この５年間で120％増加した。クローズドキャプション形式は未導入。

毎週30作品以上を10社の配給会社が新たに提供する。人気上位10作品は、ほぼ網羅される。

聞こえを支援する機器の導入が多く、音を大きくするループの普及率が高い。
※ループは、音声ガイドにも使用している。

音声ガイドは、クローズド形式。DCPで上映されるスクリーンであれば、音声ガイド付き作品は、いつでも音声ガイドを聞くことができる。756館中300館で上映されている。

人気上位作品は音声ガイドが付いていて、20社以上の提供により300館で上映される。

FM送信、赤外線、Wi-Fi等を利用し、映写室から発信された信号が観客の首にかけているループやヘッドフォン等に届く。機器はneckloop、赤外線式ヘッドフォンなど。
※インターネット上で最寄りの映画館の字幕付き・音声ガイド付き上映日時が調べられる。
※AOHL（Action On Hearing Loss）のウェブから、映画館のスタッフに、機材を周知させる資料をつくり、ダウンロードできる。
※障害者の介助者は無料で映画鑑賞券を提供されるCEAカード制度がある。

の字幕表示機（またはオープンキャプション）で字幕を読めるように、視覚障害者は音声受信機を通して音声ガイドを聞けるように、義務化するもの。
- クローズドキャプション用と音声ガイドの装置を導入する義務が課され、装置数は、映画館のスクリーンではなく、総座席数に比例して台数が規定される。100席以下は個人使用装置を最低２台設置、101～500席は２台プラス50席ごとに１台、501～1000席は10台プラス75席ごとに１台、1001～2000席は18台プラス100席ごとに１台、2001席以上は28台プラス200席ごとに１台。※音声ガイドの装置は、難聴者向けの増音量ヘッドホンの別チャンネルを使ってもよい。※字幕装置の品質基準（利用者が自由に位置を調整できる、読みやすい文字など）も明記している。
- ほかに、映画館スタッフが装置の管理・配布・使用方法の説明ができるよう、訓練すること。字幕・音声ガイドサービスの提供を興行の宣伝広告の際に各メディアを通して広報すること。字幕や音声ガイドの付いていない映画に新たに字幕や音声ガイドを付けることを求めない。デジタル・スクリーンは法規公布から６カ月以内に遵守が求められる。アナログ・スクリーンについては２案あり、国民意見を募集：①４年以内に遵守、②規則づくりを延期。※アナログ・スクリーンの映画館の多くが小規模事業者で、デジタルに移行期にあるか、今後以降できずに廃業する可能性を考慮している。※本法規を15年有効と仮定し、機材導入の全国総コストが査定されている。デジタル・スクリーンでは年平均1520～2040万ドル（割引率７％）、年平均1420～1890万ドル（割引率３％）のコストと試算されている。さらに映画館の規模による４つのグループ別〔メガプレックス（16スクリーン以上）、マルチプレックス（８～15スクリーン）、ミニプレックス（２～７スクリーン）、シングルスクリーン〕のコスト試算も行っている。※小規模事業者が設備投資を負担と思う場合はADA法遵守のための特別な税額控除制度を利用するよう、勧めている。

イギリスの現状　調査員：藤岡朝子

【字幕について】
- オープンキャプション形式上映で日時指定だが、毎週上映をおこなっている劇場が756館中52％。毎週1000回以上の上映回数になり、この５年で120％増加。クローズドキャプション形式は未導入。
- 2013年国内映画の公開数202本中（BFI Statistical Yearbook 2014調べ）字幕付き作品170本（Action on Hearing Loss /Your Local Cinema調べ）

【音声ガイドについて】
- DCP（デジタルシネマパッケージ）でデジタルスクリーンでの上映であれば音声ガイドを制作した作品は、FM送信、赤外線、Wi-Fiなどで常時音声ガイドを聞く事ができる。neckloopやヘッドホンを使用。20社以上の提供により300館で上映されている。聴覚障害者対応機器としてのイヤホンのように装着する映画の音を大きくする機器hearing loopを音声ガイド視聴用として併用して使用。

韓国の現状

バリアフリー上映が、映画館の社会貢献事業として推進

韓国では、2013年韓国映画産業決算報告書によると2013年の国内映画公開数183本。そのうち、字幕付き、音声ガイド付き、両方が付いている作品が14本。（2013年、（社）韓国ろう協会と（社）バリアフリー映画委員会調べ）　作品数、上映劇場・日時が限定されているが、字幕は本編への焼き付け形式、音声ガイドは劇場のスピーカーから本編音声と音声ガイドが一緒に流れるオープン形式で上映される。上映はDCP素材で行い、通常版DCPとバリアフリー版DCPの２種類を制作している。

大手映画チェーン・CGVの社会貢献事業「障害者映画鑑賞デー」として、毎月第３週の火・木・土曜日に全国15～25スクリーンで上映される。

日本でのバリアフリー化促進は喫緊の課題

障害者差別禁止法がすでに制定されているアメリカ（ADA法 Americans with Disabilities Act of 1990）とイギリス（Disability Discrimination Act,1995. Equality Act, 2010）では、障害者の文化的な生活を送る権利保障への取り組みが進められている。この取り組みは、アメリカにおいてはさらに加速されると言われている。

日本においても、障害者差別解消法（障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律）が制定され、2016年４月施行に向けての対応が求められている。映画を観たいときに観ることが出来る環境をつくることは喫緊の課題となった。

アメリカでは大手メジャー・スタジオが業界を牽引して字幕・音声ガイドを制作、視聴システムも多数のメーカーが開発を進め、映画館がいずれかを採用している。字幕を見たい人だけが見る、音声ガイドを聞きたい人だけが聞くというクローズド形式が主流になっている。

イギリスでも配給会社が毎週30作品以上に字幕・音声ガイドを制作。字幕はオープンキャプション形式、音声ガイドはクローズド形式で上映される。字幕の場合も毎週上映し、年々上映回数も増加している。

いずれの国においても、難聴者支援の設備も導入されている。

また、隣国・韓国においても、障害者差別禁止法を2008年４月に施行し、2011年には放送法を改正。放送事業者やインターネットマルチメディア放送事業者に、字幕、クローズドキャプション、手話通訳、音声ガイド等のサービス提供が義務付けられ、目標数値が設定された。また、映画においても、バリアフリー上映の取り組みが積極的に始められている。

・2013年国内映画の公開数202本中（BFI Statistical Yearbook 2014調べ）字幕付き作品170本（Action on Hearing Loss /Your Local Cinema調べ）

【コストについて】
・字幕制作は約1000ポンド、音声ガイド制作は約2000ポンド（Your Local Cinema調べ）。
・１ポンドを185円と換算し、120分の映画とした場合、字幕は１分あたり約1540円、音声ガイドは１分あたり約3080円。

【補足】
・貸出用の劇場スタッフのマニュアルあり。
・障害者の介助者は無料で映画鑑賞券を提供されるCEAカード制度あり。

韓国の現状　調査協力：社団法人バリアフリー映画委員会

【字幕について】
・聴覚障害者向けに字幕上映をしている作品があるが、作品数、上映劇場、上映日時が限定されているため、当事者は鑑賞できる上映回が限定されている。「CGV＋韓国ろう協会＆韓国視覚障害者連合会＋KOFIC」の事業で大手映画チェーンCGVの社会貢献事業「障害者映画鑑賞デー」にて毎月第3週の火・木・土に全国15～25スクリーンで上映。
・2013年国内映画の公開数183本中　字幕付き作品14本。（（社）韓国ろう協会/（社）バリアフリー映画委員会調べ）

【音声ガイドについて】
・視覚障害者向けの音声ガイドを付けている作品は少ないため作品数、上映劇場、上映日時が限定される。音声ガイド付き上映をする際は、オープン形式で行っている。「CGV＋韓国ろう協会＆韓国視覚障害者連合会＋KOFIC」の事業で大手映画チェーンCGVの社会貢献事業「障害者映画鑑賞デー」にて毎月第３週の火・木・土に全国15～25スクリーンで上映。
・2013年国内映画の公開数183本中　音声ガイド付き作品14本。（（社）韓国ろう協会/（社）バリアフリー映画委員会調べ）

＊オープン形式：映画の本編と同じように、音声ガイドも観客全員に聞こえるように流す形式。

【コストについて】
・字幕制作は、映画１本約200万ウォン、音声ガイド制作は、映画１本約980万ウォン。映画の基準は120分（バリアフリー映画委員会調べ）。
・１ウォンを0.11円に換算した場合、字幕は１分あたり約1830円、音声ガイドは１分あたり約8980円。

【補足】
・韓国はバリアフリー版の劇場上映は字幕と音声ガイド、両方が入っているものしかない。通常バージョンのDCPとバリアフリーバージョンのDCPを２つ作成し、スクリーンを限定して、あるスクリーンは一般バージョン、あるスクリーンはバリアフリーバージョンを上映。
　映画館に来た人はチケットを購入するとき、BFという印がついている回を選ぶ。

日本においては、先進事例を参考に、映画における字幕・音声ガイドの制作・普及には、映画製作・配給、興行、2 次利用関係者、バリアフリー設備製造者、障害当事者などが、互いのノウハウを提供しあって、システムを構築し、推進していくことが望まれる。現在、MASCによる「音声電子透かし技術」を使った字幕・音声ガイドの提供システムの導入の検討は、その端緒についたと言える。

第27回東京国際映画祭
共催企画

映画の未来 ～新しい映画鑑賞システムを体験!!

ご報告

2014年10月24日にTOHOシネマズ日本橋にて実施した。

映画『舞妓はレディ』(監督・脚本　周防正行氏)を上映し、日本語字幕・英語字幕はヘッドマウントディスプレイ(EPSON社MOVERIO／オリンパス社MEG)に表示させ、音声ガイドはスマホアプリから提供した。iOS端末をお持ちの方にはご自身の端末にインストールしていただき、その他の方にはiPod touchを貸し出し、体験していただいた。

上映後は、周防正行氏(映画『舞妓はレディ』監督・脚本)、聴覚障害者の松森果林氏(ユニバーサルデザインアドバイザー)、華頂尚隆氏(日本映画製作者連盟事務局長)の３名に加え、『舞妓はレディ』の音声ガイドを制作した松田高加子氏(Palabra株式会社)の司会により、シンポジウムを行った。映画のバリアフリー化における現状や今後の課題、そして今回の新システムについてなど熱い意見が交わされた。

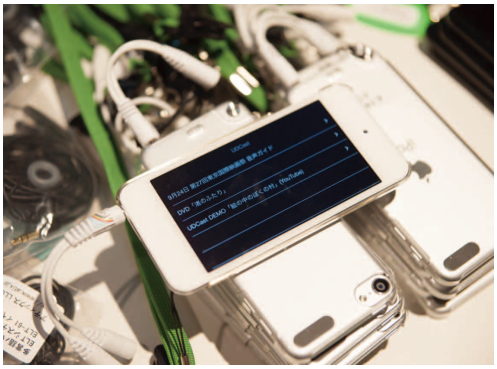
●シンポジウムでのコメント抜粋（敬称略）

周防正行：

バリアフリー化によって多くの人に観ていただくことで、私の映画にたくさんの新しいイメージが生まれていくことに感動を覚えました。私は常日頃から「お客さんを選ばない映画をつくりたい」と考えており、映画のバリアフリー化に関する試みは、その想いを新たにしてくれました。視聴覚障害者の方でも映画を観られる環境が整えば、映画監督はそういった人々にも作品を届ける努力を絶対にするはずです。こうした試みが多くの人に伝わり、映画のバリアフリー化に挑戦する監督が増えることで、システムもより洗練されていくのではないでしょうか。

松森果林：

私の趣味は映画鑑賞ですが、邦画には特定の上映会以外では字幕が付いておらず、邦画を鑑賞できる機会は限られています。今は普通に耳が聞こえている人も、いずれは耳が聞こえにくくなる可能性があります。全ての人々が映画を楽しめるよ



う、今後も映画業界全体でバリアフリー化について考えていただければ幸いです。

華頂尚隆：

完成した作品をひとりでも多くの方にお届けするのが我々映画製作者の使命であり、またそれが我々のビジネスチャンスでもあります。この新システムの一日でも早い普及を目指し、今後も皆様のご指導ご支援を賜りたいと思っています。

●新システムを使用した当事者の方々の声

視覚障害のある体験者：

システムに感動しました。今回初めて、貸し出された端末ではなく自分のiPhoneを使って音声ガイドを楽しむことができて非常にうれしかったです。これがあれば、どこでも、いつでも、映画を楽しむことができると期待しています。

聴覚障害のある体験者：

登場人物によって字幕が色分けされており、会話の状況がとてもわかりやすかったです。鹿児島弁や津軽弁、京言葉といった方言の違いを楽しむこともでき、新鮮な気分を味わえました。とても良いシステムで、今後普及してほしいと痛切に思いました。

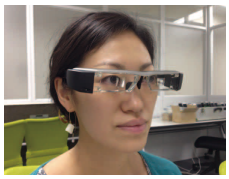
当日は、視覚障害者６名、聴覚障害者（注＊）９名、ネイティブスピーカー（英語）１名、省庁関係者７名、映画業界関係者は70名近く来場され、シンポジウムを含めると157名の総来場者となり大盛況だった。

（注＊）聴覚障害者への情報保障として文字通訳と手話通訳を用意

音声透かし入り マスター制作工程

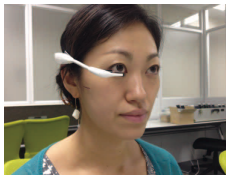
１：マスターをお預かりし、字幕・音声ガイド制作開始
２：マスター音声に電子透かしを挿入
３：字幕・音声ガイドは校正後、スマートフォンアプリに挿入
４：スマートフォンアプリを公開

◆エプソン社MOVERIOの特徴



両眼式で誰が見てもしっかりと字幕表示が可能。若干重量があり、長く着けていると重く感じる。

◆オリンパス社MEGの特徴



単眼式で字幕の見方は少し慣れが必要。軽いので長時間でも気にならない。字幕の位置を自由に設定出来る。

東京国際映画祭
バリアフリー上映＆シンポジウム
過去の実績

2013(平成25)年
第26回東京国際映画祭共催企画「映画の未来」

シンポジウム:「バリアフリー上映に対応する新しい劇場設備と、バリアフリー上映によって広がる観客の可能性について」

上映作品『武士の献立』

字幕:焼き付け＆携帯端末
音声ガイド:携帯端末
(音声電子透かしを使った同期システムを初めて使用)

2012(平成24)年
第25回東京国際映画祭自主企画　日本橋で日本映画を観よう

シンポジウム:「バリアフリー映画をスタンダードに」

上映作品『裸の島』

字幕:焼き付け
音声ガイド:オープン方式

新藤次郎氏の言葉
「障害のある方の“劇場でみんなと一緒に新作を観たい”という声を初めて聞いた。映画というのは劇場での体験型の娯楽。違う文化の国の人や、いつもは楽しめない人にも鑑賞してもらえることも映画の勲章かなと思う」

2011(平成23)年
第24回東京国際映画祭共催企画
「映画の未来～バリアフリー上映を考える」

シンポジウム:「視聴覚障害者のために『映画』の在り方を考える」

上映作品『幸福の黄色いハンカチ』

字幕:焼き付け(字幕メガネの試用も一部あり)
音声ガイド:活弁士によるライブ音声ガイド

山田洋次監督の言葉
「障害のある方のバリアを低くするための科学技術が進歩するなら、諸手を挙げて賛成したい。これからも進歩して続けてほしい」

2014年 東京国際映画祭チラシ

2013年 東京国際映画祭チラシ

2012年 東京国際映画祭チラシ

2011年 東京国際映画祭チラシ

新システムの実地調査

中島 佐和子（秋田大学大学院工学資源学研究科情報工学専攻 助教）

ここでは，視覚障害者と聴覚障害者を対象に，音声電子透かし，HMD，iPod touchによる新しい字幕および音声ガイド提示システムを用いた映画鑑賞を実施し，本技術の有用性と課題を評価した。調査1では，両眼式HMDとiPod touchを用いて，新技術への期待や使用感に関する聴覚障害者と視覚障害者からの評価を得た。調査２では，両眼式と単眼式の２つのHMDを用いて，HMDによる字幕提示に対する聴覚障害者のより詳細な要望を確認した。

１．両眼式HMDおよび iPod touch に対する評価（調査1）

１－１．方法

【対象者】

聴覚障害者：
７名（男性３名，女性４名），平均63.5歳（±0.7歳），
東京にて調査実施

注）図１(a)のみ調査対象者は38名（男性20名，女性18名），
平均48.7歳（±18.8歳）

視覚障害者：
11名（男性７名，女性４名），平均55.0歳（±9.6歳），
東京および北海道にて調査実施

【使用機材および視聴映画】

図１は新技術使用前，図２は新技術を用いた映画視聴後の結果である。図2(a)の聴覚障害者を対象とした調査では，字幕提示にEPSON社製の両眼式HMD（MOVERIO）を使用し５分程度の映画を鑑賞した。図２(b)の視覚障害者を対象とした調査では，音声ガイド提示にiPod touchからのイヤホンを使用し，ドキュメンタリー映画を鑑賞した。

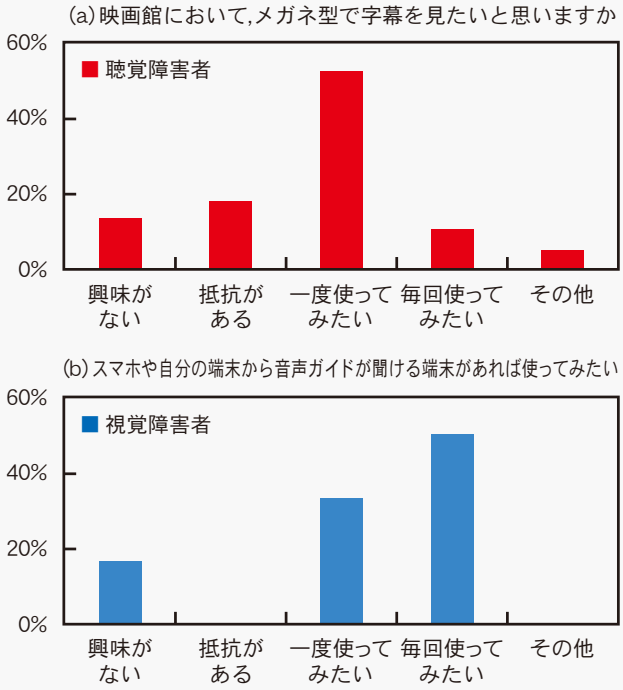


図1　新技術への期待

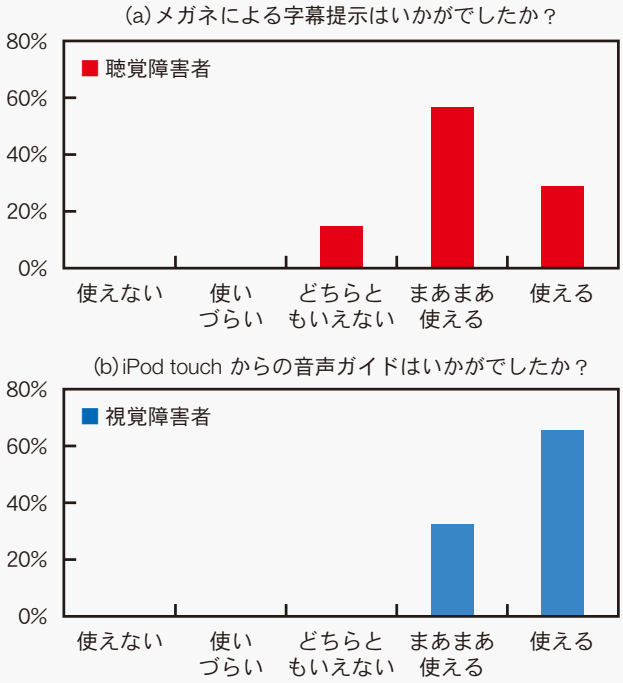


図2　新技術の使用感

１－２. 結果と考察

調査の結果,新技術への期待に関しては,聴覚障害者では４段階中２番目に好感度の高い「一度使ってみたい(52.6%)」の回答が最も多く(図１(a)),視覚障害者では５段階中１番目の「毎回使いたい(50.0%)」の回答が最も多かった(図１(b))。また,新技術の使用感については,聴覚障害者では５段階中２番目に評価の高い「まあまあ使える(57.1%)」が最も多く(図２(a)),視覚障害者では５段階中１番目の「使える(66.7%)」が最も多かった(図２(b))。両群ともに新技術への期待は高く使用感についてもよい感触を得たが,聴覚障害者に比べて視覚障害者の方がより好印象な傾向があった。得られたコメントを踏まえ,以下に論点をまとめる。

聴覚障害者からは「周りに気づかれることにまだ違和感がある」のコメントが一部に見られた。この点は,新技術への抵抗感の一要因になっていると考えられる。一方,字幕の見え方に関しては,66.7％が4段階中２番目に高評価である「見やすかった」と回答したものの３番目の「やや見づらかった」の回答も33.3%存在した(図３(a))。具体的には,「メガネの重さ」,「眼精疲労」,「字幕色の視認性(背景と重なると見えにくい,人によって変えたほうがいい、ほか)」,「字幕のぼやけ」,「フレームによる視野狭化」,「字幕の位置合わせの難しさ」などが指摘された。いくつかの技術的課題(設計要素)に絞って改良点を質問した結果,「字幕の色(60.0%)」の工夫への要望が最も多く,続いて「字幕の文字数(40.0%)」が多かった(図３(b))。字幕の色に関しては,映画館環境に対して可能な限り最適化しユーザーごとに選択可能な本システムの利点を最大限活かすことで,カラーバリアフリーなどの課題にも対応できる可能性は十分に考えられる。このように,字幕の見え方に関しては改良の余地があるが,「(字幕が)はっきり見えるのではないか」や「楽しい」というポジティブなコメントも得られたことから新技術への期待が伺えた。なお,HMDを用いた字幕提示では,字幕コンテンツ自体も個人の要望に合わせて選択できる点も有益である。セリフや環境音や音楽を説明する字幕の分量について,「Q. 映画鑑賞時に３つの字幕が選べるとしたら,どれを選んで鑑賞しますか(調査対象者は30名)」の質問を行ったところ,「セリフ字幕のみの映画(39.5%)」,「セリフ字幕だけでなく,環境音や効果音や音楽を説明する字幕も適度についた映画(31.6%)」,「セリフ字幕・環境音や効果音字幕・音楽字幕ができるだけ多くついた映画(28.9%)」の順に多い回答を得た。しかし,その差は顕著でなく(カイ二乗適合度検定による有意差なし),それぞれのタイプの字幕にニーズがあることが確認できた。高齢難聴者などへの字幕提示も想定すると,必要な字幕の多様性はさらに広がることも考えられる。聞こえの状態などに応じた字幕提示を実現する上でも,本技術の有用性が期待できる。

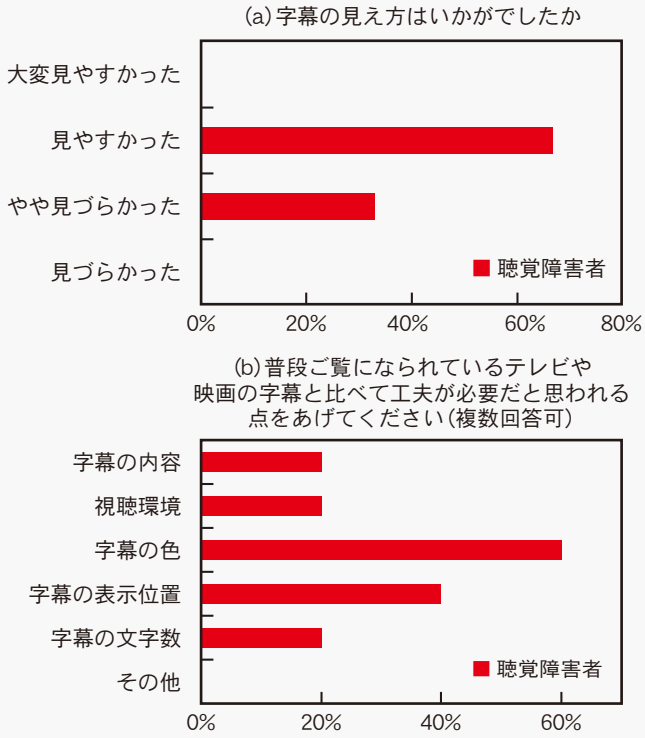


図3　HMDによる字幕提示の感想(聴覚障害者)

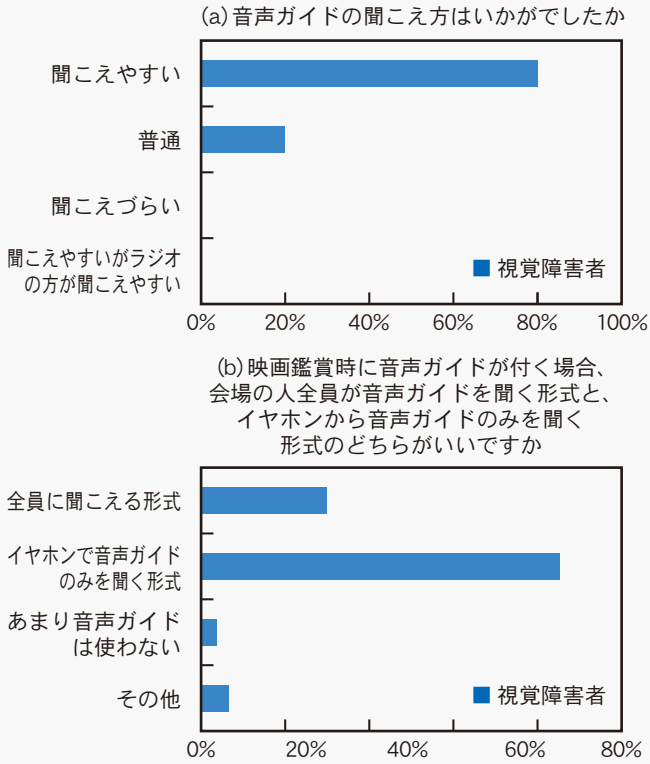


図4　iPod touch による音声ガイド提示の感想(視覚障害者)

一方,視覚障害者のiPod touchを用いた音声ガイド

提示に対する反応はより明確であり,「ノイズが入りにくく聞こえやすい」という声が多数得られた(図４(a),コメント一覧)。さらに,映画鑑賞時の音声ガイドの聞き方として最も好ましい形式を「全員に聞こえる形式」などの選択肢を用いて質問したところ,圧倒的に「イヤホンで音声ガイドのみを聞く形式(68.4％)」の回答が多かった(図４(b))。その主な理由は,「音量調整ができること(台詞と音声ガイドでは聞き方が異なる,台詞とガイドの混在を防げるなど)」および「音声ガイドを必要としない方たちへの配慮」の２つであった。まず第一に,見えない,または,見えづらいユーザーに対して「操作の容易な設計」にすることが必要不可欠であるが,台詞と音声ガイドの混同の問題は映画館での映画鑑賞時だけでなくDVD視聴時にも生じることや,「ガイドの声の高低を好みに合わせて調整できたらいい(コメント一覧)」という意見も得られ,放送やDVD・Blu-rayや配信等の２次利用への効果として,新技術のさらなる可能性を示唆する結果も得ることができた。

１－３. コメント一覧(抜粋) ※記入者注となっているのは,本人ではなく支援者の記入によるコメント。

【聴覚障害者】

Q. 映画館において,メガネ型で字幕を見たいと思いますか ― 理由を教えてください

A.「毎回使いたい」

- 内容がわかるのでよい。(全ろう,女性,71歳,東京)

A.「一度使ってみたい」

- 一度,技術を試してみたい。(全ろう,男性,63歳,埼玉)
- 映画の内容がメガネでわかるのならみてみたい。(全ろう,男性,70歳,東京)
- 画面が明るいし,きれいな映像を見てみたい。(全ろう,女性,47歳,大阪)
- 初めて。⇒あればいってみたい。(全ろう,男性,58歳,大阪)
- 聴者で字幕を必要としない人もいる。全画面を楽しみたい人がいる。(全ろう,男性,65歳,大阪)
- 文字見たい。記入者注:字幕がどうでるのかみてみたい！(全ろう,女性,60歳,青森)
- 記入者注:日本の活劇など,動きのある映画はメガネなしで観たい。(全ろう,男性,60歳,青森)
- 記入者注:ためしてみたい。(全ろう,女性,64歳,青森)
- 興味がある。(全ろう,男性,68歳,青森)
- 楽しい。記入者注:どんな感じかわからないので,試してみたい。(全ろう,女性,73歳,青森)
- はっきり見えると思うから。目に近くて!(全ろう,女性,67歳,青森)
- 以前体験した際,けっこう疲れたので毎回はしんどいかなと思います。あとはまだ周囲の目が気になることもあります(浸透していないと,誤解されそう)。気分でチョイスできるようになったら,それが一番だなと思います。まだ他の健聴者の目(あれは何？　マナー的にどうなの？　等誤解を与えそう)が気になるところではあるので,毎回使う勇気は出ませんが,あればぜひ使いたいです。(難聴,女性,22歳,東京)
- 今までメガネ型端末ははじめ(て)です。メガネ型字幕が良い。(難聴,男性,71歳,東京)

A.「抵抗がある」

- 気分が悪くなります。(メガネをかけると)(全ろう,女性,49歳,大阪)
- ややこしい。女優の顔もみたい。(全ろう,女性,50歳,大阪)
- 抵抗がある⇒メガネをかけるとフレームがジャマで視野が狭くなる。その範囲で字幕が付くと,映像がみえにくくなるのではないかと思う。(全ろう,女性,54歳,大阪)
- 3Dの上映の時は楽しめた。字幕が(手話読み取り)浮き出すように出てくるのでみやすかった。気に入ったため,上映があった時に自分用にしたいと購入した。(全ろう,男性,58歳,大阪)
- 記入者注:目が疲れそう,使ったことがないのでわからない。(全ろう,女性,54歳,青森)
- じゃま。(全ろう,女性,64歳,青森)

A.「興味がない」

- わかりにくい。補足:疲れやすい。3Dでも疲れるので字幕をみてまでメガネをかけたくない。(全ろう,女性,41歳,大阪)
- 映画へ行く気がない。(全ろう,女性,55歳,大阪)
- もともと映画に興味がないため,みたいとも思わない。(全ろう,男性,56歳,大阪)
- 必要がない。(全ろう,男性,62歳,青森)

A.「その他」

- 「もう少し実用的になれば,毎回使いたい」思っていたより重たい。3Dのような感じで文字がうかんでる感じがしてしまう。⇒ぼやけてしまう。スクリーンの手前にもう１枚スクリーン(フィルム)があるような感じで不思議だった。メガネが重いので,どんどん下がってきてしまう。(難聴,女性,34歳,東京)

Q. メガネを通して見る字幕について,普段ご覧になられているテレビや映画の字幕と比べて工夫が必要だと思われる点をあげてください(複数回答可)

A.「字幕の内容」文字が大きくなった方がよい。(全ろう,男性,63歳,埼玉)

A.「字幕の色」白色。(全ろう,女性,64歳,埼玉)

A.「字幕の色」人によって変えた方がよい。(全ろう,男性,70歳,東京)

A.「字幕の表示位置」スクリーンのどの位置にメガネの字幕を合わせたものか･･･なかなかコツをつかむのが難しいです。(難聴,女性,22歳,東京)

A.「視聴環境,字幕の色,字幕の表示位置,字幕の文字数,メガネの重さ」映画なら良いが例えば自宅画面の下に何かものがあるとかぶる。白の太字だったので目が少し疲れる。(白い面積が大きくて･･･)メガネのかけ方で画面の下にズラせるが,逆に画面にかぶったりすることもあり,難しいかと思った。今回見たサイズの文字だとちょっと圧迫感あり。もう少しスリムな文字なら良いと思う。メガネの重さ。(難聴,女性,34歳,東京)

Q. メガネを通して見る字幕について,その他,ご意見をご自由にご記入ください

- 劇場にメガネがある未来を楽しみにしています。(そしてメガネをかけて映画を楽しむ人がいる状況が当たり前になればなと思うので,普及のためにもメガネを使いたいと思います)(難聴,女性,22歳,東京)
- メガネの重さとメガネレンズのサイズ。(記入者注:イラストあり。鼻でレンズを支えるための鼻あてパッドを指し,)ここが調整できるとのことだったが,私には間があきすぎていて左右の焦点がちょっと合わない。そのため文字が浮いて見えたのかもしれない。(記入者注:鼻あてパッドが)上下できるだけでなく,(ブリッジの部分が)広くできたり,狭くできる(のがよい)。メガネでなくて音声ガイドの文字版について･･･ディズニーランドなどで使用しているが,文字だけ画面でない別の端末で見るのは映画に向いていないと思うので,メガネの開発が進むといいなと思います。(難聴,女性,34歳,東京)

【視覚障害者】

Q. 映画鑑賞時に音声ガイドが付く場合,会場の人全員が音声ガイドを聞く形式と,イヤホンから音声ガイドのみを聞く形式のどちらがいいですか

A.「全員に聞こえる形式」

- イヤホンだと違和感があって,わずらわしい。(全盲,女性,53歳,青森)

- イヤホンが苦手なので。（全盲,女性,74歳,青森）
- 最初からバリアフリーの映画をつくる意図であるので,わかりやすかった。（出来上がった映画に音声ガイドをあとからつけるのと比較して）（全盲,男性,67歳,青森）
- なし。本編と音声ガイドが重ならなくて良かった。（弱視,男性,32歳,鹿児島）

A.「イヤホンで音声ガイドのみを聞く形式」

- 自分の手元でガイドの音量を調整できるから。一緒に映画を観に行く人が晴眼で,ガイドがいらないから。（全盲,女性,42歳,神奈川）
- 視覚障害者と見える人と一緒に観るなら,見える人にわかることが説明されているから,煩わしくなる。（全盲,男性,65歳,東京）
- 選べた方がいいと思う。なれてなければ,聞きづらくなってしまうため。（全盲,女性,70歳,神奈川）
- 本編音が大きいところはガイドが聞きにくい。でもガイドが大きすぎても困る。ドラマに集中できない。説明量はちょうどよい。（全盲,女性,66歳,大阪）
- 気になるところは　みあたらないです。（全盲,男性,45歳,鹿児島）
- 以前,全員に聞こえる形式のガイドを体験しました。もちろん映画そのもののせりふと解説の区別はつきますが,音声解説の声まで大きくて雰囲気が壊れるような気がしました。解説はこっそりささやいてくれるような感じがよいと思っています。＊もしも,この表現が,解説を工夫して下さっている方々に失礼と感じられるとすれば,お詫びします。（全盲,女性,58歳,北海道）
- 音声ガイドが上映の邪魔になると思っているから。聞く人だけ聞ければ良い。（全盲,女性,29歳,青森）
- 会場に音声ガイドが流れるより,イヤホンで聞く方が安心して見られる。（全盲,女性,46歳,青森）
- 普通の見える人には全員に聞こえる形式は邪魔だと思うから。（全盲,女性,57歳,青森）
- 一般の方が音声ガイドを聴きながらだと大変だと思う。（全盲,男性,79歳,青森）
- 見える人のことを考えて,イヤホンの方がいいと思う。（全盲,女性,79歳,青森）
- 映画の種類にもよる。ドキュメンタリーは全員で聞いても違和感がない。他は観てわかると,ガイド付きは,煩わしいのではないかと思う。目が見える頃は副音声が大嫌いだった。（弱視,男性,52歳,埼玉）
- イヤホンは集中できる。オープンだとガイドの音が大きすぎたりすることがあり,自分で調整したい。（弱視,女性,59歳,埼玉）
- ガイドがいらない人もいるので,必要な人だけ聞けばよいから。（弱視,男性,62歳,埼玉）
- 解説ガイドが聞こえづらかった。特に音楽が流れた時。（弱視,男性,51歳,大阪）
- 最初の部分で,セリフとガイドの声がかぶっていたのが残念。（弱視,女性,57歳,大阪）
- セリフと重なるところの状況説明をあとで入れてほしかった。（弱視,男性,58歳,大阪）
- 説明量はちょうどよい。本編音が大きいところはガイドが聞きにくい。でもガイドが大きすぎても困る（ドラマに集中できない）。（弱視,女性,64歳,大阪）
- 細かいところまで説明されていて,イメージしやすかったです。（弱視,女性,38歳,鹿児島）
- 特になし。タイミングもよく,聞きやすかった。動きもわかりやすく良かった。（弱視,男性,38歳,鹿児島）
- 特になし、わかりやすい。（弱視,女性,40歳,鹿児島）
- 視覚と聴覚それぞれ必要になる部分が違うので。（弱視,男性,80歳,鹿児島）
- 必要な人が必要な時だけ利用すればよいと思います。必要な人とは,全盲・ロービジョン・難聴・耳が遠くなった高齢者・映画で話されている内容がわからない外国籍の人などです。（その他,男性,46歳,北海道）
- 音声案内は周りの音とかぶらないで聞いた方が聞きやすくわかりやすいと思います。またセリフを聞くのと案内を聞くのとでは聞き方が変わるためどちらにも集中できると思います。また『永遠のゼロ』のように騒がしい場合は特に音声案内が打ち消されてしまうのでイヤホンで聞いた方がわかると思います。（その他,男性,54歳,北海道）

A.「あまり音声ガイドは使わない」

- 音声ガイドが無くても大丈夫。（全盲,女性,58歳,青森）

A.「その他」

- 「作品によってオープンかイヤホンか分かれる」配役が誰が話しているか識別しにくい場合があった。（全盲,男性,53歳,大阪）
- 正直,よくわかりません。比較できるほど両形式で映画を観ていません。そこまで上映もされていません。一個人の独断と偏見でいうなら,観れるならどちらでもいいです。映画上映という形式をユニバーサルにというなら,全員に聞こえる方なのだと思います。普通に椅子に座るだけでいいですし,イヤホンを耳に入れずとも音声ガイドが聞こえます。誰にでも聞こえるということは,映画館や観客への啓蒙的意味合いも強いと思います。しかし,この形式で常に上映は難しい気がします。上映期間内,1～2回が限度のように思います。全ての映画が全員に聞こえる音声ガイド付になって,映画館で上映されている映画全てに音声ガイド,字幕が付いている。少し違和感がありますね。無音も,静粛さも,大事な一場面。そこで何かに気づく,思いをはせるのも人それぞれ。そこに音声ガイドや字幕が入るというのは,見える,聞こえる人にとってはどうなのでしょうね？受け止め方が変わってしまう人もいるのではないかと・・・「いつでもだれでも映画を楽しめる」のうち,「誰でも」には近づいているのかもしれませんが,「いつでも」は遠ざかる気がします。結局「特別な映画」という存在になりはしないかと不安です。インパクトもあり,啓蒙活動として宣伝効果もあるでしょうから,企業のCSRとしては取り組みやすい（お金を出しやすい）形だとは思います。一方の「イヤホンで聞く」形は,従来からあるもので,どうしても「付け足した」感が払しょくしきれない印象があります。また,片耳を２時間塞ぐのも,やむなしとわかっていても嫌な人もいる気がします。わずらわしさも,映画とガイドの音声バランスも,耳への違和感も。それぞれが,それぞれのスタイルで,同じ映画を楽しむ。映画鑑賞をユニバーサルにという形なら,このイヤホン形式なのだと思います。ほかの観客の鑑賞に影響を与えません。でも,同じ映画を,ともに共感し合える。この方式なら,「いつでも」に近づくと思います。そんなことを考えていると,どちらがいいのか,ますますわからなくなります。（全盲,男性,42歳,北海道）

Q. スマホや自分の端末から音声ガイドが聞ける端末があれば使ってみたい

A.「毎回使いたい」

- どこでも使えるから。あるならいつでも使いたい。（全盲,女性,42歳,神奈川）
- より良い情報を知りたい。（全盲,男性,70歳,神奈川）
- ガイドがないと見えないから。映画がみたい。使いたい。（弱視,女性,59歳,埼玉）
- 楽で便利。（全盲,男性,42歳,北海道）
- 私自身は機械に弱いので怪しいところはありますが,上映会に特定日の指定が必要なくなること,選択肢が増える可能性があることがうれしいです。（全盲,女性,58歳,北海道）
- 音声解説のデータが手元にあれば,映画館ではなくDVDなどでも利用可能だと聞いたためです。一度にたくさんの利用者がいた場合,解説を聞くためのラジオが当たらない可能性があるためです。（その他,男性,46歳,北海道）

A.「一度使ってみたい」

- 音声ガイド,字幕読みの人の説明が上映と同時に聞こえてくるのが魅力。何度かバリアフリーの映画をみて,字幕を観ながら読むスタイルは,どうしてもズレがあり,ズレがどんどん大きくなり,わからなくなることがあったので。（弱視,男性,52歳,埼玉）
- ちょっと興味があるから。（弱視,男性,62歳,埼玉）

A.「興味がない」

- ノートパソコンでネットを使って調べるので,特に（必要に）迫られない。ネット検索,ノートパソコンで間に合っている。携帯電話ももっていない。（全盲,男性,65歳,東京）

A.「その他」

- すでにPCやスマホを持っていて音声ガイドで使用している（そ

の他,男性,54歳,北海道)

Q. iPod touch からの音声ガイドはいかがでしたか？

A.「使える」

- 音が安定している。操作もできそう。(全盲,女性,42歳,神奈川)
- 安定した音質が保障されているから。(全盲,男性,70歳,神奈川)
- ズレが非常に少ない。ほとんどリアルタイムで聞ける。ガイドの声もマイクを調節しないと,映画と重なるときは聞きづらくなる(いつも字幕は音声ガイドで,会場でライブされるときも同じ)。(記入者注:普段の活動で,音声ガイドと字幕を映画館でボランティアがライブで読んでいるため,聞きづらいところができてしまう旨)(弱視,男性,52歳,埼玉)
- ノイズが入らない。音がきれい。(弱視,女性,59歳,埼玉)
- 渡された機器を首から下げ,イヤホンを入れるだけだから簡単。同じiOSデバイスを持っていれば,個人所有のものでも聞けるから。(全盲,男性,42歳,北海道)
- 機械に弱い私としては希望的観測も含まれていますが,利用の可能性,選択肢の幅が広くなるという可能性。(全盲,女性,58歳,北海道)
- 自分の端末で気軽に使用できました。FMラジオで聞くよりも音もとてもよかったです。(その他,男性,54歳,北海道)

A.「まあまあ使える」

- 自然なかんじ(よい),耳障りでない,違和感ない。初めてなので“まあまあかな”(全盲,男性,65歳,東京)
- 難しい操作でなければできそう。(弱視,男性,62歳,埼玉)
- 使い方が分かれば十分利用が可能ですが,タッチ操作が苦手な人には事前に操作練習が必要だと思われます。(その他,男性,46歳,北海道)

Q. その他のご意見をご自由にご記入ください

- どの回でも,観に行ったら,ガイドがついているのが魅力的。今は限定されているので,行きたいときに行けるのがよい。(全盲,女性,42歳,神奈川)
- ラジオでも(ノイズを経験したことはない),iPadでも変化がない。聞くことに関しては同じ。(全盲,男性,65歳,東京)
- 理解してくれる劇場は少ないと思う。カメラ機能がないデバイスを使う方向がよいのではないか。(全盲,男性,70歳,神奈川)
- FMイヤホンは,片方でイヤホン,もう片方で映画をきく。そのためノイズが周りから入ることがある。両耳するとノイズがなくなるし,バランスよく聴けた。(弱視,男性,52歳,埼玉)
- iPad-ノイズが入らずガイドのみがきれいに聞けた。このシステムを普及させてほしい。使える場所が増えることを希望します。観たい映画全部にこのシステムがつけばよい！(弱視,女性,59歳,埼玉)
- 誰のセリフかよくわからない場面があった。(大勢人が出てきたときの男女の別など)(弱視,男性,62歳,埼玉)
- 映画のみならず,さまざまなガイドの可能性を秘めていて面白いと思います。iOSやスマホを使うと,突飛な技術や手段のように受け止められがちですが。ごく普通のものとして発展してほしいと思います。(全盲,男性,42歳,北海道)
- あらゆるコンテンツに音声解説を付加するのは難しいと思いますが,古い映画から最新の話題作まで利用ができるとうれしいです。また解説のレベル(どこまで解説するか)も選べると,コンテンツに合わせて使い分けができてよいと思われます。また,音声解説を行ってくださる方々も男性・女性・若い人・経験豊かな年齢の人など,コンテンツに合わせて変えていければ,もっとよいと思われます。(その他,男性,46歳,北海道)
- とてもよく出来た商品でした。今後の作品に期待しています。(その他,男性,54歳,北海道)

２．両眼式HMDと単眼式HMDによる字幕提示の比較（調査2）

２－１．方法

【対象者】

聴覚障害者：
女性８名，平均49.5歳（±17.1歳），東京にて調査実施

【使用機材および視聴映画】

聴覚障害者を対象に，両眼式および単眼式のHMDを用いた字幕提示による映画鑑賞を実施した。調査対象者８名のうち５名はEPSON社製の両眼式HMD（MOVERIO BT-200：画角約23度，液晶パネル画素数960×540，ヘッドセット質量88g（ケーブル・シェード含まず））を，うち３名はオリンパス社製の単眼式HMD（MEG：画角11度，画素数432×240，焦点位置30cmから無限大，ヘッドセット質量30g以下）を使用し，135分間の劇映画（『舞妓はレディ』周防正行監督，東宝株式会社配給）を鑑賞した。

２－２．結果と考察

調査１での聴覚障害者を対象とした新技術に対する評価結果では，HMDの「重さ」や「眼精疲労への影響」に関する懸念が多く聞かれた。現在，開発改良の著しいHMDはその目的や用途に応じて，両眼式や単眼式など，軽量性や安定性や情報提示領域の広さなどの点でさまざまな種類が開発されている。ここでは，調査１の結果を踏まえ，両眼式と単眼式の特徴の異なる２種類のHMDを用いて，実際に，映画館で２時間程度の邦画を鑑賞することで，HMDを用いたより良い字幕提示について具体的な要望を聞き取ることとした。

図５は，HMDからの字幕提示による135分間の映画鑑賞後，両眼式HMDと単眼式HMDの使用感を比較した結果である。対象者数がやや少ないので予備調査の段階ではあるが，図５（a）より，両眼式HMDに対しては「使いづらい（40.0%）」の評価がある一定の割合で存在する一方で，単眼式HMDは「使える（66.7%）」または「まあまあ使える（33.3%）」の評価のみであった。また，図５（b）と（c）より，装着感や目の疲れに関しても両眼式HMDよりも単眼式HMDの方が良い傾向にあることがわかる。両眼式HMDに関しては，調査１と同様に，「眼鏡とダブル装用のため，重くなりずり落ちてくる」，「重くて目の間が痛くなりました」，「とにかく重たいです。夜の９時を過ぎても鼻の上に跡が

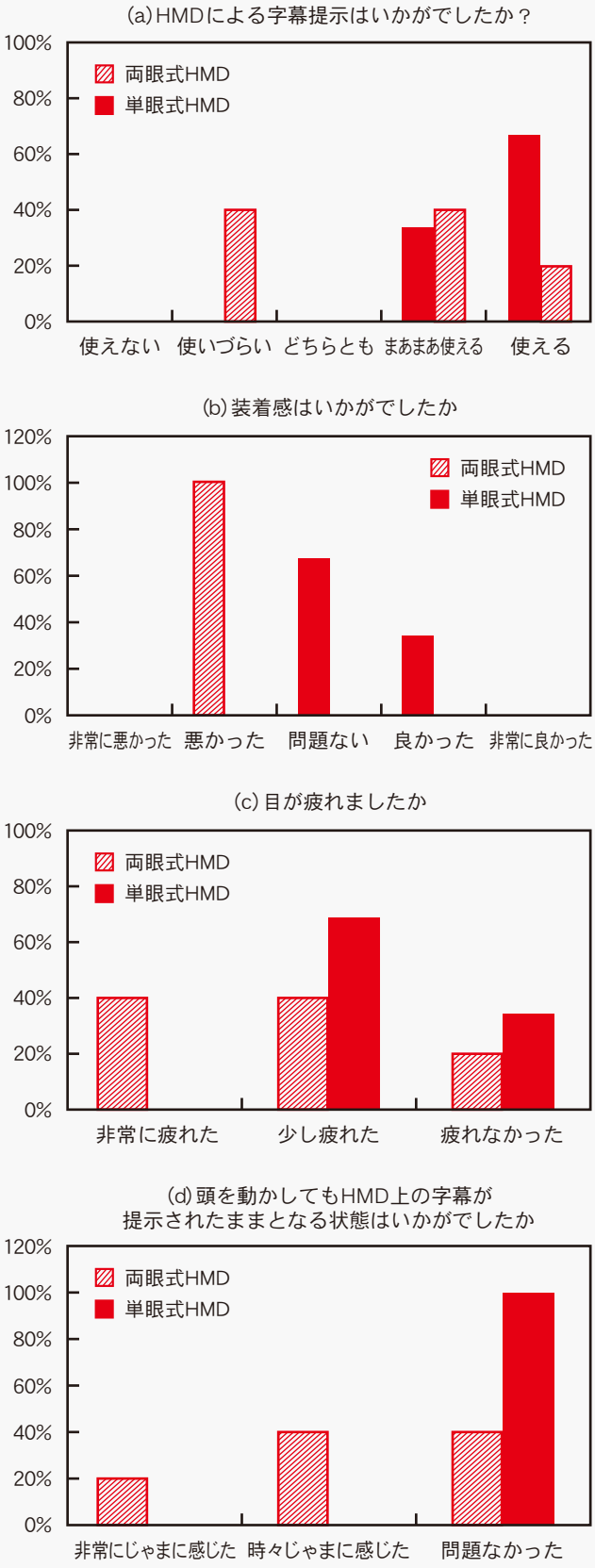


図5　両目式および単眼式HMDによる字幕提示の比較（聴覚障害者）

クッキリとついていました」，「重さと，水槽の向こう側から見ているような見辛さがありました。光がレンズの淵で乱反射しています」など，装着時の重さへの不快感に関するコメントが多い。他方，単眼式HMD

では,重さへのストレスは少ない一方で,「上映中体勢を変えると,HMDがずれてしまい,そのたびに字幕位置等調整が大変だった」,「字幕の位置調整のコツがなかなかつかめなかった。うまく調整できたと思って安心して椅子に深くもたれると,また位置が動いてしまったりして安定感がなかった」,「片目タイプは右端の字幕になってしまうので,もう少し中央に寄せられると良かった」,「枠がスクリーンに比べ圧倒的に小さいため,文字がつまっているように感じた。HMD画面いっぱいに表示しても良いかもしれない」など,軽量さゆえの「不安定さ」や「字幕提示位置の調整の難しさ」,また,「字幕提示領域の狭さ」などが指摘された。しかし,字幕提示領域の狭さに関しては,コメントでの指摘はあったものの,「Q. 字幕が提示される領域の広さはいかがでしたか(複数回答可)」の質問に対して,3名中2名が「ちょうどいい」と回答し,単眼式では字幕提示位置の調整が可能である分,提示領域の狭さに関してもそれほど問題にならなかった印象である。さらに,最後に,通常の映画スクリーン上の字幕と異なり,頭を動かした際に視線がスクリーンから外れてもHMD上の字幕が見える状態になることに対して生じる「不快感」を確認した(図5(d))。結果は,両眼式HMDでは「非常にじゃまに感じた(20.0%)」と「じゃまに感じた(40.0%)」の回答が6割を占めていたが,単眼式HMDでは全員が「問題ない」と回答した。単眼式HMDについて得られたコメントからは,「むしろよかった」,「頭を動かし,スクリーンから目を離したときも字幕が読めたので,話の流れから置いて行かれず,内容を把握できていたので,とてもうれしかったです。聞こえている人はずっと画面を見ていなくてもせりふを聞くことで流れが分かるが,焼き付け字幕の場合は,スクリーンから目を離したらまったく内容が分からないので,目を離すことができない。HMDであることで,目を離しても,せりふが分かったので,凝視も減り,気持ち的にとても楽でした」,「調整もすぐできたし,頭を動かしても,スクリーンから目を離しても字幕が見え,話の流れがつかめた」などの声も聞かれた。このことについては,単眼式のため字幕表示位置が狭いことによるものか,もしくは,字幕の自由な位置設定が可能であることによるものか検討の余地があるが,頭を動かすとくっついてくる字幕がむしろ効果的に作用するなど,新規な有用性を見出すこともできた。

以上の調査1と2で実施した新技術に対する評価結果を見渡すと,技術の着実な社会への導入を推進する上では,技術による満足度への作用を多角的に考慮する必要があるように見える。調査1で,視覚障害者において,新技術への期待感や使用感への好感度が非常に高かったことの理由の一つには,現状システムからの改良効果(ノイズ低減など)が明確であったことが考えられる。一方,聴覚障害者にとっては,HMDを使用することによるメリットの開拓はまだ始まったばかりである。新技術による字幕提示の可能性を最大限に引き出すためには,調査2の単眼式HMDに対する評価として聞かれた「頭の向きをスクリーン外に動かしても字幕が読めるので,むしろよい」などの新規な価値の発見や,新技術の災害情報システムへの応用など,生活に無理なく馴染み生活を豊かにする技術として総合的に価値を高めることで,ユーザー自らが技術の可能性を積極的に発見できるような工夫や方策を考えることも不可欠になると考えられる。

２－３. コメント一覧(抜粋)

Q. HMDによる字幕提示はいかがでしたか？

【聴覚障害者:両眼式HMD使用】

- 視野がさえぎられるため集中しやすいが,その反面周りの状況が見えないのでやや不安になる。眼鏡とダブル装用となると重くなり,字幕表示の範囲も限られているため,調整がしづらいので鼻や首が痛くなる。2時間の鑑賞はちょっと難しい。笑ったりして頭を動かすと見づらくなる(字幕は映画画面のそばに固定されているほうが見やすい)。涙が拭きづらい。HMDを一時的に外すことになるので見えなくなってしまう。
- 映画の内容と同じ字幕が出れば嬉しいです。
- 字幕があることがまず一番の前提なので,重さや見辛さは我慢出来ます。

【聴覚障害者:単眼式HMD使用】

- よそ見をしていたり,下を向いているときでも字幕がついてきてくれるのがスゴイ。／位置調整のコツをつかめばストレスなく使えそう。／字幕もとてもはっきりとしていて見やすかった。
- 調整もすぐできたし,頭を動かしても,スクリーンから目を離しても字幕が見え,話の流れがつかめた。
- 音声すかしの仕組みはすごく魅力的。あとはHMDの使用感･･･

Q. 目が疲れましたか？ ― 具体的な状況を教えてください

【聴覚障害者:両眼式HMD使用】

- 最後の30分くらいのときは映画画面と字幕画面との位置の差が際立ってきて,意識してピントをどちらかに合わせる形となった(少し乱視が入っているからかもしれません)。
- 重いから。
- 重さと,水槽の向こう側から見ているような見辛さがありました。光がレンズの淵で乱反射しています。

【聴覚障害者:単眼式HMD使用】

- 上映中体勢を変えると,HMDがずれてしまい,そのたびに字幕位置等調整が大変だったため。
- 遠近の調節が少し大変。

Q. 装着感はいかがでしたか ― 理由を教えてください

【聴覚障害者:両眼式HMD使用】

- 眼鏡とダブル装用のため,重くなりずり落ちてくる。
- 重くて目の間が痛くなりました。グラグラして字幕を画の中心下に合わせるのが大変でした。

- 字幕はもう少し大きくして欲しい。
- とにかく重たいです。夜の9時を過ぎても鼻の上に跡がクッキリとついていました。

【聴覚障害者：単眼式HMD使用】

- 片目タイプは想像よりも軽かったし，違和感がない。ただ長時間つけていると重みを感じてきたり疲れを感じることがある。
- ただ，後ろに寄りかかれないのと，髪型を選ぶところが気になった。

Q. メガネをかけてからの操作について教えてください ―「やや難しかった」，「難しかった」と回答された方へ質問です。どのように難しかったですか

【聴覚障害者：単眼式HMD使用】

- 字幕の位置調整のコツがなかなかつかめなかった。うまく調整できたと思って安心して椅子に深くもたれると，また位置が動いてしまったりして安定感がなかったため。

Q. その他，HMDでの鑑賞について，ご自由にご意見をいただけましたら幸いです

【聴覚障害者：両眼式HMD使用】

- 自分でHMDの字幕表示位置を調整したかった。常に画面と重なっているため，文字色と背景や服の色がかぶったりすると見えづらくなり，自然と画面の外に持っていく形となってしまう。TVでの字幕も画面の中に文字を入れて（文字の背景をグレーにしたりして）表示させるタイプと，画面全体をやや小さくして黒枠に字幕を表示させるタイプとがあり，私はいつも後者で見ていますが，画面と重ねても大丈夫（その方が良い）という意見の方もいらっしゃるので，自分で（縦にするか横にするかも含めて）調整できるのが一番良いのではないかと。
- コードの重さで左側に重心が寄るので，自分でコードを首の後ろに掛けて右側に回してバランスをとっていました。

【聴覚障害者：単眼式HMD使用】

- とても良いシステムで，今後普及してほしいと痛切に思いました。／HMDについては位置調整のコツを教えてほしいです。／背もたれにもたれたり，体勢を変えても安定すると良いです。／字幕のフォントを選べると良いです。／補聴器をしていると，補聴器にかぶさってしまうのでうまくフィッティングできる工夫があるとよいです。／HMDに補聴システムが追加されても良いと思います。／ヘアスタイルがくずれないようにと，後頭部で固定するデザインはとても良いと思いました。／片目タイプだと，鼻の上にメガネの跡が残らないので，メイクをしている女性にとってはとてもうれしいデザインです。／ヘッドホンのように，スマホの付属品として，いずれは気軽に誰でも購入できて字幕表示できるようになるといいなと思います。
- 頭を動かし，スクリーンから目を離したときも字幕が読めたので，話の流れから置いて行かれず，内容を把握できていたので，とてもうれしかったです。聞こえている人はずっと画面を見ていなくてもせりふを聞くことで流れが分かるが，焼き付け字幕の場合は，スクリーンから目を離したらまったく内容が分からないので，目を離すことができない。HMDであることで，目を離しても，せりふが分かったので，凝視も減り，気持ち的にとても楽でした。

Q. メガネを通してみる字幕について，普段ご覧になられているテレビや映画の字幕と比べて工夫が必要だと思われる点をあげてください

【聴覚障害者：両眼式HMD使用】

- 「字幕の内容」映像の内容と遅れて出る。言葉数が少ない。全体的な会話が表わせていない。
- 「字幕の内容」全体的に少ない。
- 「字幕の色」黄色にして欲しい。
- 「字幕の色」黄色は少し慣れないと白色と区別がしにくかったです。
- 「文字数」会話と同時に字幕が欲しかった。
- 「その他」字体のフォントが太くて乱視には見辛かったです。もう少し線が細いものにするか，馴染みのある洋画の字幕と同じフォントにして頂けたら観やすいかと思いました。

【聴覚障害者：単眼式HMD使用】

- 「字幕の内容」環境音や音の説明も表示されるので，とてもよく考えられた字幕だと思いました。ミュージカルの音楽は，棒読み字幕になってしまうので，雰囲気だけでも伝えてくれると違うとおもう。音楽の雰囲気を表現する字幕の工夫があってもたのしい。（カラオケ風，音に合わせて字幕がはじけたり，キラキラしたり，色が変化したり，踊ったり。等）
- 「視聴環境」最新の映画館は音響システムがとても良くなっているため，振動を感じやすい。それにあわせて字幕を見られると臨場感も一層増すと思う。
- 「字幕の色」色覚障害に配慮した色使いであれば問題ないと思う。登場人物によって色を変えると分かりやすい。
- 「表示位置」片目タイプは右端の字幕になってしまうので，もう少し中央に寄せられると良かった。
- 「表示位置」HMDだとあまりここは気にならない。
- 「文字数」普段見ているとテレビとさほど変わらず，ちょうどよかったと思う。
- 「その他」枠がスクリーンに比べ圧倒的に小さいため，文字がつまっているように感じた。HMD画面いっぱいに表示しても良いかもしれない。

Q. 映像の内容はどの程度理解できたと感じましたか ―「あまり理解できなかった」，「理解できなかった」とお答えの方，どのような理由だと感じましたか

【聴覚障害者：両眼式HMD使用】

- 今回は方言が多かったですが，翻訳を入れなかったのは良かったのではないかと思います（たまに親切で（？）翻訳が入ったりしますが，それだと台詞をそのまま伝えるという「情報保障」から逸れると思います）。「なまりが強すぎて理解できない」ところにおかしみがあるのだと思いますので，こういったことも含めて特に「言葉」そのものについて，「わからなさ・理解できなさ」を受け入れられるかどうかが見る側の課題となるかな，と思いました。
- 映像の会話が分からないため，大切なあらすじが理解できなかった。
- 字幕の文字を大きくしてほしい。

Q. その他，字幕の内容について気付いた点等，ご自由にご意見をいただけましたら幸いです

【聴覚障害者：両眼式HMD使用】

- 音楽や歌が多い映画だったので，斜体にするとか，（今後技術的に可能になれば）カラオケのように歌っている箇所に合わせて色が変わっていくような形とか，視覚的にも音楽を楽しめる工夫があると良いと思いました。そういう意味では，監督に直接ご覧いただくのが一番かと思いますので，今後もできる限りモニター意見交換会にお呼びするなり，字幕付映像をチェックも兼ねてご覧いただくなり，していただけると嬉しいです。
- 今のテレビの字幕と同様になれば，近くの映画館に行けるようになると思います。今後に期待したいです。
- もう少し技術が上がり，便利に使えるようになればいいと思います。
- 字幕があることは大変ありがたいです。そのため，また何かお役に立てることがありましたら，是非お声掛けをよろしくお願い致します。

【聴覚障害者：単眼式HMD使用】

- 音楽，歌のシーンのリズミカルな感じを表現してもらうような字幕があったら，もっと楽しいと思った。（現在の，テレビ，映画の字幕でも同様ですが。）特にミュージカルの場合，せりふと歌の切り替えがはっきりせず，歌っているのか，しゃべっているのかの判断が難しいので。／時折ある，画面外の人のセリフのとき，誰がしゃべっているのかをもっと分かりやすく表示してもらえるといいな，と思いました。／擬音，などの表示方法に工夫があるといいなと思いました。

3 章

障害者に対する
適切な視聴環境の在り方に
関する検討

第１回
映画上映に関するバリアフリー対応に向けた障害者の視聴環境の在り方に関する有識者会議

議事録

日時　平成27年１月23日（金）午後２時45分～午後４時30分
場所　一般社団法人 日本映画製作者連盟 会議室

議事次第

１．開　　会

２．委員紹介

３．討　　議

（議事項目）

（１）映画館上映におけるバリアフリー対応の現状と視聴覚障害者の視聴状況について

（２）東京国際映画祭における新システムによるバリアフリー上映会の結果と問題点の整理

（３）視聴覚障害者の視聴環境向上のために映画業界が果たすべき役割についての検討

（４）その他

４．閉　　会

＜出席者＞

華頂 尚隆　（一般社団法人 日本映画製作者連盟 事務局長）
山上 徹二郎（MASC理事長／協同組合 日本映画製作者協会 理事）
八十河 恒治（一般社団法人 日本映像ソフト協会 業務部長）
松本 悟　（一般社団法人 日本動画協会 専務理事 事務局長）
会田 郁雄　（全国興行生活衛生同業組合連合会 顧問）下村氏代理
小川 光彦　（一般社団法人 全日本難聴者・中途失聴者団体連合会）
橋口 勇男　（社会福祉法人 日本ライトハウス 専務理事）
林田 茂　（社会福祉法人 日本ライトハウス 総務）
天野 繁隆　（社会福祉法人 日本点字図書館 館長）
古迫 智典　（株式会社 キュー・テック 取締役）
田中 正博　（全国手をつなぐ育成会連合会 常務理事）
大河内 直之（東京大学先端科学技術研究センター 特任研究員）
川野 浩二　（MASC 事務局長）
欠　席　者　松下 和敏（MASC監事）
下村 忠男（全国興行生活衛生同業組合連合会 事務局長）

＜オブザーバー＞

川又 竹男　（厚生労働省 社会・援護局 障害保健福祉部企画課長）
福田 夏樹　（厚生労働省 社会・援護局 障害保健福祉部企画課 自立支援振興室 企画法令係長）
稲川 武宣　（厚生労働省 健康局 生活衛生課 課長）欠席
山崎 雅志　（厚生労働省 健康局 生活衛生課 課長補佐）
平木 孝佳　（厚生労働省 健康局 生活衛生課 係長）
石垣 鉄也　（文化庁 文化部芸術文化課 支援推進室長）
佐伯 知紀　（文化庁 文化部芸術文化課 主任芸術文化調査官）
中臺 正明　（文化庁 文化部芸術文化課 メディア芸術振興係主任）
塩見 絢子　（文化庁 文化部芸術文化課 企画調査係長）
柏原 恭子　（経済産業省 商務情報政策局 文化情報関連産業課 課長）
望月 孝洋　（経済産業省 商務情報政策局 文化情報関連産業課 課長補佐）
高田 靖子　（経済産業省 商務情報政策局 文化情報関連産業課 係長）

※この会議はパソコンでの文字通訳による情報保障を行いました。

1. 開会

山上 徹二郎（MASC理事長／協同組合 日本映画製作者協会 理事）

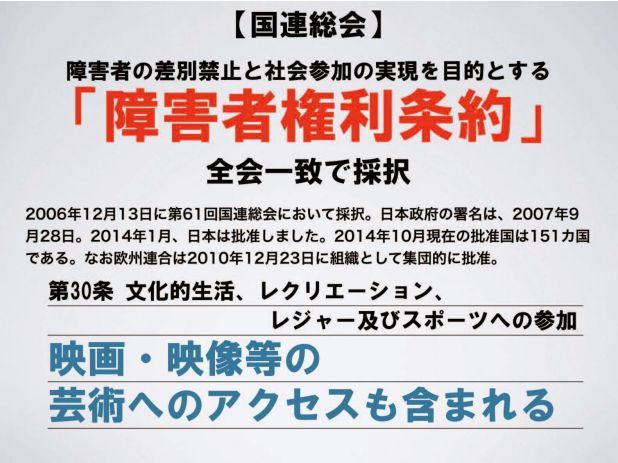
私どもMASCでは、経済産業省からの委託事業としまして、平成26年度コンテンツ産業強化対策支援事業から、「映画上映におけるバリアフリー対応に向けた障害者の視聴環境の在り方に対する調査事業」を受注しています。この調査事業の一環としまして、有識者会議を今年度中に２回開催することとなりまして、その第１回として皆さまに本日お集まりいただきました。

映画のバリアフリー化につきましては、これまで民間団体が中心になりボランティアベースで字幕・音声ガイドの付与を進めてきましたが、2013年６月、障害者差別解消法が国会で成立しまして、いよいよ2016年４月１日から施行されることになっており、またこうした日本の国内法の整備を待って、昨年、2014年１月には障害者権利条約が批准されました。以上のような経緯から、映画業界団体でも、バリアフリー化に向けて動いていこうという機運がここ数年ありました。

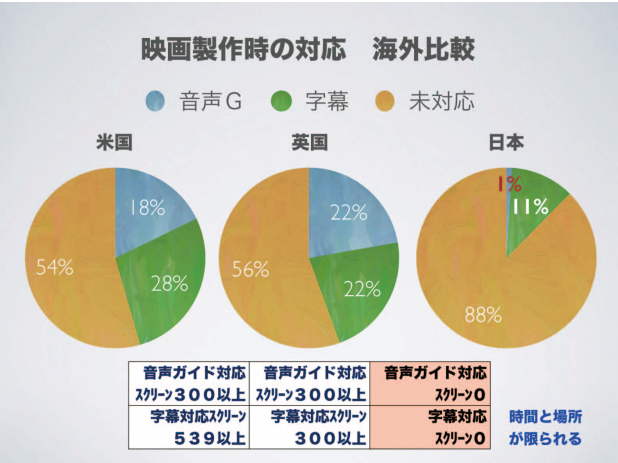
いくつかの障害があるなかで、バリアフリー化にむけた費用をどうするかも含め、業界では議論が進んできました。

2013年４月には、障害者の芸術文化振興議員連盟が立ち上がり、衛藤晟一委員長、山本博司事務局長のもとで、議連からも大きな呼びかけがありました。そのような動きのなかで経済産業省、厚生労働省、文部科学省も議連に参加いただき、ご支援をいただく、あるいは応援していただけるという話のなかで、今回の調査事業も実現しました。

2016年４月１日の障害者差別解消法の施行に向け、字幕・音声ガイドの付与については一定程度確保されてきていますが、実際に映画館でのバリアフリー化の推進、障害のある皆さんに映画を提供する映画館側の設備を含めた上映の保障がまだできていま



資料２-２



資料２-５

せんでしたので、その辺のことを実証実験を通して2016年４月に向け、取り組んでいきたいとの思いから調査事業を受託させていただいています。

映画業界や障害者団体の皆さんに、有識者としてお集まりいただいていますので、忌憚のないご意見をいただき、有意義な会議にしていきたいと思います。

また、この場をお借りして、この調査事業を推進していただいております経済産業省に、お礼を申し上げたいと思います。そして、文部科学省と厚生労働省の皆さんにも同席いただいていますので、今後とも足並みを揃えてよろしくお願いします。

2. 委員紹介 出席者肩書き明記済みのため、省略

3. 討議

（１）映画館上映におけるバリアフリー対応の現状と視聴覚障害者の視聴状況について 川野 浩二（MASC 事務局長）

・（資料２-２、３、４）各国の条約について

MASCが活動を始めた背景には国際条約である「障害者権利条約」があります。映画・映像業界も将来、必ず対応しなければいけない背景がありました。第30条に文化的生活、レクリエーション、レジャーおよびスポーツへの参加があり、映画・映像等の芸術へのアクセスも含まれるというものです。

・アメリカの現状：ADA法という、字幕が障害者のためという理解ではなく、レストランやバーなど人が集まる場所でもテレビの字幕がオンになり、字幕が有効利用されています。

・韓国の現状：すでに2008年に障害者権利条約を批准しており義務化されています。

海外の現状については調査中ですので、次回の有識者会議で発表いたします。

・（資料２－５）映画製作時の現状

音声ガイドと字幕対応映画館のスクリーン数比較です。日本の現状はスクリーン数「０」。理由は、現在、DCPでは字幕をオン・オフにできますが、字幕を必要な方のみに出すしくみや音声ガイドを館内に送り込むしくみがないためです。日本は非常に遅れているという現状があります。

・（資料２－６）アメリカの字幕対応システム

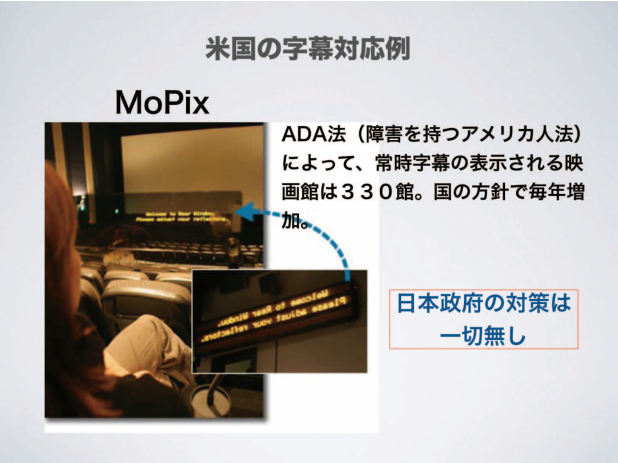
劇場の後ろに電光掲示板を置き、字幕が鏡文字でアクリル板に映るものです。このしくみはフィルムの時代から行われていました。今は専用メガネ型端末で見るしくみができています。日本では全く普及していません。

・（資料２－７）2012年の劇場公開作品字幕・音声ガイド付与数

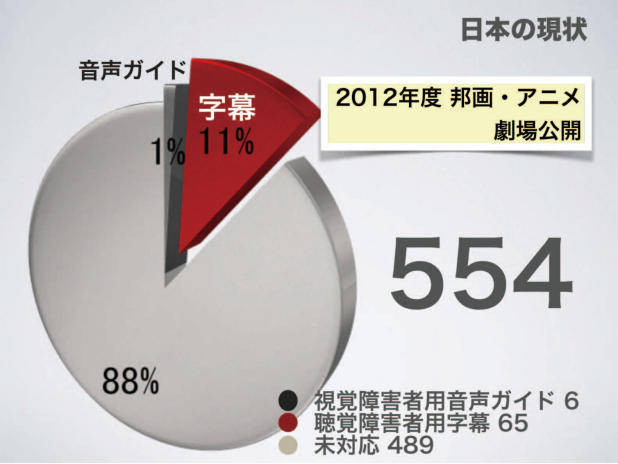
映連を中心にかなり広がってきていますが、全ての映画、アニメーションという大きな分母になると非常に少なく、字幕は11％になります。音声ガイドは公開時に対応されたのは６作品しかありませんでした。

・（資料２－８）2011年のDVD&Blu-rayの字幕・音声ガイド付与数

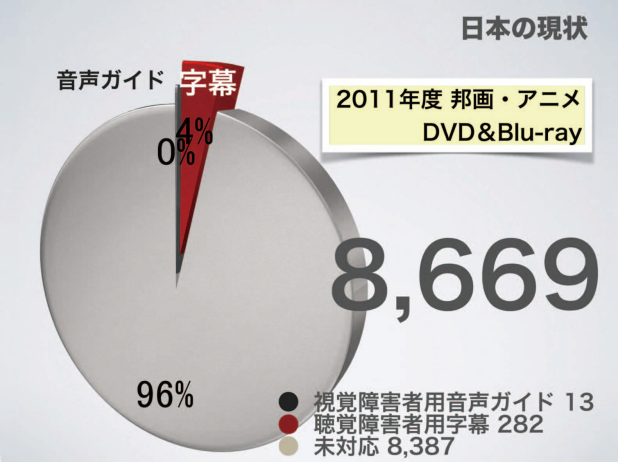
DVD、Blu-rayにおいて、8669本の中から、視覚障害者用音声



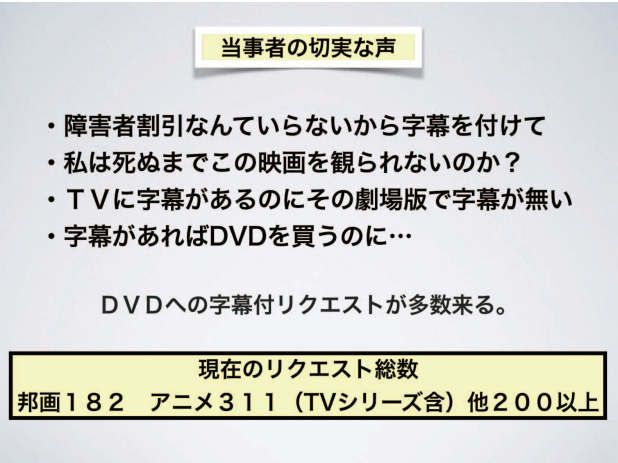
資料２-６



資料２-７



資料２-８



資料２-９

ガイド13本で全体の0.1％。聴覚障害者用字幕282本で全体の４％。パッケージにおいてのパーセンテージが下がってしまう理由は、DVDは雑誌の付録や趣味のDVDなどいろいろな分野に渡るためです。

・（資料２－９）当事者の意見

「障害者割引を日本ではやっているが、割引はいらないから字幕をつけてほしい」、「字幕があればDVDを買うのに･･･」など。

→これを受けてMASCの意見
そこにマーケットがあると思っています。「字幕のリクエスト」というのは、我々のやっている活動のなかで、DVDに字幕が入っていなくても、パソコンで再生することでサーバーが字幕を読み込んで再生するしくみがあります。現在260作品程度、字幕を配信しています。

・（資料２－10）日本の高齢者社会について

高齢化が比率としては今後非常に大きくなってくる。70歳を超えると２人に１人は難聴となるため、字幕は人ごとではありません。

・（資料２－11）放送業界の字幕･音声ガイド付与について

放送においては総務省が2017年までに字幕100％、音声解説10％を努力目標としています。

・（資料２－12）放送の字幕製作費について

放送字幕の制作費が非常に高い理由は、制作面で日本語独特のルビがあり特殊な技術を必要とする点や字幕制作ソフトが非常に高いためです。そのためコストがかけられないので字幕が付かないということもありました。

・（資料２－13）バリアフリー字幕、音声ガイドにおいてのデータ

例ですが、１作品100分あたりの金額は、字幕制作費自体は40万円前後ですが、DCPというデジタルパッケージに字幕を入れる際に、字幕の調整をするための費用が別途かかるため、100万円前後になってしまう。
音声ガイドは制作費もかかってしまいますが、音声ガイドを作り全国の劇場で送出する場合は、音声ガイド送出のためにオペレーターが行かなければならず、交通費人件費等が加算されてしまいます。制作環境の見直しとインフラをきちんとしなければというのが、我々が取り組んできた課題です。

・（資料２－14）「おこ助」について

「おこ助」は映像字幕･音声ガイド制作ソフトウェアで9500円。DVDに字幕をつけるものは無料で配布しています。DVDをパソコンに入れて、字幕とタイミングを打ち込んで作るソフトを我々が開発しました。ボランティアの方々も参加出来る、制作環境を改善したソフトです。

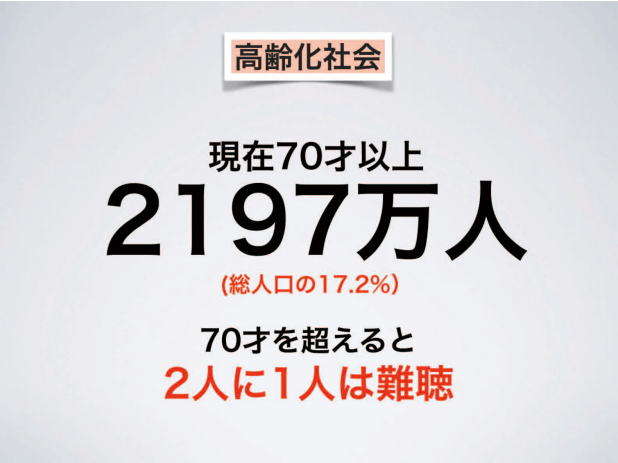
・（資料２－15、16）情報保障のインフラ整備について

劇場公開された作品がテレビ放送、DVD、Blu-ray、BS･CS放送、ネット配信と、一つの作品が多数のメディアに展開されることがあります。展開される際に、それぞれの会社の責任で「字幕を付ける･制作する」というのは非常に無駄なコスト負担になります。

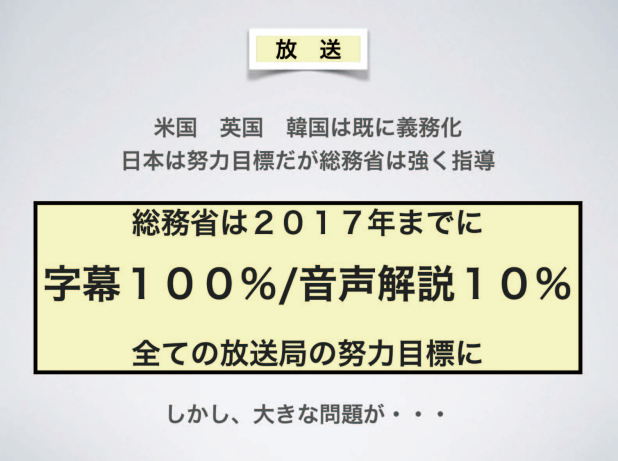
（資料２－15）の図のように、一つの映画をつくった際には、字幕･音声ガイドを制作し、それがすべてのメディアで使えるしくみをつくらないと、この問題解決には向かわないと、提案しています。

・（資料２－17、18）メガネ型端末の紹介

東京国際映画祭で実際に使ったメガネの１つです。小さな端末を目の前につけることで、スクリーンに字幕は表示されず、メ



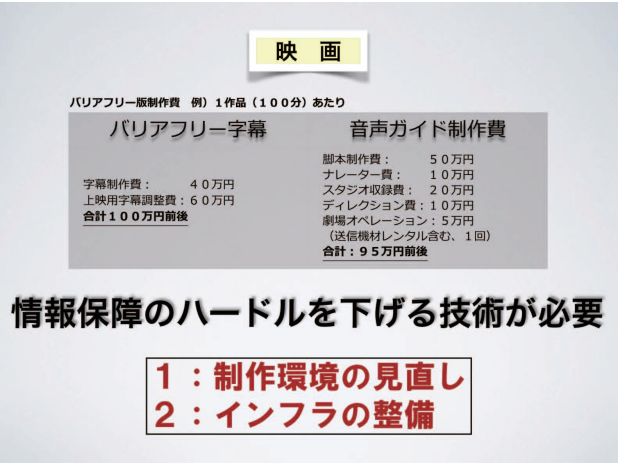
資料２-10



資料２-11

	字幕番組制作費/時間	生放送番組制作費/時間
日本	175,000円―366,000円	171,250円―273,750円
米国	15,800円―63,200円	5,925円―17,775円
英国	32,507円	40,186円

資料２-12



資料２-13

ガネに字幕が表示され、張り付いてみえるものです。手話を出すことも可能になります。

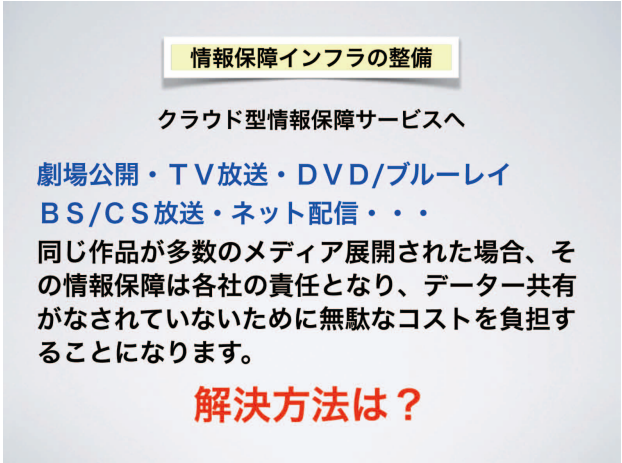
・（資料２－19）スマートフォンを使用した　システムの紹介

視覚障害者の方は、スマートフォンを劇場に持ち込み、マイクで音声透かしが入った音を拾うことで、音声ガイドを端末から聞くことができます。

・（資料２－20）未来予想図

端末を使うと、映画館以外にも、博物館の取り組み、イベントでの情報保障など、様々な場所で使えるしくみになると思います。

資料２-14



資料２-15

資料２-16

資料２-17

資料２-18

資料２-19

資料２-20

ここまでの説明を踏まえての当事者・当事者団体からの意見

● 小川 光彦（一般社団法人 全日本難聴者・中途失聴者団体連合会）

難聴者も、もちろん映画は大好きです。ただし、これまで観られたのは、主に洋画が中心でした。実際に映画館に行って観るとき、字幕が付いているのは洋画に限定されていたからです。私たちだって日本人ですから、皆さんと同じように日本の映画を観たいという気持ちはもちろんありましたが、残念ながら字幕がないから観られなかったという環境がずっと続いていました。

同じようにDVDについても、字幕がまだ十分に用意されておりません。DVDをレンタルしてきて、映画やテレビ番組を観たいと思っても、そこに字幕が付いていないと残念ながら内容がわからない。うっかり借りて、「字幕がなかった。しまった」と悔しがる仲間もたくさんいます。このような映像文化にもぜひ字幕付与をお願いします。

映画ももちろん日本文化です。日本の文化にアクセスしたい気持ちがあっても、実現できなかった。私たちの権利が奪われていたという状況、それを改善したいという気持ちが、ずっとあったんです。また映画館に行って、自分の大事な仲間や家族と一緒に内容を楽しみたいと思っても、それができない状況がありました。

こういう状況が少しずつ変わってきたのは80年代くらいだったのですが。

最初は映画『名もなく貧しく美しく』。ろう者が出てくるので、ろう者の手話表現があるのですが、これが一般の方にはわからないというので、そこだけ字幕が付いていたんですね。手話、字幕があるところだけは私たち、聞こえない者にはわかりました。聞こえない人に字幕が必要だという理解が浸透するにつれて、80年代後半から90年代前半にかけて、次第に日本映画にも字幕の付くものが少しずつ出てきました。

最初は東映さんが、がんばっていたんですね。次に、大ブームになった『もののけ姫』、宮崎駿監督の映画。あれは聞こえない子ども、聞こえないご両親も一緒に観たいという気持ちが強かったのに、残念ながら字幕はなかった。観られなくて悔しい気持ちが続いていたんです。そこで聞こえない仲間、ご両親も立ち上がり、「みんなのために字幕が見られるようにしたい」と東宝さんに要望しました。

東宝さんにもご理解いただき、『もののけ姫』に字幕を付けようということになりました。そこから日本の映画にも字幕が付く機会が、東宝さんのご理解も得て、さらに増えていった状況がありました。

先ほどもありましたが、映画のフィルムに字幕が付くには費用が必要です。フィルム１本につき、100万円単位の費用が必要だと聞いています。そのために映画のフィルムも字幕付きの本数が限られています。

限られた本数のフィルムを全国各地で持ち回り上映をしていました。全国各地で、多くないときは５～６カ所、多いときは現在、80カ所やっていますが、いずれも上映は２～３日とか、長くても１週間という制約があり、まだ、聞こえない方々がいつでも・どこでも行って観られる環境にはなっていません。

障害者権利条約も、国内でも発効しました。

今後、こういった映画など、DVDにも、聞こえない人がいつでも・どこでも字幕を見て楽しめる環境が法的にも必要になってきます。

そのタイミングで、音声透かしという技術を使って、映画の上流に、字幕を付けられる環境をつくっておけば、下流のDVDなど他のメディアでも使える環境ができたところで、非常に大きな期待を持っています。

経済産業省さんにも、映画の字幕、DVDの字幕の要望を全難聴から何度か出しています。その結果かどうか、一部の映画には、字幕を付けるための助成金が出るようになっています。助成金を広げてほしいのもありますが、フィルムに字幕を付けることは、やはり費用が発生する問題があります。そこで音声透かしが効果的なのではないかと期待を持っています。

● 林田 茂（社会福祉法人 日本ライトハウス 総務）

日本ライトハウスはこれまで、2008年くらいから本格的に活動を始めました。映画の音声ガイドを制作することもあれば、2008年からはNHKのテレビ、福祉番組ですが、番組制作にも関わってきています。『バリバラ』という番組です。

「当事者の意見を制作の段階から入れていきたい」と私たちは言い続けていて、そういった意味では、当事者の立場の意見も含めて制作をしていくことを心掛けています。その辺りから、上映会や、外部の地域のバリアフリー上映会を企画したりして、少しずつ人も増えてきました。

映画を初めて観た方もいます。最初、洋画『最高の人生の見つけ方』の上映会をしたとき、私は利用者さんから言われたんです。「モーガン・フリーマンという人は、えらい日本語が上手やね」と。「いや、あれは吹き替えなんですよ」、「そうなのか」という会話があったりしました。でも、そういったなかでも増えてきました。

私たちのやる上映会、すごく人気があり、去年、山田洋次監督とも一緒にトークショーもしたりして、300人くらいいらっしゃった。ついこの間も、100人ちょっとの人が集まりました。そうやって、少しずつ広めています。

よく利用者さんから、映画館に行きにくいと聞きます。一番は広報です。

私たちが映画会を企画するときには、かなり前から広報します。私たちの出す広報資料は点訳や音訳なので、時間がかかります。また、その発送にも時間がかかります。２カ月、３カ月前から作り始めて、手元にいろんな形で届くように心がけています。

実際、映画館でやる場合、スケジュールがタイトな場合が多いです。なかなか上映時間が決まらないというのも、予定が立てにくいというのがあります。映画館で上映する場合は、１週間ぐらい前にしか、決まらないと思います。すると、予定は立てにくいです。

視覚障害者の方はヘルパーを手配するのも１、２週間かかったりします。コーディネーターに問い合わせたりして時間がかかりますので、「もう少し早くわかったら用意ができたのに・・・」ということもあります。バリアフリー上映会の企画は１日１回しかや

らないことがほとんどだと思うんです。観たい映画でも、かなり興味がないとその日に行けなかったりすることもあります。

映画は普通、気分によって観るものだと思うんです。「今日はこういう気分だから映画を観たい」。気分が向かないときに「観て元気になろう」というのもありますが。「今これは観たくない」というのもあったりしますし。複数回やってほしいという声があります。

また年間でみて、映画館で観られるのは1桁だと思うんですね。強く言われているのは、「いろいろなジャンルを観たい」と。「観る機会をもっと増やしてほしい」と。

そういう意味で、音声透かしのように、いつでも観られるようになればいいと思いますし、行ってからのことも考えてほしいし、行く前の段階の広報にも私たちの団体と一緒に連携を取り合いながら広報させていただきたい。点字資料、音声資料など、私たちが映画会をするときはそういうものをつくります。映画をより一層楽しんでいただこうと模型をつくったりもします。映像をつくるだけでなく、周りの環境も考えていただきたい。そういうのがあるから、利用者さんも点字図書館の企画は安心していけるというのがありますので、一層、連携をとっていきたいと思います。

音声解説とか日本語字幕が必要だと、もっといろいろな方に知ってもらうことが大事で、これからも必要だと思いました。

また、せっかくつくった音声ガイドや日本語字幕を二次利用として、Blu-rayとかDVDになっていくときに、そのときに利用者さんが言うのは、せっかく音声解説が付いたり、日本語字幕が付いているのに、操作するときに音声の読み上げがないものがあります。例えば、どうしたら音声解説付きの本編にいけるかは、音がないと進んでいけない。要は、誰かに操作してもらわないと観られないというのでは意味がない。今、付いているものもありますが、付いてないものもあるんです。操作上も、視覚障害者が使えるような環境のルールづけをしてほしいと思います。

● 天野 繁隆（社会福祉法人 日本点字図書館 館長）

林田さんとほとんど同じですが、今日は、総務省の方はいらっしゃらないのですが、視覚障害者にとって情報のトップはテレビです。テレビの副音声は、十数年前から、利用者からはドリフターズのテレビ番組の副音声がほしいとか、テレビ番組のスペシャルドラマの音声ガイドがほしいというのは、とても高いです。

我々は本来、点字図書館なので、墨字情報を点字という方法、音声という方法で提供することをしてきましたが、やはり映像情報も何らかの形で提供できるようにしなければいけないということです。2003年ぐらい、その時期に、例えばTSUTAYAさんとかが町の中にできてきました。我々の場合はDVDを購入する、TSUTAYAでレンタルすれば自宅で手軽に観ることができますが、障害者はその恩恵が受けられない。では、「なんとかDVD映画を家族で楽しめるような方法がないか」と考えて、DVD映画、レンタル、あるいは市販のものでも、購入して手元にあるのであれば、パソコンで再生しながら、同時に私どもが制作したガイド音声と同期をさせて観られるようなソフトをつくりました。日本ライトハウスさんと共同してつくりましたが、今百数十タイトルあります。私どものつくったものは、最近は予算の問題もあって、非常に少ない。年間5～6タイトルしかつくれていませんが、需要は高いです。

聴覚障害者の方もそうですが、「映像、映画を観たい」という視覚障害者の方からの要望があるので、毎月第3土曜日に、図書館で体験上映の形で、これまでつくってきた作品をずっとやってきました。一通り全部終わったので、今度は日本ライトハウスさんのつくったものも上映していこうと思っています。毎回、50～60人の方が上映会にいらしています。これは少ないと思われるかもしれませんが、そんなことはありません。

今、私どもだけでなく、全国の同じような施設でも少しずつ行われています。私どもは今、川崎の同じような施設の指定管理もしていますが、そこでも上映会をしていて、多くの方が来ています。

実は私どものDVDをガイド付きで観られるシステムは、私からすれば仕方のないシステム、やむを得ないシステム。今の状況のなかでは、そうせざるを得ないものとして、認識しています。本来は劇場に出かけ、観たいときに観たいものが字幕付き、音声ガイド付きで観られるという環境整備が必要です。ですから、これからの課題は、法律的な部分での支援と、当然ながら制作にかかわる費用、私どもも音声ガイドをつくるだけでも低価格といえば低価格ですが、1作品数十万かかるわけです。そういう費用の助成を公的支援として我々としては求めていこうと思います。

それから、法的な整備によって、今、MASCさんで行っている音声透かしでつくられたものがどんどん普及していき、劇場には何の負担もなくインフラができれば、上映してくれる映画館も増えていくでしょう。そうすれば、全国の聴覚障害者、視覚障害者も気軽に映画を観られることになっていくと思います。それをとにかく要望したい。

映画業界からの意見

● 華頂 尚隆（一般社団法人 日本映画製作者連盟 事務局長）

このように、現状はいつでも・どこでも障害者が映画をご覧いただく環境にはありません。新システムについて、皆さまが言及されていましたが、このシステムを使うと、こういう閉塞的な環境が劇的に改善され、端末を持ち込めば、いつでも・どこでも映画を楽しんでいただくことができる状況になります。

資料2-2にありましたが、2006年に国際条約の「障害者権利条約」が国連総会で採択されました。そのころから徐々に、字幕付きプリントを全国ローテーションするなど、いろいろな対応をとっていました。今、新システムが開発されましたが、いつでも・どこでもご覧いただけるような環境整備、それに向けて映画界も努力すべきだと、気運が盛り上がってきました。

2011年、東京国際映画祭で初めて山田洋次監督をゲストに招いて、『幸福の黄色いハンカチ』をフルバリアフリー上映したのが最初ですが、その時点では、字幕を焼き付けて、活弁士の方を呼んで、視覚障害者のために音声解説をしました。この方式をずっとやっていると、なかなか現状から抜け出せないという悩みが、やっている私たちの方にもありました。もっといい方法がないのかと。

全国で邦画に日本語の字幕を付けて、全スクリーンでやればいいのですが健常者の方が、逆に、日本映画になぜ日本語の字幕が付いているんだと、同じ鑑賞料金をもらっているお客様なので、なかなかうまくいかない。そのため、全国ローテーションで場所

も時間も限定してやっており、その点での悩みがありました。

ところがそれから２～３年、劇的にデジタル技術の革新がありました。

MASCの川野さんの努力もあり、新しいシステムが今、開発され、去年、東京国際映画祭でメガネ型端末を使って実験上映をやりました。非常に好評でした。この方式でいけば、障害者の方は自分でウェアラブル端末を持ってくれば、健常者と同じようにいつでも・どこでも好きな時間に、自分の行ける劇場に足を運んで鑑賞できるようになる。それが一番、我々が願っていることでもあるのです。

ただ、映画の製作者、そして興行側で考えてみると、費用は通常の映画製作に加えて字幕と音声ガイドのデータを映画製作者の責任において、作っていかねばならない。この費用はこの先も逃れられない。その捻出をどうするかがこれからの問題ですが、制作費は必ず製作者がオンして制作しなければいけない。

大体、映画の１年間の興行収入は2000億くらいです。その中で映画業界、劇場も製作者もその周辺の人もメシを食っている状況です。劇場の設備投資で過度な負担になると、映画業界の収入が減ることになる。しかし、このシステムを使うと劇場の負担がないので、絶対について回る制作費、映画の字幕とか音声ガイド付与のデータつきの映画をつくるだけで、劇場では皆様が持ち込んだ端末でお楽しみいただける。劇場の負担がないこともあって、映画業界全体でも、このシステムを推進するのが一番よいだろうと思います。

これは障害者の皆さんのためにもなり、一番良いだろうと思います。とりあえずは一丸となって、この方式に向けて動いていこうというのが、今、現状としてあります。

ただ、いろいろ問題があります。そこにも「No More 映画泥棒」のポスターが貼ってあります。2007年、それ以前、アメリカでもすでに横行していましたが、デジタルカメラが高性能になり、劇場内で簡単に映画を撮れるようになりました。当初、この法律がないときは、私的録音・録画ということで、適法とは言いたくないですが、自分のためだったら映画館に入って、入場料金払って、カメラを回して撮ってもいいということでした。しかしそのデータが違法流通しますので、良くないということでこの法律をつくりました。

この法律はかなり罰則も重く、法律が施行されてから、極端に、今や映画盗撮する輩はほぼいなくなりました。

このウェアラブル端末。先ほど川野さんの話にありましたが、メガネ型の端末もタブレット端末も記録媒体で、録音・録画できる機能がついています。これを障害者の方が自由に持ち込むと、劇場のスタッフは目を光らせていますし、隣近所のお客さんも「何をしているんだ」ということで、スタッフに「あの人、盗撮してますよ」と、報告もしてもらえるような状況なので、それと誤認して、要らぬトラブルが増えるわけです。上映中にひともめ、ふたもめもあることにも、なりかねないと。

この端末の持ち込みについて、きちんとしたお互いのルールを作らないとまずいんじゃないか。そうでないと、これを稼働できない。アメリカではGoogle Glass、メガネ型の端末は劇場に持ち込んではいけないことになっています。ハリウッド・メジャーは日本でも上映していますが、メガネ型端末を野放図に持ち込むことを許すと、特にハリウッド・メジャー、洋画関係者からは何をしているのかという話になりかねません。

このシステムをこれから先に稼働させるためには、劇場できちんとした検証を行い、持ち込む障害者の方はガイドライン、受け入れる劇場は運用のマニュアル、これを両方ともつくって、この両輪を回していかないとなかなかうまくいかない。これが今後の一番大きなハードルになると考えています。

資料3

新システムによるバリアフリー上映会の結果と問題点の整理

平成26年10月24日に東京国際映画祭会期中の上映イベントとして開催。

- 本編音声に「音声電子透かし」を埋め込み、スマートフォンアプリで同期。
- 字幕は市販のメガネ型端末で表示、音声ガイドはスマホやiPod touchで視聴。（必要な人のみが必要な情報保障を受けられる考え方はアメリカと同様）
- 本技術により、製作側が対応を推進すれば、映画館の新たな設備投資は不要。（映画館に新たな設備投資が必要であれば前に進めない）
- 対応済みの作品は、放送やDVD・Blu-ray、配信等の２次利用にも使える効果も大きい。
- 字幕のメガネ表示は、多言語にも対応可能であり、新たなマーケットの拡大に向けた技術の応用が期待される。（2020年東京オリンピック・パラリンピック対応を視野に産業振興の側面有り）

＜今後の方向性＞

- 新システムのメリットは大きく、障害者への合理的配慮として、新システム導入を検討する。
- 合理的配慮とは？
  障害者権利条約第２条において、「合理的配慮」は、「障害者が他の者との平等を基礎として全ての人権及び基本的自由を享有し、又は行使することを確保するための必要かつ適当な変更及び調整であって、特定の場合において必要とされるものであり、かつ、均衡を失した又は過度の負担を課さないもの」と定義されている。
  →「障害者差別解消法」第三章　第八条／「障害者基本法」第四条（参考資料「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」参照）

＜問題点の整理＞

- 携帯端末を持ち込む際の当事者と映画館側の新たなルールづくりが必要。（盗撮防止と着信コールがならないように携帯電話はOFFのルール有り）
- 当事者、来場者への広報（理解）を徹底させると同時に利用の促進が必要。
- メガネ型端末は、付け心地等、更なる進化が必要。

（２）東京国際映画祭における新システムによるバリアフリー上映会の結果と問題点の整理（川野）

・新システムのデモ披露

新システムを使用した映画『渚のふたり』という作品の本編を再生すると、自動で同期して字幕・音声解説がiPhone、iPod touchなどiOS端末から流れるようになっています。電波も一切使わず音だけで同期がかかるしくみです。

・（資料３）新システムによるバリアフリー上映会の結果と問題点の整理

この新システムを東京国際映画祭で映画『舞妓はレディ』で使用し、スピーカーから出る音をスマートフォンのマイクで拾い、音声ガイドが出る。もしくは、メガネ型端末で、メガネをかけると字幕が付くことを、実証しました。

東京国際映画祭は大成功で、端末もすべてが同期をして、全く問題ない状況でした。ただ、メガネ型端末に関しては、まだまだ進化が必要で、かけたときに少し重いなど、いろんな要望をいただいています。

スマートフォンアプリは現在はiOS端末のみですが、Androidは４月以降にアップ予定です。

市販のメガネ型端末はEPSONのMOVERIO。これはAndroid OSを持っており、それで対応しています。それ以外のメガネは商品として出ているものもありますが、高価なため順次検討していきます。

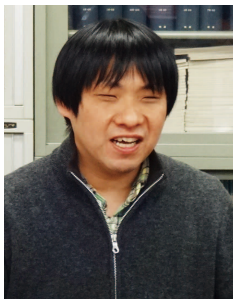
製作側が音声透かしを入れ、もし、当事者の端末持ち込みを可能にするならば、映画館の新たな設備投資は一切不要。映画のマスターの音声に透かしが入るので、沖縄でも北海道でも、すべての上映館で使えるシステムになっています。

対応済み作品は、そのまま音声に透かしが入った状態でマスターとして使われれば、放送、DVD・Blu-rayになっても二次利用として使えるメリットが非常に大きいです。

字幕表示は多言語にできるので、増え続けている外国人対応も容易で、オリンピック・パラリンピックの産業振興の側面も、そして海外からのお客さまに映画館にきてもらうという側面もあるかもしれません。

東京国際映画祭で体験した当事者の意見

● 大河内 直之（東京大学先端科学技術研究センター 特任研究員）



既存の映画館でも大きな設備投資をしないまま、個人が端末を持ち込むことでバリアフリー化が実現することが、すごく大きいことだと思います。

バリアフリー映画というのは、決して新しいものではなくて、日本点字図書館さんや日本ライトハウスさんが取り組まれているように、10年以上前からありました。ただそれは、既存に出来上がったものに後から福祉団体や当事者団体などが変更・調整を加えてバリアフリー化をするものでした。

建築の世界でも、既存の建築物を改修するより、新規に立てたほうがお金も手間もかからないと言われますが、バリアフリーもそうで、つくるときに何らかの配慮をしておいた方がコストもかかりませんし、手間もかかりません。

そういう意味も含めて、ここ何年かの間に映画の世界でも、製作段階からバリアフリー化しようと。もっと言えば、公開と同時にバリアフリー化されたものがいつでも同じように、どこでも、どの時間でも観られるようにするのが理想でしたが、そこにかなり近づくシステムであると思いました。

実際体験して、何回も利用していますが、これまでFMラジオを使った音声ガイドだったり、歌舞伎でも音声ガイド、外国人向けや一般の人向けのイヤホンガイドもありますが、それらと遜色なく使えます。まさに音を使っているので、インターネットを使うわけでもないですし。人間の耳に聞こえない音声透かしがきちんとスマートフォンに届けば、全く既存のFMを使ったような、これまでの特別なバリアフリーシステムと遜色なく使えています。これをもっと普及していく必要があると思います。

先ほど言われた方もいましたが、そもそも障害を持つ人、目が見えない人、耳が聞こえない人も映画を観ているんだと知らない方がたくさんいらっしゃるので、それも含めて、いろいろな人が社会参加できるような環境を映画の世界からもつくっていければいいなと思っている次第です。

新システムのDVD、Blu-rayなどへの二次利用について

● 八十河 恒治（一般社団法人 日本映像ソフト協会 業務部長）

先ほどから皆さんの話を伺い、必要なことですばらしいと思いますが、私は個人的には今までポニーキャニオンという会社から出向していて民間で利益を追求するところにいました。先ほど出ましたドリフもポニーキャニオンが扱っているので耳が痛い話だったのですが・・・。

マーケットも一緒につくっていかないと、恐らく、援助が終わった途端、やめてしまうのが民間企業だと思います。なので、先ほど、山上理事長からも問い合わせがありましたが、「レンタル店でのBlu-rayはどうなんですか？」というのも、耳が痛い話です。

販売のほうはBlu-rayのマーケットは存在していますが、残念ながらレンタル店のBlu-rayは、あまりマーケットとしてしっかり存在していません。そのせいで販売も徐々に少なくなってきています。恐らく皆さんもレンタル店でBlu-rayってあまり借りないんじゃないかと思います。

同じように、このシステムについても2000万人ほどのマーケットがそこにあるということで、我々ソフトパッケージ業界というのは、対前年で８％くらい売り上げが落ちています。新しいマーケットの創造は大切です。

皆さんもご存じのように、今のパッケージを買っている世代は40～60代という高齢の方で、この後、10年、20年、この人たちは、ここ（資料２－10）にあるような2000万人の中に入ってくることが考えられます。そこにしっかりしたマーケットをつくったうえで、一つのビジネスとしてもこれが役立つんだというのを伴っていく。企業としてはこれに対して積極的に取り組みやすいので、ぜひともマーケットの創造、もしくは創出も一緒に考えていただきながら、立ち上げていくことを、民間から出向している身としては、ぜひ一緒に考えていただきたい。そうすれば、いつまでも続きますし、補助がなくてもやっていくことに意味があると、すごく企業として理解していけると思います。

そこもぜひ、一緒に考えながらやっていければ、ドリフにも字幕がつくんじゃないかと思います。

アニメ業界での字幕・音声ガイドについて

● 松本 悟
（一般社団法人　日本動画協会
専務理事 事務局長）

アニメのパッケージは、配信をした直後に日本語ではなくて、英語や中国語の字幕をつけてネット上にアップされてしまっています。

日本語をつけたパッケージは現状と

してありません。日本語でも英語でも、システムとしては同じです。現状はBlu-rayに、すでに英語とフランス語、中国語をパッケージングして商品にして出ています。

最近はすぐにアップされてしまうのでテレビ作品は難しいですが、イベント上映という形で1時間から1時間半ぐらいの作品については、イベントと同時に劇場でもDVD、Blu-rayを販売し、全世界的にも販売できる状況もつくりながらビジネスにもパッケージ販売を直結させようという動きが出ています。

そういう意味では日本語も含めて、字幕を付ける、あるいは音声ガイドも含め、今後、付ける方向にいくべきだという議論をやっと始めています。

あとは当然、制作コストにも関わりますが、その辺りのスケジュール的なものと制作コストをどう考えるかが課題ではないでしょうか。

今、英語、中国語の字幕をつけると、30分のアニメ番組で翻訳して字幕をつけるのに、大体7～8万円でできると言われています。日本語は翻訳というコストはかからないので、もっと安くできるというのは言い方が変ですが、日本語の字幕、あるいは音声ガイド付きというのは、それほど手間がかからないという気もします。

また、業界として、メーカー各社がどういうメリットを感じるかという考え方をまとめていくべきだと考えています。その辺の調整をこれから現場ではしていきたい。

先日もデモをしていただきましたが、まだ一部の動画協会の理事しか見ていない現状がありますので、代表者の出ている会議の席上でもデモをやっていただき、いろいろな機会に広めていける機会をつくれればいいかなと思います。

新システムのメリットは非常に大きいが、例えば字幕が張り付いた上映、もしくは音声ガイドがスピーカーから聞こえる上映の場合、障害者向けの上映と健常者の上映とに分ける方向になってしまうため、この新システムはまさに合理的配慮ではないかと思うが、合理的配慮とは？

● 川又 竹男（厚生労働省 社会・援護局 障害保健福祉部企画課長）

差別解消法自体、厚労省がやっているわけではなく、全体は政府です。内閣府で今、合理的配慮、また不当な差別とはどういう考え方なのかという国の基本方針を作成中です。原案はもう、パブリックコメントにかかって、公表されております。おそらく、来月ぐらいに政府として閣議決定されることになります。合理的配慮といっても、いろんな場面があり、コストと見合うかどうかもありますので、一義的に明確に定義できるわけじゃないですが、基本的な考え方は基本方針に示されておりますので、皆さま方にまた情報提供をさせていただきます。

ここまでの話を踏まえ（2）の問題点の整理のまとめ（川野）

携帯端末を持ち込むことになれば、当事者と映画館側と新たなルールづくりが必要です。盗撮防止、着信コールが鳴らないように、

資料4

今後の検討課題（案）

障害者差別解消法への具体的な対応として、政府は「差別の解消の推進に関する基本方針」を示し、今夏を目処に事業分野別の指針策定を目指している。
現状の問題点を踏まえ、事業者（製作、映画館）には、関係者全体のコンセンサスを得て必要な対応を行うために、「事業者の運用ガイドライン」の策定が必要となり、一方、当事者にも、映画館をスムーズに利用するために、「障害者の利用ガイドライン」が必要となる。

「事業者の運用ガイドライン」と「障害者の利用ガイドライン」を作成するためには、障害者の映画視聴の在り方に関する望ましい合理的配慮について、関係者の合意形成を行うこと、また、映画館の営業において、新システムを使った障害者対応上映を実施し、実際にどのような問題があるか、当事者から見て具体的にどのようなニーズがあるかということを把握するため、一定期間の実証実験と調査の必要があるのではないか。

＜検討のポイント＞

1．映画館について

（1）劇場の施設及び設備整備の必要性
（2）端末使用に伴う盗撮防止等の問題
（3）機器の取り扱い方法の理解
（4）当事者への対応（合理的配慮とは）

2．製作・配給について

（1）字幕等付与率向上のための業界内での取組
（2）制作費用の負担　等

3．障害者について

（1）劇場に来るまでの事前準備（アプリのダウンロード等）
（2）端末の使用方法の理解
（3）使用時の注意事項　等

＜新システムの活用方法＞

障害者対応のみならず、将来的な映画産業の発展拡大にも繋がるような技術利用の検討を行う。

● 今後増加する高齢者向けサービスへの応用
● 多言語対応による外国人向けサービスへの応用
（東京オリンピック・パラリンピックにおける利活用）
● 災害時の緊急避難誘導や情報保障　等

このシステムは機内モードという電波を受けないモードで使用します。「必ず機内モードにしてお入りください」といったルールづくりの必要があります。また、当事者、来場者に広報し、理解を徹底させる。隣の人が「何か使っている」ではなく、音声ガイドが必要なので使っているなど、映画館に入る方が全員知っておかなければならない。利用の促進も含め広報が必要でしょう。メガネ型端末はまだまた進化の途中です。

また、大きなディスプレイはかなり光源が強いため光の問題もあります。

（3）視聴覚障害者の視聴環境向上のために映画業界が果たすべき役割についての検討（川野）

（資料4）事業者の運用のガイドラインと、障害者の利用ガイドラインを作成することが必要です。今回の検討のポイントは以下です。

1．映画館について

（1）劇場の施設および設備整備の必要性
（2）端末使用に伴う盗撮防止等の問題
（3）機器の取り扱い方法の理解
（4）当事者への対応（合理的配慮とは）

2．制作・配給について

（1）字幕等付与率向上のための業界内での取り組み
（2）制作費用の負担　など

3．障害者について

（1）劇場に来るまでの事前準備（アプリのダウンロードなど）
（2）端末の使用方法の理解
（3）使用時の注意事項　など

劇場での有効な方法、考えられる問題点等について

● 会田 郁雄（全国興行生活衛生同業組合連合会 顧問）

今までも話がでましたが、実際、劇場側としては、人件費も含めコストを非常に落としたなかで、いらない対応はしたくない。シネコンはそういうところです。プラスアルファのいろいろな仕事、操作はできるだけ避けてもらいたい。しかし、これはノーというわけではなくて、そういう形で事前にきちんと仕組みをつくり、わかりやすく説明をしてもらいたい。それもシンプルな形で。複雑だとアルバイトが結構いますので、運用が難しくなります。劇場にコストの負担があるかは、まだ検討していないわけですよね。

→（川野）そうですね、この辺が検討課題ですが、全面的に持ち込みを推奨するのか、もしくはメガネ、Google Glassが持ち込み禁止になっているように、メガネもカメラ付きを持ち込まれると困るので、むしろ専用メガネを貸し出したほうがいいのかもしれない。劇場さんによってはそれをやりたいという意見を伺っているので今後の検討課題だと思います。

→（会田）劇場にとって差別化のために自分たちが用意したいところもある。逆に全てに適用しなくてはいけないとなると、負担になる。一つどのぐらいするのですか？

→（川野）EPSONのMOVERIOは定価で約7万円です。字幕だけに使うというより、映像が出てくる端末なので、普通に映画を観たりできます。

→（会田）華頂さんもおっしゃっていましたけど、ディスプレイの光源の問題が相当ネックになると思う。一般のお客様に迷惑になるんじゃないかな。

→（川野）昨年の東京国際映画祭では、字幕を端末に出すことは一切しませんでした。字幕はメガネ、音声ガイドはポケットに入れた状態で聞けますので。こういったことを推奨していこうという方向になっています。

→（華頂）資料4にもガイドラインが事業者用と障害者用と2つ書いてありますが事業者用のものは、マニュアルです。というのもシネコンは、アメリカから入ってきたサービスですので、従業員用のマニュアルは分厚いものです。どこの流通に行ってもそうだと思いますが。そのなかに障害者用のマニュアルもちゃんとあります。そこに新たにこのシステムのマニュアルを付け加えればいい。だからマニュアルに溶け込ませるという、そのような作業で済むと思う。シネコンの従業員はすべてマニュアルどおりに動いています。

質問：去年、日本経済新聞に、どこかの映画劇場で盗撮防止のシステムを開発したと読みましたが、盗撮や盗聴を防止するシステムはできていませんか？（小川）

・回答（華頂）

盗撮の犯罪はアメリカからこちらに上陸してきたのですが、アメリカは今でも悩まされています。アメリカも日本と同じように法律があるのですが、同時上映するカナダには、ありません。

アメリカがカナダの政府に盗撮防止法を制定するようと言っていますが、カナダは「いやだ」と。盗撮犯がカナダに移動して、カナダで盗撮しています。ハリウッド映画は全世界メディアで、ロシアはラボから流出しています。日本はおかげさまで、盗撮防止法をきちんと制定したので、そこから先は、少なくなっています。

今の質問ですが、そこら辺りから盗撮防止技術を開発するところがでてきたのですが、いずれも実効性に乏しい。新システムに使っている音声透かしも盗撮防止に対応したものです。ただし、盗撮を防止するためではなく、盗撮されたものが流出した場合、鑑定すると、その透かしから、どこの劇場で何時に撮られたのかが特定され、監視を強化するよう言うことができる。盗撮されたもののトレース技術は絵の透かし、音声透かしと二つあります。「追跡」ですね。残念ながら撮られた後の技術です。事前に盗撮を防止する技術は幾つか開発されていますが、実行性に乏しいものばかり。法律がなければ今でも撮影されてしまうだろうと思います。

新システムの活用についてとまとめ（川野）

障害者の方への対応が主ですが、「今後増加する高齢者向けサービスへの応用」、「外国人向け多言語対応サービスの応用」、「災害時の緊急避難誘導や情報保障」など、様々な情報を出すことができます。

例えば、このフロアで、災害や地震が起きると全部の電源が消えたとする。しかし、防災スピーカーは生きていて、そこから音声が自動的に流れます。

つまり、何か起こったとき、流れる音声情報に対して透かし技術を使うと、まさに何万人、何百万人だろうが、音が届けば、聴覚障害者の方にも防災情報も届けることができます。

現在、音声透かしを使ったソフトウェアにはその機能を埋め込む作業をしています。Jアラートという、国が出す緊急避難信号が出たとき、自動的にテキストで表示されることで対応しようとしているので、その面でも有効だと考えています。

今後の検討課題が、いろいろ出ました。これらをまとめて次回の有識者会議にもう一度かけて、報告書をまとめようと思います。

当事者の立場からの意見（小川）

映画を観るとき、端末があれば字幕が出てくるのは便利ですが、持っていないと見ることができないという環境は困ります。特に高齢者は、そういうメディアを使いこなすことになかなか認識が乏しい方もいらっしゃいます。そういう方々が、劇場に行っても機械を使いこなさないと見られないといった状況が続くなら問題はそのままになってしまいます。

ですから、できるだけ、どなたでも見られる環境づくり。例えば、システムを貸し出すとか、別の場所でスクリーンに字幕を投影するとか、柔軟な対応ができるようになっていないと、せっかく行ったのに見られなかったというのではまずい。そういったものも含めていただければと思います。

→（華頂）そのためのガイドラインづくりですね。要は、その端末を入手する方法、これはいろいろあると思いますが、入手して、操作のし方がわからないなどがないように、それも盛り込んだ障害者用の利用ガイドラインをつくるのが目的ですね。

→（川野）小川さん、ここに出てくるものを、例えば、先ほど紹介した、透明のアクリル板に出すことも実はできます。今後、いろいろな検討を、ご意見いただきながら進めたいと思います。

知的障害の場合について

● 田中 正博（全国手をつなぐ育成会連合会 常務理事）

知的障害の場合には、聞こえない、見えにくい方が知的障害でも重複障害でいます。知的障害の特性上、コミュニケーション障害ととらえる必要がある部分があります。

特に、文字情報を、難しい表現でされるとわかりにくいことがあります。多くの場合には、漢字にルビを振ることで調整しているところが多いのですが、それだけですと意味が伝わらないことがあるので、やはり情報に加工が必要な状況になります。

英語を日本語に翻訳するほどのことはないですが、四字熟語をなるべく平易な表現にするとか、カタカナや平仮名表記も外来語だったりしますので、日本語に置き換える。ただ、これが四字熟語に戻る可能性がありますので、その辺りに工夫が必要になっています。全面的にカタカナや平仮名にしますと、読点がわからずに、よくわからないことになりかねません。

小学3年生くらいまでの当用漢字を使いながら、文章の長さと文章の見やすさ、文字数の書き換えとカタカナ表記の置き換え、また四字熟語はなるべく平易にしていくという基準を持ちながら、わかりやすい表現を進めているグループが幾つかあります。

今後、端末にソフトを盛り込んでいくときには、そういう点でも必要性について提案させていただければと思います。

→（山上）今回の新システムだと多言語の対応が可能なので、チャンネルを選べると思うんです。障害者対応の字幕ということで、一つだけの字幕ではなく、知的障害の方の字幕はもう一つ別のチャンネルで対応していくということが将来的には可能だと思います。

誰もが見やすい究極の字幕というのが理想ではありますが、やはり高齢者や聴覚障害者の皆さんは、普通にみんなが見ている字幕で見たいという要望があると思います。

理想的にはいろんな字幕で対応する、そういうものにも新システムは、利用可能だと思います。我々が知らない世界ですので、知的障害者の字幕の認知度のために、ぜひ今後も提案していただければと思います。

オブザーバーの皆様からのご意見

● 石垣 鉄也（文化庁 文化部芸術文化課 支援推進室長）

いろいろな意見を聞かせていただき、大変有意義な会議になったと思います。文化庁で今、やっているのが、私ども、映画製作の支援という形です。その支援したものに対して字幕を付ける費用、上限が100万円となっていますが、そういう形でやっています。それを今後どういう形にしていくのかが課題になろうかと思います。予算的にもなかなか厳しいところがありますが、いろいろご意見を聞かせていただき、そのなかでできるものは取り組ませていただきたいと思っています。今後ともよろしくお願い申し上げます。

● 川又 竹男（厚生労働省 社会・援護局 障害保健福祉部企画課長）

本日はありがとうございます。私も映画『舞妓はレディ』を観せていただきましたが、音声透かしのような新しい技術が、映画のみならず、いろんな障害者の社会参加の場面に応用できるようになることを非常に期待したいと思います。

1点お伺いしたいのは、アメリカや韓国は進んでいるという話でした。この音声透かしの技術がわが国で実証的にやられていますが、将来的な戦略として、これを国際標準化みたいな、ユニバーサルなものとして普及していく戦略はおありですか？

→（山上）私的な意見ですが、今回のシステムにつきましては、大きく二つの方向性があると考えています。一つはやはり先ほど、川又さんからも話のあった、2020年の東京オリンピック、パラリンピックに向けての非常に大きな国際標準化への道が開けてくるのではないかと思います。障害者対応の字幕・音声ガイドだけでなく、多言語対応ということが今、すでに目標に揚がってきておりますし、もう一つ、川野からもありましたように、緊急災害時の情報保障にも使える。

そういう意味で、このメガネは映画館だけで使用するものではないと思います。日常生活のなかで広く活用いただけるようなものにつながる可能性を持っていると思います。

もう一つは、今の安倍政権の地方創生にもつながっていきます。

国内的には、映画館で障害者の皆さんが自由に映画をご覧になれる環境を全国で共用できることです。今までは字幕付きのプリントやDCPを全国を巡回しながら80カ所程度での上映というのが精一杯でした。これが全国ほとんどのスクリーンで同時に見ることができるという意味では地方創生、活性化にもつながると思っています。

国際的にも国内的にも、可能性を持った技術だと思いますし、そのことで、実際目に見えるビジネスとしても成功例につながっていく形を目指していく。情報保障としての福祉の面、ビジネスとしての商業の面、その二つの両輪で進むべきだと思っています。そのような希望を持っています。

もう一つは、文化庁で今年度から実際に字幕制作の助成事業を立ち上げていただき、ありがとうございます。50作品程度の作品を前提にした5000万という予算だったと思いますが、今年度の予算の執行状況は、どのぐらいの本数に実際には付けられますか？

→（石垣）50本を目途にしていますが、実際、今のところ40本程度です。もう少しいくかなと思いますが、大体そのような状況です。

→（山上）引き続き、来年度も予算化されていますので、ぜひ満額予算を使わせていただくということでは、音声ガイドの制作にも、ぜひ助成金を、字幕に限定しないで使えるように使用を広

げていただくようなご検討も、併せてお願いしたいと思っています。
ぜひ、お持ち帰りいただき、ご検討をお願いいたします。

→（石垣）音声ガイドのニーズがどのくらいかも、実際には、また教えていただかなければいけないところです。その辺りを教えていただきながら、検討していきたいと思います。

● 望月 孝洋
（経済産業省 商務情報政策局 文化情報関連産業課 課長補佐）
（柏原課長退席のため）

私も過去に東京国際映画祭でバリアフリー上映会に参加させていただきました。携帯端末を活用した音声ガイドと字幕表示は、事業者、映画館、製作会社さんであれ、負担をかけずに取り組むきっかけを与えるものだと思います。これに光を当てて広めていこうという動きは、とても大切なものかと思います。障害者差別解消法が2016（平成28）年４月に施行されるので、それとの関係では、まずはいわゆるガイドライン、事業者指針の策定が今後の、当面の課題になると思います。事業者向けではマニュアル、取り組みのし方だと思いますし、おそらく障害者に対しては、映画館での視聴の手引きというものかなと思います。関係する皆さんが多岐にわたっているので、是非ご協力をいただきながら、マニュアルづくりを進めたいと思います。

ガイドラインをつくることが目標ではありますが、それは通過点で、これをきっかけにして、実際この先、どうやったら障害者の方が映画館に来て観ていただけるか。映画会社さん、映画館によっては対応した取り組みをしていただく必要も出てくると思います。

事業として収支を考えながら取り組みをされているとのことですと、「障害者への対応」という話に加えて、どうやって「ビジネス」として収益を上げながら両立させていくかということですが、幸い、このシステムですと、障害者あるいは高齢者市場への拡大であるとか、オリンピック・パラリンピックへ向けて外国人へのアピール、多言語での翻訳・吹き替えを用意することであるならコンテンツの輸出展開とか、様々なビジネスの拡大のなかで取り組んでいくものだと思っています。

いずれにしても関係者、関係省庁の皆さまの意見を仰ぎながら、我々の立場としては、映画製作の振興という観点から光を当てた形になりますが、ご協力のあり方について引き続き声をかけさせていただきたいと思っています。

● 佐伯 知紀（文化庁 文化部芸術文化課 主任芸術文化調査官）

有効性や実効性の話は皆さんがおっしゃっていますが、私は映画人とかなり親しいので製作のほうでお話します。『舞妓はレディ』の周防監督が、東京国際映画祭でご自身の映画を、目を閉じて音声ガイドを聞きながら観た。そのことをお話になったとき、印象深かったことは、自分の映画なのに、違う絵が浮かんでくるという不思議な話をしました。映画は、強制的に自分がみせたいものをみせる媒体だと言ってしまえば言えるのですが、特に監督が、「それでもいいんだ」と許容したんです。その世界観に入ってくれて、そのドラマに身を浸して、観客が何かを持って帰ることが成果だと。周防さんはそうおっしゃってくださった。

こういうことは、関係者も大事ですが、作り手の人たちにもアピールして、好意的になってくれる人を増やしていくことも大事なんじゃないかなと、現場に近い立場からの意見です。脚本家とか監督とか、基本的には、そういうことなしで観てもらいたい芸術だと思っているので、そこも含めて理解していただくことが大切だと思います。

4. 閉会（川野）

たくさん検討課題をいただき、ありがとうございました。今日の会議の議事録をまとめ、皆さまに見ていただきながら、再度、いろいろなご意見をいただきたいと思います。本日はありがとうございました。

参考資料

障害者差別解消法概要・該当条文抜粋

障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律　（平成二十五年法律第六十五号）

目次

第一章　総則（第一条―第五条）
第二章　障害を理由とする差別の解消の推進に関する基本方針（第六条）
第三章　行政機関等及び事業者における障害を理由とする差別を解消するための措置（第七条―第十三条）
第四章　障害を理由とする差別を解消するための支援措置（第十四条―第二十条）
第五章　雑則（第二十一条―第二十四条）
第六章　罰則（第二十五条・第二十六条）
附　則

法律条文	要約	映画業界における対応の具体例
第三章　行政機関等及び事業者における障害を理由とする差別を解消するための措置		
（事業者における障害を理由とする差別の禁止） **第八条**　事業者は、その事業を行うに当たり、障害を理由として障害者でない者と**不当な差別的取扱い**をすることにより、障害者の権利利益を侵害してはならない。	不当な 差別禁止	・視聴覚障害者に対応した バリアフリー上映の提供
2　事業者は、その事業を行うに当たり、障害者から現に社会的障壁の除去を必要としている旨の意思の表明があった場合において、**その実施に伴う負担が過重でないときは、**障害者の権利利益を侵害することとならないよう、当該障害者の性別、年齢及び障害の状態に応じて、**社会的障壁の除去の実施について必要かつ合理的な配慮をするように努めなければならない。**	合理的配慮 努力義務	・視聴覚障害者に対応した上映の機会均等の 希望に対する合理的配慮 ・映画館での上映機会の検討、映画館での 上映がままならない場合の合理的配慮の検討
第四章　障害を理由とする差別を解消するための支援措置		
（相談及び紛争の防止等のための体制の整備） **第十四条**　国及び地方公共団体は、障害者及びその家族その他の関係者からの障害を理由とする差別に関する相談に的確に応ずるとともに、障害を理由とする差別に関する紛争の防止又は解決を図ることができるよう必要な体制の整備を図るものとする。	差別解決への 体制の整備	・視聴覚障害者に対応した ガイドラインの策定
（啓発活動） **第十五条**　国及び地方公共団体は、障害を理由とする差別の解消について国民の関心と理解を深めるとともに、特に、障害を理由とする差別の解消を妨げている諸要因の解消を図るため、必要な啓発活動を行うものとする。	差別解決への 啓蒙活動	・ガイドラインの啓蒙活動 ・バリアフリー視聴の広報の整備
（情報の収集、整理及び提供） **第十六条**　国は、障害を理由とする差別を解消するための取組に資するよう、国内外における障害を理由とする差別及びその解消のための取組に関する情報の収集、整理及び提供を行うものとする。	情報収集	・バリアフリー上映のアンケート ・障害者団体へのヒアリング
附則		
（検討） **第七条**　政府は、この法律の施行後三年を経過した場合において、第八条第二項に規定する社会的障壁の除去の実施についての必要かつ合理的な配慮の在り方その他この法律の施行の状況について検討を加え、必要があると認めるときは、その結果に応じて所要の見直しを行うものとする。	経過観察 と見直し	・定期的な検討委員会の開催

※参考　「障害者差別解消法」は障害者基本法の4条を具体化した行政法であること。

障害者基本法　（最終改正：平成二五年六月二六日法律第六五号）

法律条文	要約	障害者差別解消法対応部分
（差別の禁止） **第四条**　何人も、障害者に対して、障害を理由として、差別することその他の権利利益を侵害する行為をしてはならない。	障害を理由とした 差別の禁止	第三章　第八条
2　社会的障壁の除去は、それを必要としている障害者が現に存し、かつ、その実施に伴う負担が過重でないときは、それを怠ることによつて前項の規定に違反することとならないよう、その実施について必要かつ合理的な配慮がされなければならない。	合理的配慮 不提供の禁止	第三章　第八条
3　国は、第一項の規定に違反する行為の防止に関する啓発及び知識の普及を図るため、当該行為の防止を図るために必要となる情報の収集、整理及び提供を行うものとする。	情報収集、整理 及び提供の義務	第四章、附則

※海外事例
イギリスの演劇の例
障害者差別禁止法が1995年に施行、そののち2010年の平等法に発展して、「演劇作品ひとつの作品を上演する際にはかならず1回以上字幕・手話・音声ガイドを実施する」ことが義務化された。

第２回
映画上映に関するバリアフリー対応に向けた障害者の視聴環境の在り方に関する有識者会議

議事録

日時　平成27年２月20日（金）午後２時～午後４時
場所　一般社団法人 日本映像ソフト協会 大会議室

議事次第

１．開　　会

２．委員紹介

３．討　　議

（議事項目）

（１）第１回有識者会議における課題整理

（２）バリアフリー上映に関する現状把握と海外との比較

（３）来年度の新システム実証実験実施にあたっての要項確認

Ａ：障害者のための利用ガイドライン

Ｂ：映画館における運用マニュアル

（４）その他

４．閉　　会

＜出席者＞

華頂 尚隆　（一般社団法人 日本映画製作者連盟 事務局長）
新藤 次郎　（協同組合 日本映画製作者協会 代表理事）
山上 徹二郎（MASC理事長／協同組合 日本映画製作者協会 理事）
松本 悟　（一般社団法人 日本動画協会 専務理事 事務局長）
臼井 正人　（全国興行生活衛生同業組合連合会 副会長）
伴田 雄輔　（東宝株式会社 映画営業部映画営業管理室 室長）
中田 有香　（東宝株式会社 映画営業部映画営業管理室）
小野田 光　（東宝株式会社 映画調整部契約管理室 室長）
小川 光彦　（一般社団法人 全日本難聴者・中途失聴者団体連合会）
天野 繁隆　（社会福祉法人 日本点字図書館 館長）
平塚 千穂子（バリアフリー映画鑑賞推進団体シティ・ライツ 代表）
松森 果林　（ユニバーサルデザインアドバイザー、内閣府障害者政策委員会 委員）
大杉 豊　（筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター
障害者基礎教育研究部 聴覚障害教育実践部門 准教授）
常世田 良　（立命館大学文学部日本文化情報学専攻 教授）
中島 佐和子（秋田大学大学院工学資源学研究科情報工学専攻 助教）
川野 浩二　（MASC事務局長）

＜オブザーバー＞

川又 竹男　（厚生労働省 社会・援護局 障害保健福祉部企画課長）
福田 夏樹　（厚生労働省 社会・援護局 障害保健福祉部企画課
自立支援振興室企画法令係長）
稲川 武宣　（厚生労働省 健康局 生活衛生課 課長）欠席
山崎 雅志　（厚生労働省 健康局 生活衛生課 課長補佐）
平木 孝佳　（厚生労働省 健康局 生活衛生課 係長）
加藤 敬　（文化庁 文化部芸術文化課 課長）
中臺 正明　（文化庁 文化部芸術文化課 メディア芸術振興係主任）
塩見 絢子　（文化庁 文化部芸術文化課 企画調査係長）
柏原 恭子　（経済産業省 商務情報政策局 文化情報関連産業課 課長）
望月 孝洋　（経済産業省 商務情報政策局 文化情報関連産業課 課長補佐）
高田 靖子　（経済産業省 商務情報政策局 文化情報関連産業課 係長）

※この会議は手話通訳とパソコンでの文字通訳による情報保障を行いました。

1. 開会

山上 徹二郎
（MASC理事長／協同組合 日本映画製作者協会 理事）

今日の会議は２回目です。平成26年度のコンテンツ産業強化対策支援事業の一環として経済産業省から私ども、NPO法人メディア・アクセス・サポートセンター（以下、MASC）がお受けしている事業です。

日本映画のバリアフリー化に向け映画の製作者、配給者、映画館を含めて、よりよい字幕付き、音声ガイド付きの映画を広めていこうという趣旨から皆さんにお集まりいただいています。

今年度事業で、２回の有識者会議を開催し、次年度、実際に実証実験、実際のバリアフリー映画を一般の映画館で障害当事者の皆さんへ広めていく、そして映画館のご協力を賜っていく形で進めるための調査事業として進めています。皆さんで大いに議論していただきたいと思います。

実際に調査事業が幾つかすすんでおります。その報告書もお手元の資料に入っていますので、会議の中でご報告させていただきます。では、よろしくお願いします。

2. 委員紹介

出席者肩書き明記済みのため、省略。

3. 討議

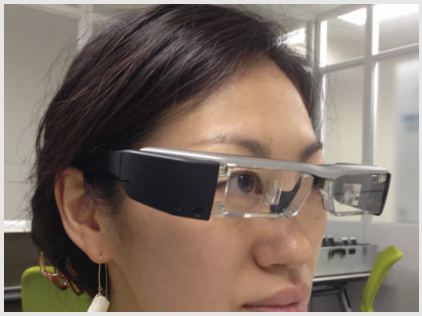
（１）第１回有識者会議における課題整理
川野 浩二（MASC 事務局長）

・（参考資料）新システムについて

最近のメガネを４つ、紹介しています。

参考資料

最新シースルー式
ヘッドマウントディスプレイ情報



エプソン社　MOVERIO 発売中 7万円
両眼式で掛ければしっかりと見える。少々重いという意見が多い。
端末の中に、AndroidOSが入っているので、マイクを付ければ、
そのまま同期可能。手軽に扱える。4時間前後使用可能。

オリンパス　MEG 試作品

課題整理で、「新システム」という言葉が出てきます。「新システム」とは、昨年の東京国際映画祭で使用したシステムです。

映画の音声のマスターに音声透かしを埋め込みます。それにより、スマートフォンなどのアプリケーションが音声透かしを読み取って、字幕、音声ガイド、手話などを出すことができます。

― 実演 ―（iPad２台、iPod touchをみせる）

アプリケーションで、日本語字幕と英語字幕と日本手話を端末で選択をした状態です。これで透かしの入った音を流します。

♪～

今、同期がかかっています。電波とか無線LANを使っていません。この音だけでシンクロがかかります。このように手話も出ます。自由にアプリケーションで情報保障の内容を選べる。これが新システムです。

メガネもまだ完全なものではないんですが、ソニーがメガネ型端末「SmartEyeglass」を３月に発売すると発表しています。これは、まだ試していませんが、画像ではなくテキスト表示なので字幕に最適かもしれません。ヘッドマウントディスプレイは、どんどん進化しています。これを映画館で使うと、メガネのなかで、字幕がスクリーンの前に浮かんで見える状態が実現します。

音声ガイドは、普通にヘッドホン、イヤホンをさせば、画面表示はなく、音声ガイドがシンクロして聞けます。これが新システムです。

・第１回有識者会議の課題整理ポイント

・目の見えない方、見えづらい方、耳の聞こえない方、聞こえづらい方が、いつでもどこでも、映画を鑑賞できる状況ではない。

・ニーズは確実にあるが、マーケットとして認識しないと育っていかない。

・当事者への広報。情報保障の対応をしても、当事者に、それをやっていることが届かない限り広がらない。

・映画業界では、新たな負担という観点だとなかなか進まない。

・新システムは、いろいろな言語を出すことも可能。東京オリンピック、パラリンピックを控えて多言語対応も可能になる。

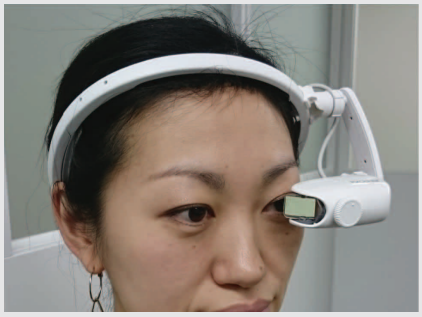
・昨年の東京国際映画祭で、映画『舞妓はレディ』の周防正行監督が「新たな表現方法として使えるのではないか」と発言されている。映画業界の新たな負担ではなく、積極的に使うべきではないか。映画館への新たな設備投資が非常に難しい状況のなか、このシステムは最小限でできる。映画館自体に特別なシステムは不要。映画のマスターの音声に、音声透かしが入っていれば、設備としては非常に最小限というメリットがある。

・問題点の整理

・新バリアフリー視聴システムの劇場導入の際、障害者向けのガイドライン（持ち込む場合のガイドライン、使うときのガイドライン）、事業者にとってマニュアルによって、ちゃんと運用できるようにしないといけない。この２つが必要である。

・実際のサービス開始時に、障害者、事業者双方の広報をしっかりやって、利用促進、お客さんを増やすことに結びつく方向にする。

・障害者対応のみならず、将来的な産業の発展・拡大への技術利用の検討。ヘッドマウントディスプレイは、字幕利用が進めば、メーカー間の競争もおそらく始まるのではないか。新産業という意味でも期待できるのではないか、という意見が出た。



ブラザー社　AiScouter　試作　20万円

コントラストも強く、しっかりと見える。頭で固定するため、ディスプレイがぶれない。ヘッド部分が大きく見た目がゴツい。HDMIで接続するディスプレイなので、別途端末が必要。現状、１時間前後しか電池が持たない。

ソニー社　試作

有機ELでコントラストが強い。画面サイズが小さく、字幕表示は未知数。
（プレス資料での想像で試していません）
スマートフォンとBluetoothで接続されるため、ケーブルがなく、
軽くてつけ心地はいい。位置固定が少々難しいのと、貸出しても、
初めて見る方はどうやって見るか、戸惑う方も多い。見え方が分かれば、
長時間でも見やすい。バッテリーは簡単に交換可能。４時間前後使用可能。

資料3

海外の映画館におけるバリアフリー対応状況調査　中間報告

日本の現状

【字幕について】

聴覚障害者向けに日本語字幕を付けて上映している作品があるが、作品数、上映劇場、上映日時が限定されているため、当事者は鑑賞できる上映回が限定されている。

2014年国内映画の公開数615本中(2014年日本映画製作者連盟発表)日本語字幕付き作品66本。(2014年MASC調べ)

【音声ガイドについて】

視覚障害者向けの音声ガイドを付けている作品はとても少ない。また音声ガイド付き上映をする際は、NPOやボランティア団体が音声ガイドの音のみをFM送信で行い、当事者はラジオで受信する方式のため、必ずオペレーターが必要となる。

そのため、字幕付き上映よりも作品数、上映劇場、上映日時が限定される。実施されても全国で６劇場から９劇場程度。

2014年国内映画の公開数615本中(2014年日本映画製作者連盟発表)音声ガイド付き作品６本。(2014年MASC調べ)

＊音声ガイド：情景、場面、人物の動きなど、目から入る情報を言葉で説明するナレーションで音声解説、副音声とも呼ばれている。

【補足】

日本には劇場の常設設備で日本語字幕を投射するシステムや音声ガイドを送出するシステムはない。

アメリカの現状

【字幕について】

オープンキャプション形式では日時限定で上映を行っているが、10人以上の聴覚障害者団体から要請がある場合は通常上映回をオープンキャプション形式で上映する劇場もある。現在は、クローズドキャプション形式が主流。機器は無料で劇場が貸出をしている。

（２）バリアフリー上映に関する現状把握と海外との比較
（資料３・６）（川野）

・日本の現状（資料３）

日本の現状は、第１回で詳しく説明しましたが、もう一度説明します。

昨年2014年のデータが出て、字幕は大体10％いかないぐらい、制作されています。

映連さんを中心に制作されていますが、残念ながら劇場で見るときには、スクリーンに貼り付ける字幕しかないので、時間と場所が限られてしまうという問題があります。

音声ガイドは、制作本数自体が非常に少ないです。東宝さん中心に何本か制作されてはいますが、劇場の設備がないために、我々NPOやボランティア団体が劇場に行って、音声をFM送信し、FMラジオで鑑賞する。一日やることはあまりなくて、一日のうちで１回だけというように、バリアフリーの鑑賞機会は少ないです。

・アメリカの現状（資料３）

アメリカは、メジャー・スタジオの公開本数で資料にアンダーラインが引かれていますが、かなりの率で字幕制作をしています。劇場も、オープンキャプションという、スクリーンに投影する方式ですが、ある一定の聴覚障害者がいれば、通常上映に字幕を付けるとか、また、クローズドキャプション、メガネ端末やセカンドスクリーンに字幕が投影され、当事者だけが字幕を見られるという方式も、かなり普及しています。

音声ガイドも、メジャー・スタジオは、100％、制作しています。

資料３にある「磁気ループ」というのは、公共施設や劇場の中に電線というか、ケーブルを這わせて、磁気の状態をつくり、補聴器に音声を送るシステムです。

映画館で使うのは、ネック型のループ（neckloop）として、ネックレスのようなものを首にかけ、ダイレクトに音声を耳に届けるというシステムです。もともと聴覚障害のある方向けに音声を増幅するためにあった磁気ループですが、同時に視覚障害も使えるように配慮されている現状です。劇場の対応も非常に進んでいます。

デジタル化が進んでいることもあり、クローズドキャプションは、ソニーの映画館用字幕メガネが、かなり広がっています。リーガルシネマはほぼ100％対応すると表明しています。

・イギリスの現状（資料３）

イギリスも、製作本数202本中170本と、非常に多くの作品に字幕が付いています。

音声ガイドも同じ数。考え方としては、字幕と音声ガイドはセットで付くという動きになっています。

アメリカと同じような音声を会場に送るシステムも標準としてたくさん入っています。

まだ、これは中間報告です。

・進化するアメリカのADA法（障害のあるアメリカ人法）
タイトルⅢに関する施行規則の改正法規案について（2014/7/25公示）（資料６）（川野）

昨年の７月25日に交付されたもので、もともと障害のあるアメリカ人法、ADA法がアメリカには根付いています。

これが改正法起案という形で、座席に応じた端末数の最低数

2010年メジャー・スタジオ(MPAA加盟社)公開数140本中 字幕付き作品120本程度

参考：2013年メジャー・スタジオと中堅メジャー・スタジオ公開作品198本。

＊オープンキャプション形式：字幕データと本編が同期がかかり字幕がスクリーンに投影される方法
＊クローズドキャプション形式：メガネ端末やセカンドスクリーンに字幕が投影され当事者のみにだけ字幕を提供する方法

【音声ガイドについて】

DCP(デジタルシネマパッケージ)でデジタルスクリーンでの上映であれば音声ガイドを制作した作品は、常時音声ガイドを聞く事ができる。FM送信、赤外線、Wi-Fiの他、磁気ループシステム「neckloop」でヘッドホンを使用。機器は無料で劇場が貸出をしている。

2010年メジャー・スタジオ(MPAA加盟社)公開数140本中 音声ガイド付き作品140本。

参考：2013年メジャー・スタジオと中堅メジャー・スタジオ公開作品198本。

＊DCP(デジタルシネマパッケージ)：デジタルで記録された映画配給用マスター素材の名称。
＊磁気ループシステム：エリア内に入ると音声が増幅される仕組み。

【補足】

司法省の2014年の文書では「2011年以降、字幕・音声ガイドの付与本数を公に記したデータはないが、2012年以降増えることが予測できる」としている。

劇場スクリーンについて
アメリカ映画協会(MPAA)の2013年レポートによると、全スクリーンの93%がデジタルに移行済。

全米映画館主協会(National Association of Theatre Owners)によると、全国のデジタル・スクリーンのうち少なくとも53%は字幕(オープン含む)と音声ガイド付きで上映できる。(2013年5月)。

映画館チェーンの大手３社がデジタル化された全館にクローズドキャプション・音声解説に必要な装置導入を公約している(Regal, Cinemark, AMC)。

イギリスの現状

【字幕について】

オープンキャプション形式上映で日時指定だが、毎週上映をおこなっている劇場が756館中400館以上。毎週1000回以上の上映回数になり、この５年で120%増加。クローズドキャプション形式は未導入。

2013年国内映画の公開数202本中(BFI Statistical Yearbook 2014調べ)字幕付き作品170本（Action on Hearing Loss /Your Local Cinema調べ）

【音声ガイドについて】

DCP(デジタルシネマパッケージ)でデジタルスクリーンでの上映であれば音声ガイドを制作した作品は、常時音声ガイドを聞く事ができる。FM送信、赤外線、Wi-Fiの他、磁気ループシステム「neckloop」やヘッドホンを使用。756館中300館で上映されている。聴覚障害者対応機器としてのイヤホンのように装着する映画の音を大きくする機器「hearing loop」を音声ガイド視聴用として併用して使用。

2013年国内映画の公開数202本中(BFI Statistical Yearbook 2014調べ)音声ガイド付き作品170本（Action on Hearing Loss/Your Local Cinema調べ）

【補足】

貸出用の劇場スタッフのマニュアルあり。
障害者の介助者は無料で映画鑑賞券を提供されるCEAカード制度あり。

資料6

進化するアメリカのADA法（障害のあるアメリカ人法）

タイトルⅢに関する施行規則の改正法規案について（2014/7/25公示）

〈映画館に対する法規制〉
この法規案は、全国全ての映画館の全ての上映回を対象とし、字幕や音声ガイドが付いている映画が上映される場合、聴覚障害者は個人用の字幕表示機（またはオープンキャプション）で字幕を読めるように、視覚障害者は音声受信機を通して音声解説を聞けるように義務化するものである。

を定めることが表明されています。

今、いろいろ議論している最中のようですが、法的な動きがアメリカではある。

デジタル化することによって、非常にこういうバリアフリー化しやすくなったという面もありますが、既に義務化という形でアメリカでは動いています。

海外と日本を比較すると、日本がこれまでなかなか対応できていなかった現状が表面化してしまいます。

映画鑑賞の現状、当事者・当事者関連団体の意見

● 松森 果林
（ユニバーサルデザインアドバイザー、内閣府障害者政策委員会 委員）

私は両耳とも聞こえない中途失聴です。昔から映画が大好きで、今は毎週のように映画を観にいきます。映画館に観にいくのが大好きなんです。

一人子どもがおり、私の家族は私以外は聞こえる人で、子どもと一緒に映画を観るときに洋画が中心になってしまいます。

今、日本の映画を観たいと思っても、字幕がなくて楽しめない。子どもが小さい時から15年間ずっと、一緒にアニメを観るのを我慢してきました。

東京国際映画祭ではメガネ型端末とiPhoneの両方を使ってみました。

周防監督の『舞妓はレディ』、日本の舞妓さんのしきたりとか文化が出てきて、「日本の映画はこんなにおもしろいなんて」と驚きました。

メガネ型端末を使って感じたことが３つあります。
１つ目は、舞妓さんの世界、しきたりなどの伝統文化を学べたこと。
２つ目は、方言のおもしろさ。この映画には鹿児島弁、津軽弁、京言葉の３つが出てくるのですが、聞こえないとわからないんです。手話ではわからないことです。それが字幕を通して観られたのはすごく大きな収穫でした。

３つ目は音の表現の深さ。
三味線の音色、着物のこすれる音、踊りのけいこで床を踏む音、そうした生活音、環境音が字幕で表示されると、普段、聞くことのできない音の存在も聞くことができました。

新しいシステム、私はたぶん一番軽いタイプのメガネ型を使いました。参考資料の写真の中ではオリンパス社のものです。

最初に映画を観る前に調整したんですが、映画は２時間座っていますよね。じっとおとなしくしているのではなく、途中でコーヒーを飲んだり体勢もかわります。ポップコーンを食べたりします。メガネを装着すると、位置がずれてときどき見にくいと感じることがありました。一度ずれてしまうと調整が大変でした。

でも、このタイプは多言語でも対応できるので、ものすごく大きな可能性を感じました。固定の仕方、不安定な部分がどんどん改善されていくといいなと思います。

特に女性はメガネをかけるとお化粧がはげてしまうことがあります。それらも解決できれば楽しめるのではないかと思います。

◆ 字幕表示用端末と音声ガイド端末を導入する義務を課す。装置の数は、映画館（スクリーンではなく）の総座席数に比例した台数が規定されている。

座席数	個人使用装置の最低数
100席以下	2台
101 ～ 200席	2＋100席以上の50席ごとに１台
201 ～ 500席	4＋200席以上の50席ごとに1台
501 ～ 1000席	10＋500席以上の75席ごとに1台
1001～2000席	18＋1000席以上の100席ごとに1台
2001席以上	28＋2000席以上の200席ごとに1台

※ 音声ガイドの装置は、従来、難聴者向けの増音量ヘッドホンの別チャンネルを使ってもよい。
※ 法規案では、字幕装置の品質基準も明記している（例：利用者が自由に位置を調整できること、読みやすい文字であること、等）。

他には

◆ 映画館のスタッフが装置の管理・配布・使用方法の説明ができるよう、訓練すること。
◆ 字幕や音声解説サービスの提供については、興行の宣伝広告の際、各メディアを通して広報すること。
◆ デジタル・スクリーンは法規公布から６カ月以内に遵守が求められる。
◆ アナログ・スクリーンに関しては２案が出され、国民意見を募集する：①４年以内に遵守、または ②規則づくりを延期

※ 現在アナログ・スクリーンの映画館の多くが小規模事業者であること、現在これら映画館がアナログからデジタルの移行期にあるか、今後移行できずに廃業する可能性を考慮している。
※ 本法規を15年有効と仮定し、機材導入の全国総コストが査定されている。デジタル・スクリーンでは年平均1520万ドル～2040万ドル（割引率７％）、年平均1420万ドル～1890万ドル（割引率3％）のコストと試算されている。さらに映画館の規模による４つのグループごと［メガプレックス（16スクリーン以上）、マルチプレックス（８～15スクリーン）、ミニプレックス（２～７スクリーン）、シングルスクリーン］のコスト試算も行なっている。
※ 小規模事業者が設備投資を負担と思われる場合、ADA法遵守のための特別な税額控除制度を利用するよう、勧めている。

● 平塚 千穂子
（バリアフリー映画鑑賞推進団体シティ・ライツ 代表）

私たちが活動を始めた頃は、全くこういうシステムどころではなかったので、実は映画を観たい視覚障害者の方から、「隣に座って耳元でこそこそ解説しながら一緒に観てくれる人はいませんか？」という問いかけをいただいたところから始まりました。

最初は、観たいという人の人数と一緒に見てくれる人をなんとか同数集めました。劇場に、こういう特殊な鑑賞をしますとお願いし、了解をいただきました。

一般のお客様には静かに観たい方もいます。地方の視覚障害者の方で、音声ガイド付きというサービスを受けられない方が、松本市でしたか――新聞でも話題になりましたが、劇場で見える人に解説してもらいながら観ていたら、一般のお客様に怒られて、すごく残念な思いをしたという記事がありました。そのようなところから始まり、観たいという視覚障害者の方と、見えない方とも映画を共有したい映画ファンをつなぐ手段は何とかないだろうかと、できる範囲で活動してきました。

映画会社でオフィシャルに音声ガイドが付いてバリアフリー公開される映画は年間わずかなので、それ以外の作品について、

私たちは映画館に許可をいただき、映写室でライブで実況解説し、その声をFMラジオの電波で飛ばし聞いてもらっています。観客目線で解説しているということは、参加の段階で了承をもらっています。間違いもあるかもしれないし、主観も入るかもしれない解説だけれど、ストーリーがわからなくなるよりは楽しみたいと参加されます。また、映画鑑賞のあと、お茶会やお食事会をして感想を共有したり、わからなかった場面を、見える人の視点の感想を聞いて補ったりしています。

なので、機会は限られていて、監督さんやプロデューサーさんなど製作者さんが提供する音声ガイドが公開と同数提供されるのは素晴らしいことだと思いますし、新システムでいつでも観たいときに観られる、回数もそうですが、日程というのも、ふらっと観たいときに観られる自由さは、障害者の方も本当に望んでいます。実現されることはありがたいと思います。

「視覚障害者および聴覚障害者に対するアンケート調査 中間報告」
中島 佐和子（秋田大学大学院工学資源学研究科情報工学専攻 助教）

資料には、1.と2.があります。

映画鑑賞の実態、どのくらい当事者の方々が映画を鑑賞しているかについての調査。そして、新システムを用いて試写会を行いました。使用感や期待に対する調査の結果をまとめています。

１. 映画鑑賞の実態に関する結果（資料４）

対象者は聴覚障害者、視覚障害者、それぞれ38名にお願いしました。資料の図１を見てください。赤い線が聴覚障害者、青が視覚障害者です。グレーの斜線は一般。これは過去１年間に映画館で映画を何度ぐらい鑑賞しましたかという質問に対する回答結果をまとめたものです。赤と青が、今回の結果です。

一般に関しては、ビデオリサーチという民間会社がデータをまとめていますので、引用しています。

「一度も利用しなかった」、「映画館で映画を観なかった」方と、それぞれ年間に「１～２回」とか、「12回以上」ヘビーに観ている方などの分布をまとめてみました。

ここでわかったこととして、聴覚障害者の方で一度でも映画館で映画を観た方は55.3％いました。一般のデータですと、52.8％。ほぼ同程度に映画を鑑賞されていることがわかりました。

そのなかで、実際に、邦画と洋画、どのぐらいの割合で見ることができているかというのも、加えて質問しました。

聴覚障害者の方は、邦画は、字幕がついていないなどの理由で、一般より４割程度低いことがわかりました。

いろいろコメントもいただきました。

松森さんがおっしゃっていましたが、資料の最後に抜粋で載せてありますように、日本映画を観ることができなかったというコメントが多くて、最近の日本映画は魅力があるので、観たくなるけど、字幕がついてないので諦めるというようなこととか、聴者の友人たちと映画を観にいくときに、作品を選ぶ際、どうしても洋画と邦画を気にしてしまうと言われています。

資料4

視覚障害者および聴覚障害者に対するアンケート調査 中間報告

中島 佐和子（秋田大学大学院工学資源学研究科情報工学専攻 助教）

1. 映画鑑賞の実態と映画上映へのニーズ

【調査対象者】

聴覚障害者：38名（男性20名，女性18名），平均48.7歳（±18.8歳）
視覚障害者：38名（男性19名，女性19名），平均54.8歳（±13.9歳）

【結果と考察】

聴覚障害者については，従来調査と同様に，邦画と洋画を含めた映画館での映画鑑賞参加率は55.3％で一般（52.8％）と同程度であるのに対し，邦画鑑賞の割合（25.3％）は一般（58.3％）に比べて４割程度に低いことが確認できた（図１と表１）。聴覚障害者の邦画鑑賞を十分に保障してこなかったことは，聴覚障害者が映画館での邦画鑑賞を諦めた経験や，邦画鑑賞への期待に関する声（コメント一覧）の多さからも推察される。

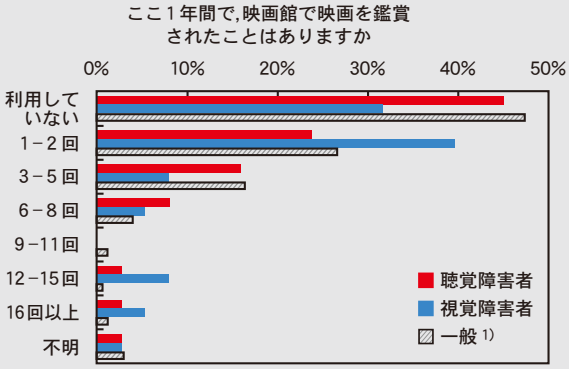


図１　映画館での映画鑑賞回数
1) ACRデータ2013年(株式会社ビデオリサーチ，東京30km圏内，2625人)

	映画鑑賞参加率 1)	邦画の割合 2)	洋画の割合 2)
聴覚障害者 3)	55.3	25.3	69.0
視覚障害者 4)	68.4	74.7 5)	29.7 5)
一般	52.8	58.3 7)	41.7 7)

表1　映画鑑賞参加率および邦画と洋画の割合　(%)

1) 過去1年間に1回以上，映画館で映画を観た人の割合
2) 邦画および洋画の鑑賞回数の比率
3) 青森，東京，埼玉，大阪，鹿児島
4) 北海道，青森，東京，埼玉，神奈川，大阪，鹿児島
5) 本データのみ調査対象者は21名
6) ACRデータ2013年（株式会社ビデオリサーチ，東京30km圏内，2625人）
7) 2014年全国映画概況（日本映画製作者連盟）の邦画および洋画興行収入に基づく

一方，視覚障害者については，一般や聴覚障害者と比べて，映画館での映画鑑賞参加率（邦画と洋画を含む）それ自体が高かった（68.4％）（表１）。しかし，だからといって，音声ガイドの普及に対する更なる期待は低いという訳ではなく，聴覚障害者と同様に，映画のバリアフリー化による映画鑑賞機会の増加への主観的な見込みは高かった。また，「そもそも映画鑑賞を諦めている」という声と，「見えなくなってから映画を観るようになった」という対照的な２つの声が聞かれた点も視覚障害者の特徴である。

2. 最新技術への期待と使用感

【調査対象者】

聴覚障害者：７名（男性３名，女性４名），平均63.5歳（±0.7歳）
視覚障害者：11名（男性７名，女性４名），平均55.0歳（±9.6歳）
注：図３回答者は１と同様に38名

【結果と考察】

聴覚障害者を対象とした調査では，EPSON社製のHMD（MOVERIO）により字幕を提示し，５分程度の映画を視聴した。視覚障害者を対象とした調査では，iPod touchからのイヤホンにより音声ガイドを提示し，ドキュメンタリー映画を視聴した。新技術使用後の調査の結果，新技術への期待に関しては，聴覚障害者では４段階中２番目に高い「一度使ってみたい（52.6％）」

そういうことから、映画自体は観たいし、興味もある、そして観ているが、邦画がまだまだ観られていないので、ぜひ邦画が観れるようになりたいという声を聞きました。

視覚障害者の方たちはどうだったかというと、さらに驚きだったのですが、一般や聴覚障害の方々と比べて、1年間に1回以上映画館で映画を鑑賞された割合がさらに多かったんです。68％以上の方が観ている。

だからといって、音声ガイドに対する期待が低いというわけではなくて、やはり、これから音声ガイドが付いていけば、もっと観ていきたいという期待感は聴覚障害者と同様に得られました。

コメントからは、これも視覚障害者の特徴でしたが、そもそも映画鑑賞は諦めていたという声と、見えなくなってから映画を観るようになったという、対照的な声が聞かれたのも特徴的でした。

2. 新技術を使った調査結果

この調査は、聴覚障害者7名と視覚障害者11名で行いました。

聴覚障害者の方への字幕提示は、参考資料の左上、EPSON社製の両眼のMOVERIOというヘッドマウントディスプレイを使って映画鑑賞をしました。

視覚障害者の方にはiPod touchからイヤホンを使って音声ガイドを提示しました。

結果ですが、新しい技術への期待や使用感については、視覚障害者も聴覚障害者も高く、よい感触を得ていました。

比較すると、聴覚障害者は使ってみたいかどうかでは、「一度使ってみたい」、4段階レベルで1番上から2番目ぐらいのところに回答が集まりました。

視覚障害者の方がもっと期待感や使用感は高く、好印象という傾向がありました。

具体的なコメントから分析します。
聴覚障害者の方々は、このメガネを使うことで、何となく周りに気づかれることにまだ違和感があるという声が一部には聞かれました。

また、字幕の見え方はどうだったかという質問には、見やすかったという、4段階中2番目に高い選択項目に回答は集まりましたが、やはり、やや見づらいという回答も3割ちょっと存在しました。

具体的な理由は、メガネが重い。また、目の疲れの影響が気になる。字幕の色が、背景と重なると見えにくいとか。字幕の色を調整したほうがいいのではないかという声もありました。スクリーンの映像とヘッドマウントディスプレイに投影される字幕を見るとき、字幕がぼやけて見えるという声とか、ヘッドマウントディスプレイのフレームがあると視野が狭くなるような気がして、アクションものや、活劇や、女優の顔を見たいときはフレームが何となく邪魔になるということもコメントとしてありました。字幕をちょうどいい位置に合わせて見るコツを掴むのがちょっと難しいという声もありました。

具体的に資料の2ページ目のグラフ、左側を見てください。聴覚障害者の方々にヘッドマウントディスプレイを使ってもらって、いくつかの技術的な課題について、どれを改良してほしいの回答が最多であったのに対し,視覚障害者では4段階中最も高い「毎回使いたい(50.0%)」の回答が最多であった。また、新技術の使用感については,聴覚障害者では5段階中2番目の「まあまあ使える(57.1%)」の回答が最多であったのに対して,視覚障害者では5段階中最も高い「使える(66.7%)」が最多であった。両群ともに新技術への期待は高く使用感についてもよい感触を得たが,聴覚障害者に比べて視覚障害者の方がより好印象な傾向があった。コメントを踏まえ,以下に論点をまとめる。

聴覚障害者からは「周りに気づかれることにまだ違和感がある」の声が一部に見られた。この点は,海外調査で示された課題と同様に新技術への抵抗感の一要因になっていると考えられる。一方,字幕の見え方に関しては,66.7%が「見やすかった(4段階中2番目に高い)」と回答したものの「やや見づらかった(4段階中3番目)」の回答も33.3%存在した。具体的には,「メガネの重さ」,「眼精疲労」,「字幕色の視認性(背景と重なると見えにくい,人によって変えたほうがいい,他)」,「字幕のぼやけ」,「フレームによる視野狭化」,「字幕の位置合わせの難しさ」などである。いくつかの設計要素に絞って改良点を質問した結果,「字幕の色(60.0%)」の工夫への要望が最も多く,続いて「字幕の文字数(40.0%)」が多かった(図2)。字幕の色に関しては,映画館環境に対して可能な限り最適化し,ユーザーごとに選択可能な本システムの利点を最大限活かすことで,カラーバリアフリーなどの課題にも対応できる可能性は十分に考えられる。字幕の見え方に関しては改良の余地があるが,「(字幕が)はっきり見えるのではないか」や「楽しい」というポジティブなコメントも得られたことから新技術への期待が伺えた。

【聴覚】普段ご覧になられているテレビや映画の字幕と比べて工夫が必要だと思われる点をあげてください(複数回答可)

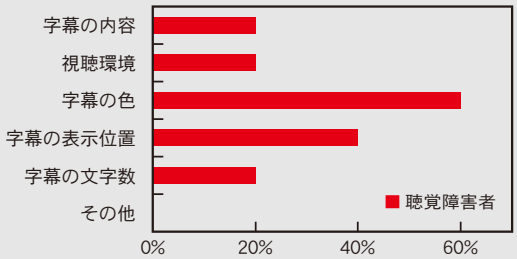


図2　HMDによる字幕提示の感想

一方,視覚障害者のiPod touchを用いた音声ガイド提示に対する反応はより明確であり,聞こえ方については4段階中最も高い「聞こえやすい(80%)」の回答が最多であり,「ノイズが入りにくい」という声が多数聞かれた。さらに,映画鑑賞時の音声ガイドの聞き方として最も好ましい形式を「全員に聞こえる形式」などの選択肢を用いて質問したところ,圧倒的に「イヤホンで音声ガイドのみを聞く形式(68.4%)」の回答が多かった(図3)。その主な理由は,「音量調整ができること(台詞とガイドの混在を防ぐことができる,他)」と「音声ガイドを必要としない人たちへの配慮」の2つであった。第一に,見えない,または,見えづらい状況に配慮した「操作の容易な設計」にすることが必要不可欠であるが,台詞と音声ガイドの混同の問題は,映画館での映画鑑賞時だけでなくDVD視聴時にも生じることや,「ガイドの声の高低を好みに合わせて調整できたらいい」という意見も得られ,放送やDVD・ブルーレイや配信等の2次利用への効果として,新技術のさらなる可能性を示唆する結果も得ることができた。

【視覚】映画鑑賞時に音声ガイドが付く場合、会場の人全員が音声ガイドを聞く形式と,イヤホンから音声ガイドのみを聞く形式のどちらがいいですか

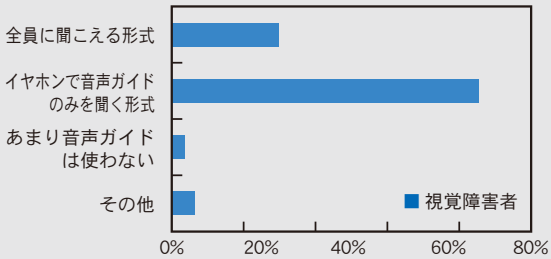


図3　iPod touch による音声ガイド提示の感想

コメント一覧(抜粋)

【聴覚障害者】

1)映画鑑賞の実態と映画上映へのニーズ

・最近の日本の映画に魅力があるので観たくなる。(全ろう,男性,35

かという質問をすると、「字幕の色」を工夫してほしいという声が一番多く、次に「字幕の表示位置」でした。

もう１つは、視覚障害者の方々が、この新システムをどう感じたか。

これは実際、iPod touchからイヤホンを使って音声ガイドを聞くと、聞こえ方がどうだったのかという質問に、４段階中１番評価の高い、「聞こえやすい」という回答が80％ぐらい得られました。

その理由は、ノイズが入りにくいこと、FMをイヤホンで聴いていると、ノイズが入ることがあるわけですが、このiPod touchで音声ガイドを聞くと、ノイズが入らないので聞きやすい。また、音量調整ができることも、非常にいいという声が多い。セリフと音声ガイドを聞くときに、映画館のスピーカーから映画の音と一緒に音声ガイドも聞くというスタイルであると、映画の中の音と音声ガイドが混在して聞きにくくなることがあるようです。音の入り口として、イヤホンによって切り分けることで、より聞こえやすくなるということは、結構、多くの人がコメントしていました。

セリフと音声ガイドを混同するような課題は、映画館だけでなく、普通にDVDを観ているときにも生じるということだったので、新システムは映画館だけではなく、放送やDVDなどで音声ガイドを２次利用するうえでも新しい効果を期待できるのではと考えています。以上です。

補足（川野）

少し音声ガイドの補足をします。

ラジオのFM電波でくる音はノイズがのりやすかったりします。

iPhoneやiPod touchなどで聞く今回の新システムは、音声ファイルが一旦読み込まれるので、普通に音楽を聴いているように音声がきれいに再生されます。非常に音質がいいと言われます。

それと片耳のイヤホンで使うことが多いのですが、両耳のイヤホンでしっかりと映画館のスピーカーからの音が聞こえるような特殊なイヤホンがありまして、東京国際映画祭でも使いましたが、非常に好評でした。

あと、骨伝導ヘッドフォン。両耳の耳を塞がないで、骨伝導で音声ガイドを聞く方式もありますので、そうしたいろんな技術が今後、進んでいくのではないかと思われます。

質問

- 聞こえない人は洋画が多いというのはわかりますが、視覚障害者が邦画の方が多い理由は？（松森）

→（中島）　洋画で音声ガイドが付かないと字幕版では、セリフとしては英語や外国語で映画を観ることになるので、情景説明や音声ガイドの説明はなくても、日本語でセリフが聞き取れる邦画の方が割合が高くなるのではないかと思います。

→（松森）　わかりました。洋画には日本語の吹き替えも当たり前のようにあるので。

→（山上）　たしかに松森さんが言われたように、洋画も最近は吹き替えが非常に多くなっていますので、吹き替え版では視覚障害者も洋画を観やすくなっている状況はあると思います。ただ、音声ガイドがない場合は、セリフだけがわかっても、映画のシーンの変化、映画の進行する物語が掴みにくいので、やはり、健常者用の吹き替えというものでは十分に理解できないので、かえってストレスがかかるという意見もたくさん出ています。

→（松森）　ありがとうございました。

- 実際、映画館で鑑賞された方に対する調査ですか？（平塚）

→（中島）　対象者は、映画館で鑑賞した経験があるなしに関わらず、調査に参加していただきました。その方々のなかで、映画館で映画を鑑賞したことがある、過去１年間ですが、そういう方がどれぐらいいらしたかということです。

→（平塚）　ニーズということでいいますと、私どもの関わっている視覚障害者のニーズとしては、日本映画ならば、音声ガイドがなくてもセリフが日本語で、ある程度、イメージもつくけれど、字幕版の外国映画が全くアクセスできないところなので、結構、積極的に自分から想像力を使って映画にアクセスしようという方に関しては、外国映画の方が観たいという要望があります。

また、吹き替え版を求めているかという点について。私たちは、吹き替え版になっていない外国映画の鑑賞にもいきますが、その際は、スピーカーからはもともとの原音の外国語が流れていて、イヤホンに字幕を朗読している声と音声ガイドが両方聴こえるように、同時通訳っぽい感じで聞く鑑賞スタイルをよく採用しています。

それだと作品そのものの音声を味わえるということで、外国語なので何を話しているのかわからないけれど、吹き替え版じゃない方がいいという方もいらっしゃいます。こ

歳,鹿児島）

・もともと映画館よりDVD派ですが,友だちと観に行くときの選択肢が広がるので。（洋画,邦画気にしなくてよい）（難聴,女性,22歳,東京）

・字幕ないため映画館に行きたくない。もしあれば行きたい。（全ろう,女性,64歳,青森）

２）最新技術への期待と使用感。

・以前体験した際,けっこう疲れたので毎回はしんどいかなと思います。（難聴,女性,22歳,東京）

・わかりにくい。補足：疲れやすい。3Dでも疲れるので字幕をみてまでメガネをかけたくない。（全ろう,女性,51歳,大阪）

・抵抗がある⇒メガネをかけるとフレームがジャマで視野が狭くなる。その範囲で字幕が付くと,映像がみえにくくなるのではないかと思う。（全ろう,女性,54歳,大阪）

・記入者注：日本の活劇など、動きのある映画はメガネなしで観たい（全ろう,男性,60歳,青森）

【視覚障害者】

１）映画鑑賞の実態と映画上映へのニーズ

・もともと諦めている。（弱視,男性,54歳,大阪）

・隣に座った〇〇さんの「見えなくなってから映画を観るようになった」というコメントを聞いて,「余談ですが,見られなくなると観たくなる。見えてた頃に観たものとかを観たい」と同感の意を示す。（全盲,男性,65歳,東京）

2）最新技術への期待と使用感

・FMイヤホンは,片方でイヤホン,もう片方で映画をきく。そのためノイズが周りから入ることがある。両耳するとノイズがなくなるし,バランスよく聴けた。（弱視,男性,52歳,埼玉）

・とてもよくできていると思いました。今までのような映画館でしか見られないとか音声案内がついているDVDでもやはりセリフと案内が混在してしまってよくわからなくなってしまうというおそれがないので映画館の音声案内と同じように聞けるというのはとてもすばらしいと思いました。また晴眼者では気が付かないことが発見されたのも面白かったです。最近の視覚障碍者向けのアプリでもなかなかうまく使えれないアプリがありますがこのアプリは使えそうでした。（男性,54歳,北海道）

れは好みや鑑賞経験も影響してくるんだと思いますが、あまり、視覚障害者はこういうものを求めているとひとくくりにはできないです。

・洋画『GODZILLA　ゴジラ』の吹き替え版に字幕を付けた東宝の事例

（川野）東宝さんが『GODZILLA ゴジラ』を配給したとき、洋画の吹き替え版で字幕を付けられたんです。日本では初めてのことでしたが、東宝さんに、何か声が届いたのですか？

→（伴田 雄輔　東宝株式会社 映画営業部映画営業管理室 室長）
東宝という会社は基本的に日本の映画を配給する会社です。去年は『ゴジラ』という洋画を全国の劇場に配給しましたが、非常に特異なケースです。

話がそれますが、東宝は年間35本ぐらいの映画を配給しています。その、ほぼすべてに日本語字幕を付けて劇場にデリバリーしています。

その流れのなかで、『ゴジラ』に関しても、洋画ではあるが、東宝が配給する作品ということで広く楽しんでいただこうと、字幕を付けました。

字幕を付ける作業にあたり、まさに今話に出ていたように、英語がわからなくて、日本語しかわからない健常者の方が見る字幕スーパーをそのまま付けるか。それとも、通常、邦画でやっている、少し情報を補足した形の字幕をつくるか議論をして、最終的には通常、補足バージョンでやりました。

→（中田 有香　東宝株式会社 映画営業部映画営業管理室）
日本語吹き替えバージョンの字幕をつくりました。『ゴジラ』に関しては、同じタイミングで音声ガイドもつくり、バリアフリー上映をしようとしたこともあり、英語セリフの字幕スーパーに音声ガイドをつけてしまうと、そこで英語のセリフの音も日本語で録り直さなければならず、時間も限られたなかでの作業だったので、日本語のセリフの吹き替え版に、日本語字幕をつくり、音声ガイドも追加してという形でバリアフリー上映をさせていただきました。
ややこしいのですが・・・、すみません。

→（川野）　ややこしい話をふりました。すみません。
ポイントとして、洋画の吹き替えが増えることにより、吹き替え版には字幕がない。こういう問題も表面化している。洋画の字幕自体も、あくまで耳の聞こえる方向けの字幕なので、バリアフリー対応は必要になるのですが、バリアフリー化が進むにつれて、さまざまな問題が生じてきます。

映画鑑賞の現状、当事者の意見

● 小川 光彦（一般社団法人 全日本難聴者・中途失聴者団体連合会）

『GODZILLA ゴジラ』の吹き替え版に補足バージョンの字幕が付いたのは、聞こえない立場で、ありがたかったです。

というのは、聞こえない人は単に字幕を見ればいいじゃないかと思われがちです。

1人で観るときは構わないのですが、例えば仲間と一緒にいくとき、家族と一緒にいるとき、音声吹き替えがあって、さらに日本語字幕がついていると、みんなと一緒にいきやすいんです。松森さんも発言しましたが、小さいお子さんと一緒に親がいく場合は、小さいお子さんは字幕を読み切れません。音声吹き替えがあれば、聞いてわかる。一緒に楽しめる。

見えない方と一緒に観にいく場合にも、日本語音声があれば内容がわかる。字幕だけではなくてさまざまな方法があると知っていれば、聞こえない人だけではなく、さまざまな人と一緒に観て楽しむことができるんですね。

聞こえない人は文化的な生活というなかで、どうしても範囲が狭められてしまいがちで、楽しみも自分だけになりがちですが、そういう楽しみを仲間と一緒に共有できるのが非常にうれしかったんです。ありがとうございます。

バリアフリー上映に関する意見

● 大杉 豊
（筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター
障害者基礎教育研究部 聴覚障害教育実践部門 准教授）

日本の映画への字幕付与取り組みについて、個人的に、最近記憶に残っている作品が２つほどあります。

１つ目は、『夢売るふたり』という映画です。もう１つは、『酔いがさめたら、うちに帰ろう。』という映画です。

この２つを比べると、字幕付与取り組みの考え方が違うと思いました。『夢売るふたり』の場合は、ユニバーサルデザインの考え方に基づいていて、徹底的に聴覚障害のある人たちのニーズに応えるための工夫があります。

これには、すべての人たちに、平等に、不公平なく、アクセシビリティを保障することがはっきり方向性として示されている、いい取り組みだと思いました。住友商事さんの大きな力があったと思います。

一方、『酔いがさめたら、うちに帰ろう。』は、ユニバーサルデザインではなくて、もう１つの考え方、インクルーシブデザインという考え方に近かったと思います。

ユニバーサルデザインは、アメリカで生まれた考え方であると聞いています。

それに対して、インクルーシブデザインというのはヨーロッパで生まれた考え方と言えばよいでしょうか。

インクルーシブデザインは、排除する要因を少なくしていく考え方です。例えば、感覚的な排除。それは視覚障害者と聴覚障害者が主な対象となります。排除される対象です。

他の１つは、知覚的な排除。例えば、ろう者の場合は言語の問題があります。手話がないとか、映画の中で聴覚障害者が出てこないとか、言語文化的な意味の排除です。

インクルーシブデザインは、作られた作品に対してではなく、映画を作る最初の部分、製作開始時に、映画づくりの人たちのチームで共有されるべきものです。排除する対象を極力少なくしていくために、主にプロデューサーが、または監督が、これをどう考え

ていくかにかかっています。

私は、ユニバーサルデザインでは、聴覚障害者が必要とする字幕をつくる、その字幕の質を保証する必要があると思います。一方、インクルーシブデザインではいろいろな映画を作っている人たちに対するこの考え方の啓発が進んでほしいと思っています。

→（川野）　ありがとうございました。
今おっしゃったことは非常によくわかります。映画の制作の段階で、積極的にバリアフリーを考えてつくっていく部分の話だと思います。

→（新藤 次郎　協同組合 日本映画製作者協会 代表理事）
今おっしゃられたことは、主にプロデューサーの責任だと私も思います。映画はそもそも、どうやってつくるかということで言えば、映像と音をミックスして表現に使う。これしか方法がないと思っていますし、それで何が表現できるかということが、作品の良し悪しを決めると思います。

これまでは、障害者の方、例えば音が聞こえない、目が見えない方の存在を前提には確かにつくっていなかったです。だけれども、全員に楽しんでほしいという思いは、今は非常に強いです。

映画は事業として作っていますので、参加した事業者全員が納得することが必要ですし、監督もプロデューサーも脚本も出演者もみんなでそういう方向性を持たないと、おっしゃるような映画の内容にはならないだろうと思います。

ただ、経済面だけをいいますと、主なマーケットは健常者の方です。これは致し方ないと思うのです。そのなかで製作費をリクープして、次の作品を製作していきたいという思いで作っているのですが、障害者の方にどう届けるかという内容が、映画のよりよい表現になって、映画の完成度が上がることを考えなければいけない。

新システムの運用についての質問

・今の音声透かしの技術は、どれぐらい持つのですか？（新藤）

→（川野）　音声透かし自体はデジタルで音に記録されるので、全く劣化はないです。

→（新藤）　そうではなく、映画をフィルムから作っている世代としては、デジタル技術がイノベーションで変わっていくわけです。そのたびに、基準が変わるため、コストをかけてデジタル素材を新たに作り直す作業を、さんざん繰り返してきています。

それがものすごく大きい問題として、現実にある。というのは、劇場が全部、DCPというデジタル上映になりました。

私自身の作品で一番新しいのが2011年公開の『一枚のハガキ』。これはプリント上映しました。昨年もそれを劇場でかけたいというオファーをいただきましたが、DCPという現在ほぼ100％で普及している方法でしかできない。その素材を作るのにコストがかかる。1～2回の上映でリクープできるコストではないので、そのオファーをくださった方もあきらめることになる。

新しい映画を、今の音声透かしを含めてデジタルで固定することは、積極的にやらなければならないし、ビジネスとしても、それでないと大勢の人には観てもらえないので、成立しないというのは当然です。だけれど、少し前の、2011年の公開作品でさえ旧作で、デジタル上映のなかでは、ないものと同じように扱われる。音声透かしは、当然入っていないわけで、音声透かしを原版として作っていないので、ないんです。

となると、障害者の方に広く観ていただきたいというなかには、それらの作品群は含まれないということになります。

それは個人の事業者で、新たにマーケットを掴むだけの売り上げを上げる作品ではないわけですから、たぶん、この先ずっと、新しいシステムでは、そういう作品はもう観られないのだろうと。それは私たちとしては問題だと思っています。

映画館、興行の現状

● 臼井 正人（全国興行生活衛生同業組合連合会 副会長）

DCPのシステムについて、私たちもデジタルの映写機を入れてきました。

ところが、入れたばかりのデジタル映写機は暫定で、もしかしたら数年内に入れ替えろという話がアメリカからある。1台1000万円する機械。10スクリーンならば10台、1億円ですよ。それなのに「今のは暫定です」と急に言われて、我々は戸惑っている状態です。

なおかつ3Dもいろいろなシステムがありました。3Dも我々は最先端だと思って入れたら、わずか数年の間に次から次へと入れ替えろという話で、1つシステムを入れるたびに200～300万円もかかるものを入れ替えて、元など取り終わってないんですね。

それにプラスして3Dシステムのメガネ。たくさん種類があり、これだと決まっていないので、また同じように次から次へと入れ替えなくてはいけない。今は使い捨てのメガネをお客様に持って帰ってもらう形に変わりましたが、当初、リース方式で入れていました。でも、次々壊れるんです。何万円のものが1回使って壊れる。結局、その場でチェックできないので、それを全部の映画館側が背負ってきた。なかには持って帰ってしまう人がいる。何万円もしたものを、1000円しかもらってないのに持って帰られたら、とてもじゃないけど、何のために商売をしているのかわからないという状態。

今は、映画業界全体が端境期だと思います。
うちなどは映写機も残して、全システムで対応できるようにやっていますが、本当に厳しい時代です。多分、映画業界全体で4億円以下の映画館は軒並み赤字のはずで、10億円以上の劇場などを含めて、トータルで収支をとっているはずです。

たぶん映画館を持つ会社で、製作・配給をしている場合は、利益がほどほど上がっていると思います。映画館を経営している側は東宝さんがたぶん映画館全体で10億円ぐらい上がっていますが、業界全体でせいぜい30億か40億。軒並み赤字で悩んでいる状態です。

映写も無人化してきましたし、人件費をかけられなくなってきているので、発券も無人化してきています。

この後の研究テーマが、入場システムの無人化。そうなると、貸し出しを伴うシステムが変わってしまうリスク、プラス、もぎりもいなくなる時代となります。

特に厚労省さんのおかげで、デジタルの方も2000万円まで無担保無保証で国庫から出しますとやっていただき、それでやっと入れられた映画館がある。それでもまだ入れられていない映画館も

あるという厳しい状態です。

全体的に、新システムは、よいと思います。入れられるところは入れていくと思います。

個人の形では、うちも極力、最先端のものを入れてきているので、やると思いますが、多くの仲間はやれないところが出てきてしまうところも考慮していただいて、できればシステムが固定化するまでは、貸し出し方式はご勘弁いただきたい。将来的には、運用のところで、無人化になってしまうことも考えていただけたらありがたい。全体の方向性は理解しています。その辺りをご理解いただきたいと思います。

→（華頂　尚隆　一般社団法人　日本映画製作者連盟　事務局長）
質問です。無人化の体制にするスピードはどんなものですか。

→（臼井）わからないのが実情です。そういうことを売り込めると思って、開発している発券会社があり、うちにも売り込みがきています。JRの入場システムみたいなものです。ピッとやって入場という形のものを今、開発している会社があります。

ただ値段が若干、今だと、人を置いておくのとどっちがいいかなという値段。リース期間が切れたあと何年持つかがわからないので。みんなが入れると急激に値段も下がると思います。デジタルがこんなに急激に進むと誰も思っていなかったのが実情ですから。

→（華頂）大手のシネコンにも当然営業がかかってるわけですね？

→（臼井）たぶん、やっていると思います。端境期なので、その点をご容赦いただければ。

アニメーションの字幕付き上映についての質問

●松本 悟（一般社団法人 日本動画協会 専務理事 事務局長）
東宝さんにお聞きします。
DCPで上映している同じスクリーンで、Blu-rayでも上映できると聞きましたが、可能ですか？

→（伴田）Blu-rayでの配給は、東宝では、行っていません。DCPかフイルムでしか配給していません。

→（松本）単館では可能ですか？

→（伴田）技術的にはBlu-rayのシステムがあれば可能だと思います。

→（松本）今、アニメーションの場合、パッケージになってからという前提があるのですが、テレビ放送すると３日ぐらい後に英語字幕や中国語字幕が付いて勝手にサイトにあがってしまいます。

映画館の場合、もし、全スクリーンでなくて、１スクリーンをBlu-ray上映できるような映画館があれば、アニメの場合、英語字幕、スペイン語、ドイツ語、中国語といった２～３の言語の字幕を付ける流れがあるので、そのなかに日本語字幕というチャンネルも作れる。Blu-ray商品になる前提で作っておけば、最初の公開のときには間に合わないという前提ができるかもしれませんが、それなりの準備期間をおけば、パッケージの対応と同時に上映のときにも日本語字幕を対応させるのは可能だと思います。10万か20万かのコストをどう、どこで償却するかということになりますが。例えば、バックアップ、タイミングやスケジュールの条件だとかがクリアになれば、たぶんアニメーションに関しては、可能な状況がつくれるかもしれない。

→（華頂）それはダイレクトに字幕を？

→（松本）はい、ダイレクトです。別のトラックで日本語をつくっていますので。

→（臼井）もうやっていますね。
大手の配給会社はBlu-rayを嫌がりますので、単館系の配給会社、特に小さいところは、デジタルにするとコストがかかるといって、プリントではなくBlu-rayで持ってくるところがありました。

ところが、Blu-rayは大きなスクリーンでは対応できないので、小さい劇場、単館系がメインになってしまう。お客さんもBlu-rayだとわかります。Blu-rayでやっているとクオリティとして文句が出ますから、基本的には単館系で、エリア全体でなくて、そこしかやっていないなら、できますけど。クオリティの問題で、やっぱりちょっときついのかなと思います。

新システムのあり方や可能性について

●常世田 良（立命館大学文学部日本文化情報学専攻 教授）

この会議が劇場映画を主に、聴覚障害、視覚障害を持った人が鑑賞するためという前提だとは思いますが、今、議論いただいたように映画業界のシステムの変更スピードが速くなっている。そこに足をとられると、こちら側、バリアフリーのしくみもそれに対応して変化させなければと、技術開発やコストがかかってしまう。

MASCがずっと取り組んできたのは、映画の側の技術とはなるべく距離を置いて、独立した形で切り離して映画が鑑賞できるシステムを開発しようというのが、もともとの発想でした。

映画の技術がいくら変わっても、こちらのコストはかからないし、一番使いやすいものを求めていける。

これはすごく重要なポイントだと思っています。
私は、この近くのがんセンターの研究センターと共同で、障害者の人に対して、がん情報をどう提供するかというプロジェクトをやっています。単にテキストだけじゃなく、映像もあるし、いろいろなものがあり、なかなか聴覚障害、視覚障害の方で実際にがんになった方、罹患してない方にも情報提供するのにすごくいろいろな問題があって、お医者さんとも相談しています。

確かに映画を鑑賞するところでこの技術が開発されてきたんですが、今や、先ほど多言語問題も出てきたけど、もっとユニバーサルでいろいろな局面で使っていける可能性があります。

もう１つ、図書館で、ビジネス支援もやっています。視覚障害者の方は、鍼灸をしている方が多く、専門書を読みたいが読めないので、図書館で音声テープをつくることもやっていまして、健康や仕事という、かなり重要なことに関しても、このシステムを使っていけるだろうと思います。

新システムは、かなり広い可能性がある。可能性が広がると、いろいろなところが使うようになり、コストが下がる。技術が一般化する、そこが非常に重要なポイントじゃないか。

今は映画のためにいろいろ考えていますが、障害者の方が使う技術がユニバーサルに発達すると、たまたま映画を観るときにもその技術を使うという順番に入れ替わるのではないか。その視点が必要じゃないかと思います。

議論の整理

（山上） 先ほど新藤さんから、また、臼井さんからの発言の答えになるかと思いますが、今ここで議論している、音声透かしを使った同期システムは、いわゆるいろいろなデジタルの技術革新とは全く違う流れでの議論だと思っています。

音声透かしは非常にアナログ的、音そのもの、可聴領域に透かしを入れるものです。デジタルであろうとDVDであろうと、Blu-rayであろうと、例えばテレビで映画を視聴する場合も、音声にアナログで同期させるシステムですので、映写方法や映画の素材がどのようなものに変化しようと、基本的には対応可能ということで普遍性を持ったものだと理解しています。この音声透かしそのものの寿命は、本来の映画の音声さえ消えなければ、それと同じ寿命だということを言っておきます。

前回の会議でも議論しましたが、一番、川上で映画を上映するときに、音声透かしを入れてしまえば、音声透かしは音声に入っているので、映画館で鑑賞しても、それをDVDやBlu-rayで鑑賞しても、配信で映画を見ても、また、テレビで放送されたときに観ても同じように同期させることができる。一度字幕をつくっておけば、音声ガイドをつくっておけば、対応できるという、汎用性もあると考えています。

もう１つ、常世田さんの意見にもありましたが、これから映画の業界でしっかり議論していくところになると思いますが、メガネ型端末はまだまだ開発途上です。もっと使い勝手のいいものが開発されていくだろうと思います。皆さんが今、日常的に使っているスマートフォンや携帯電話などと同じような進化の歴史をたどるだろうと思っています。

これは映画館だけでの使用ではなく、博物館、美術館で、同じように情報保障としても使えますし、少し今日の議論とは離れますが、例えば映画館は非常に公共性の高い施設なので、緊急災害時の情報保障にも活用できるわけです。

緊急災害時の情報にも同じように音声透かしを入れておけば、メガネの字幕表示に割り込んで、「今、震度４の地震がありましたが、大丈夫です」という情報を流したり、緊急災害時の避難経路も示せる。少し追加した議論ではありますが。

基本的な情報保障、字幕や音声ガイドは映画を楽しく鑑賞していただくための情報保障だけではなく、もっと生活に密着した、自分たちも含めた情報保障のツールとして、第１回から議論していることを申し上げておきたいと思います。

来年度、実際の実証実験をして、映画館でメガネを使っていただくなかで、もっと沢山の問題点が整理されてくると思います。今の議論を整理する意味で、私から発言させていただきました。

（３）来年度の新システム実証実験実施にあたっての要項確認（資料５）

Ａ：障害者のための利用ガイドライン
Ｂ：映画館における運用マニュアル

（川野）
１．障害者のための利用ガイドライン、２．映画館における運用マニュアル、３．製作側の認識理解向上の３項目を挙げて、私どもで議論し、考えられる点を挙げました。

臼井さんが言われたような、貸し出し時の盗難やリスクなど、そういうことも含めて、来年度、実証実験をしながら課題を整理して対応していこうと、項目を挙げています。

ここで解決できることではないのですが、考えられることがあればご意見をいただきたい。

資料5

新システムの実証実験における課題整理

1：障害者のための利用ガイドライン

- 本システム導入における障害当事者への周知徹底(宣伝・告知方法など)
- 劇場での鑑賞における事前準備(アプリのダウンロード等)
- 端末の使用方法への理解(マイクを塞がない等)
- 持ち込み及び使用可能な端末の情報提供

2：映画館における運用マニュアル

- 映画館スタッフによる障害当事者への対応方法と、持ち込み機器による盗撮防止の対策
- 本システム利用に関する一般観客への理解と周知
- 映画館ごとの対応の検討。映画館側が貸出端末を用意する場合と、当事者持ち込みの場合の対応について
- 視覚・聴覚障害当事者への機器の使用方法の説明マニュアル
- 本システムの基本的なメリットの説明
- 実証実験によるサービス実施中であることの広報の徹底とその方法

3：製作側の認識・理解向上

- 本システムが、障害者対応としてだけでなく多言語化を含む全く新しい可能性を持った表現方法であることの周知徹底
- 視聴覚障害者及び多言語による鑑賞者の広がりと、興行収入向上の可能性の周知
- 映画原版への音声透かし挿入の理解促進と、実施要領
- バリアフリー映画のスタンダード化推進のための、2016年4月1日の障害者差別解消法施行への理解促進

質問　新システムでオープンキャプションという選択はあるか？

（松森）１つ質問があります。
音声透かし技術というのは、今はiPhoneとかヘッドマウントディスプレイだけですよね。

実際のスクリーンに投影できないのですか？
例えば、新システムの導入は、多言語でも対応可能など、私としてはすごく興味をもっています。でも、もっとシンプルに考えると、私たちにとって映画のバリアフリーというのは、特別な機械を必要とすることなく、皆さんと同じように楽しみたいということです。

そのためには、実は、オープンキャプションが一番シンプルだと思いますが、先ほど皆さんから議論いただいたように、さまざまな問題があることもわかりました。

こうした新しいシステムでiPhoneやヘッドマウントディスプレイとは別に、音声透かしを使ってスクリーンに投影する方法も選択肢の１つとしてあればと思いました。

→（川野） できます。例えばこのiPhone、iPod touchであれば、ビデオアウトからプロジェクターにつないで投影すると、字幕だけをスクリーンに投影することも可能です。どのように運用するかという問題はありますが、別データであることは、合成することも可能です。

→（山上） 松森さんにご質問です。

今いわれた意味は、字幕が付いたり、音声ガイドがオープンで、当然のこととして映画館で流れる。要するにバリアフリー映画が映画のスタンダードになるという意味でおっしゃったのでしょうか？

→（松森）そうですね。
特別な機械を必要とすることなく、いつでも見たいときにはスクリーンに字幕が出ている。それが理想的な形だと思います。

資料で、健常者が字幕は嫌だという意見も見たのですが、それでも私が行った東京国際映画祭の時に周防監督と話して印象的だったのは、「観客を選ばない映画をつくりたい」ということでした。障害があってもなくても楽しめることが、あるべき社会の姿だと。それを受け入れてもらえるように、いろいろな人に宣伝や開発をしていただくことが大切だと思います。選択肢の１つとして、オープンキャプションも入れてほしいと思いました。

→（山上）基本的には松森さんと全く同じ意見です。
映画のプロデューサーでもあるので、あえて言いますが、まだ映画がこの世の中に誕生して120年の歴史しかないんですね。私たちが今、映画と思っている形は完成形ではないと思います。

あと10年後、20年後に今見ている日本映画、洋画がどういう形に変わっているかは想像もつかない。そういう映画の新しい可能性の１つとして、実はバリアフリー映画を位置づけることができると思います。私たちがここでできる議論もプロセスの１つだと理解しているつもりです。

→（華頂）ダイレクトに字幕をスクリーンに投射するという松森さんの意見ですが、これは今でもやっている技術ですが、これがなかなか健常者の観客との兼ね合いで、非常に難しい。

このバリアフリー映画に2011年頃から映画界は取り組んできていますが、前回も申し上げましたが、その問題で、非常に悩ましい、なかなか進展しない。

ダイレクトに投射する技術だと、どうしても全国の上映しているすべてのスクリーンに一斉にすることはできない。北海道から沖縄までローテーションを組んで、その日、その時間に来てくださいと告知して、来てもらっているわけです。

ダイレクト投射の方式でいくと、もう、ここから脱却することはできないと、いろいろ悩みがあったのですが、一昨年ぐらいでしょうか、新システムが開発された。この方式を使えば、ある特定の機器を持ち込み、その機器を起動させれば字幕も音声ガイドもトータルにできると。じゃあ、この技術を推進していこうじゃないかと、今日の会議も開かれているわけです。

「ダイレクトに投射する」という話に戻ってしまうと、またまた隘路に入ってしまい、繰り返しになります。新システムの可能性について、やはり追求していきたいと、私は個人的には思っています。

→（山上）私が言ったのは、投影方式ではなく、映画作品ソフトそのものが将来的にどういう形になっていくか、私たちには見えない。未来の映画のなかには、おそらく字幕や音声ガイドも、１つの可能性として、映画の表現の１つの位置づけとして含まれてくる可能性があるのではないかということで、投影方式として具体的に申し上げたのではありません。
申し訳ありません、誤解を与えたのであれば、訂正します。

→（小川）松森さんが言われたのは、投影したスクリーンの中に字幕を入れるという方法が「選択肢の１つとしてほしい」と言われたんですよね。

すべての映画に字幕を入れてほしいという意味ではないと思います。私たち聞こえないものが参加しない映画上映もあると思うので、そういうときにわざわざ付ける必要はない。

実際、私たちが映画館に行って字幕がほしいと思ったときに、見られる環境が必要だと思います。そのためのシステムの１つとして、音声透かしは有望な方法だと思います。例えば、視覚障害の方で弱視の方のなかには、映画の中に字幕があると、チラチラして観づらいという意見もあるんです。

「ニーズのコンフリクト」といいます。ニーズがかみ合う人、かみ合わない人がいます。聞こえる人のなかにも、字幕がほしいという人もいれば、邪魔だという意見もあると聞いています。すべての方に対応する方法として、音声透かしの方法を使ってもらえればいいと思います。

また、機械がないと見られないという場合は、難しい面ですが、映画館に実際に行ったとき字幕が見られる状況になっていることが必要になってくるんじゃないかと思われます。

この辺り、機材の準備も必要になります。映画館の皆さんの努力も必要になって、ここも苦しい点だと思っています。

→（華頂）一方の音声ガイドのことを考えてみると、これはこのシステムが最上です。冒頭で川野さんからご説明のあったとおり、音声ガイドを付けるときは、それを上映する劇場にボランティアが行き、FM電波で送信する装置をつけてやっている。まさに限定された上映しかできない。ところが、このシステムを使うと自分で持ち込んだ機器からイヤホンで聴くことができます。きっと視覚障害者の方から昔ながらのFM電波のほうがいいという話にはならないと思います。

視覚障害者情報提供施設の立場からの意見

● 天野 繁隆（社会福祉法人 日本点字図書館 館長）

今の議論を聞いていて、大杉さんの哲学、製作の部分の哲学、ビジネスの部分からのお話もありました。本当にそうだなと。

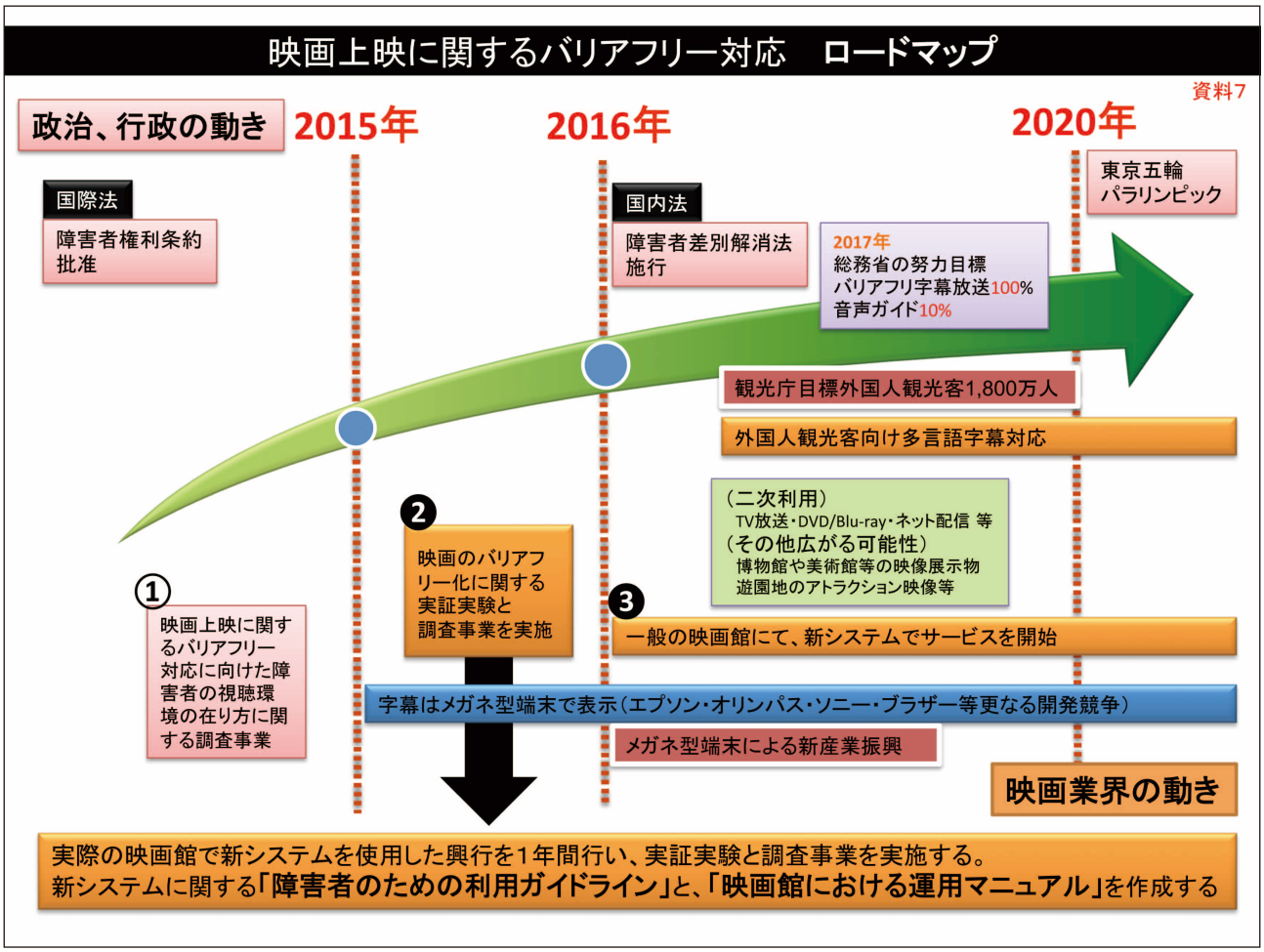
単純に言ってしまえば、私どもは、実際に世の中にあるいろいろな情報、墨字の情報をはじめ、それをどう視覚障害者にどう伝えようかと、存在する施設です。

視覚障害者の方が情報を得ているトップはテレビです。動画を見ているという意味ではなくて。ただ、動画・映像も情報だということで、そこにある情報を視覚障害者に伝えるにはどうするか…、それしか考えていない組織です。

結論からいえば、今回、新しい技術というものは、今、華頂さんも発言されましたが、画期的なものだと思います。各劇場に経済的な、新たな投資を求めることなく導入できる。利用者も固定された位置でなくても普通に鑑賞できる。

私どもが10年ほど前、600万円ほどをかけて、DVDガイドを同期するソフトをつくりました。それでやってきましたが、それは、やむを得ぬシステム。もしそうではなくて視覚障害者も聴覚障害者も普通に劇場に行って、いつでも観られるシステムがあるのなら、それが一番望ましい形です。

全体として新システムをどう、映画館に導入していくかを議論していくことは、私はぜひ、そのことに集約して何とか実現でき



資料7 バリアフリー映画ロードマップ

るような方向に議論が進めばいいなと思っています。

障害があろうがなかろうが、映画を中心とした動画を観たいという欲求はあります。

世界的な法律も変わり、差別解消法もできるなかで、何らかの対応を我々はしていかないといけない。そのなかで、このシステムを進めていってほしいと思います。

ただ私も、20年ほど前に、アナログ世界からデジタル世界にきました。劣化しないといいながら。しかし、気がついてみたら、アナログの方がシステムとしては長生きなんです。例えば、オープンテープは35年という寿命があったにも関わらず、デジタルは10年ぐらいで、すでにシステムが変わってしまう。それはもうやむを得ないこと。

より普遍的なものをチョイスして進むしかないんだと思っています。皆さんの議論を聞いていて、そんなふうに思いました。

映画上映に関するバリアフリー対応ロードマップ（資料７）
（川野）

政治、行政の動きと映画業界の動きとしてロードマップをつくっています。

2016年がまず、１つのターゲットとして、国内法での障害者差別解消法が施行されます。そこに向けての動き。

一般の映画館で新システムサービスを開始するという１つの目標。その先には、東京オリンピック・パラリンピック、その他、二次利用もありますが、こういうロードマップで動こうとしています。

意見

（華頂）私も知らなかったですが、今日は臼井さんから、劇場の無人化の話とか、いろいろなことが出てきました。無人とはいっても、劇場の運用を充実したものにしないと、なかなかこのシステムも稼働できないと思いました。

→（川野）課題に入れて議論していきたいと思います。

オブザーバーの皆様からのご意見

●柏原 恭子
（経済産業省　商務情報政策局
文化情報関連産業課 課長）

私もいろいろな視点で、経済産業省はビジネスとしての映画産業を見ていますが、いろいろな観点でこの問題、多角的に見ていく必要があるなと痛感しました。

実際、この新システムの実証実験を行ううえではいろいろな課題があると思いますが、そこはていね

いに、多角的視点でのご意見を、整理しながら進めていただければと思います。よろしくお願いします。ありがとうございました。

●加藤 敬
（文化庁 文化部芸術文化課 課長）

文化庁としましては、既にバリアフリー字幕制作支援の取り組みをさせていただいています。今日はいろいろと技術的な問題などの取り組みがなされていることがわかりましたので、勉強させていただきました。ありがとうございました。

●川又 竹男
（厚生労働省 社会・援護局
障害保健福祉部企画課長）

ロードマップにもありますが、来年度から障害者差別解消法も実施されるなど、いろいろな業界ごとのガイドラインができてくると思います。そのような動きが世の中全体として出てくると思いますので、そのなかで新しい技術を活用したものが活かされていけばと思います。実証実験に期待したいと思います。

4. 閉会（山上）

本日は、皆さんに中身のあるご議論をいただいたと思います。ありがとうございました。

先ほどから何度か出ましたが、障害者差別解消法が2016年4月から施行になります。こういう法律はあくまでも私たちの議論のなかでは、情報保障としての入り口の議論だと思っています。

今回、経済産業省からいただいています調査事業、そして、来年の実証実験に至りましては、情報保障の面だけでなく、新しいビジネスモデルとしてバリアフリー映画を位置づけていくというご意思とご議論があったと思います。ここのところは映画業界の皆さん、映画の製作者、配給者、映画館の皆さんのご協力を得ながら、映画の業界が一段前に進みやすい形で、この新技術を生かした実証実験にもっていけたらと思います。

今日いただいた障害当事者の皆さんからの厳しいご意見も含めて、来年は実証実験のなかで映画業界として、ぜひご協力を賜りたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。今日はどうもありがとうございました。

4章

まとめ

まとめ

NPO法人メディア・アクセス・サポートセンター（MASC）では、経済産業省による平成26年度コンテンツ産業強化対策支援事業の一環として、「映画上映に関するバリアフリー対応に向けた障害者の視聴環境の在り方に関する調査事業」を実施した。

本調査事業では、障害者差別解消法の理念に合致する視聴覚障害者への情報保障のアクションプランとして、映画のバリアフリー化及びバリアフリー映画の普及に向け、映画産業界が取り組むべき措置に関する提言及び指針をまとめることとした。

そのための調査として、「障害者に対する視聴環境の現状に関する調査」「映画字幕及び音声情報の技術開発動向等に関する調査」「障害者に対する適切な視聴環境の在り方に関して映画産業界が取り組むべき指針を取りまとめるための有識者会議の開催」の３つを柱に調査事業を実施した。

調査結果については、本報告書の１章から３章にまとめた通りであるが、本調査事業でもっとも大きな成果となったのは、MASCが独自に開発した以下の新技術が、実際の映画館での実用化に向けて高い評価を受けたことである。

映画の本編音声に「音声電子透かし」を埋め込み、スマートフォンアプリで日本語字幕及び音声ガイドを同期させ、市販のメガネ型端末（HMD）に表示するという視聴覚障害者を対象とした、新しい映画鑑賞技術は、映画館における今後の情報保障にもっとも有効性を持ったものであることが確認された。

本技術を使えば、映画館に新たな設備投資の負担を強いることなく、映画館のバリアフリー視聴環境の整備が進められる点も評価された。

また今回の調査で、障害当事者も一般とほぼ同じ比率で映画鑑賞しており、バリアフリー映画が増え新技術による視聴環境が改善されれば、映画館の観客動員につながり、映画業界全体の売上向上にも貢献することが期待された。

加えて本技術は、映画館だけでなくさまざまな施設への導入や、あるいは緊急災害時の情報保障にも対応が可能であり、また、2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けた多言語対応も可能ではないかという点が、有識者会議で評価された。

これは、本新技術がバリアフリー及び多言語対応といった情報保障に関する標準化への大きな可能性を持ったものであることを裏付けた。

「音声電子透かし」を使った新しい映画鑑賞技術を実際の映画館に導入するためには、利用者としての視聴覚障害者への利用の手引及び映画館スタッフへのマニュアル作りなどの課題があり、今後は映画館での通常の営業時間帯における実証実験への取り組みの必要性が、障害当事者及び映画業界から提言された。

特定非営利活動法人メディア・アクセス・サポートセンター
理事長 山上徹二郎

平成26年度
コンテンツ産業強化対策支援事業

映画上映に関する
バリアフリー対応に向けた
障害者の視聴環境の
在り方に関する調査事業

発行日

2015年 3 月31日

編集

特定非営利活動法人
メディア・アクセス・サポートセンター

デザイン

高石巧

発行

〒164-0011
東京都中野区中央2-9-1
サン・ロータスビル401
TEL 03-5937-2230
FAX 03-5937-2233

特定非営利活動法人
メディア・アクセス・サポートセンター

理事長

山上 徹二郎（協同組合 日本映画製作者協会 理事）

理事

華頂 尚隆（一般社団法人 日本映画製作者連盟 事務局長）
後藤 健郎（一般社団法人 日本映像ソフト協会 専務理事／事務局長）
松本 悟　（一般社団法人 日本動画協会 専務理事／事務局長）
下村 忠男（全国興行生活衛生同業組合連合会 事務局長）
川井 節夫（一般社団法人 全日本難聴者・中途失聴者団体連合会 副理事長）
橋口 勇男（社会福祉法人 日本ライトハウス 専務理事）
常世田 良（立命館大学文学部日本文化情報学専攻 教授）
天野 繁隆（社会福祉法人 日本点字図書館 館長）
古迫 智典（株式会社 キュー・テック 取締役）
田中 正博（全国手をつなぐ育成会連合会 常務理事）
大河内 直之（東京大学先端科学技術研究センター 特任研究員）
川野 浩二（事務局長）

監事

松下 和敏（株式会社 キュー・テック 執行役員）

事務局

菊住 吉朗
蒔苗 みほ子
溝渕 萌